
魔法の味はキスの味

長野晃輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法の味はキスの味

【Nコード】

N0150P

【作者名】

長野晃輝

【あらすじ】

科学と同様に魔術が進歩した現代の中で、様々な魔術師たちの思いと願いと色欲と恋心とその他もろもろが錯綜する。キス魔の師匠、純真無垢すぎるパートナー、精霊王の娘の騎士、風の爆裂ボディ魔導師等々のヒロインたちと主人公が織りなす魔術ラブコメらしきものが、今始まる。

「そうだ。京都へ行こう」「師匠。岡山のテレビ紹介ながら何言ってるんですか？」

2 章京都編、始まりました。

用語解説 7月11日更新(前書き)

解説は釣りではありません。(たぶん嘘)

本編中の至らない部分をここで補えたらいいと思います。
正直これは僕の魔法の味の辞書です。

用語解説 7月11日更新

用語解説一（読み方は劇中に準ずる）
アイウエオ順で並んでいます。

芸術家（アーティスト）
魔術師の中で、特に魔術を開発する者を指す。

芸術作品を作るように魔術を作るためにこの名で呼ばれているという。

一部は戦闘中に思い付いた魔術を試すために、トリッキーな戦法をとる。

戦う相手としてはかなり嫌われる。

ちなみに失敗することも多く、巻き込まれてしまうこともあってさらに嫌われている。

しかし、一方で彼らがいなければ魔術の発展はなかったこともあり、一応尊敬はされている。

拳動魔術（アクション）

魔術発動法の一つ。

シンラが証明した想像魔術根源説に従って考案された方式で、一つの行動に一つの魔術を発動すると自分に刷り込ませることで可能となる魔術。

だが、そのためにはまず魔術を使った経験が必要なため、わざわざ発動法を変更する物好きな使用者は少ない。

本編では藤原眞左人、白葉孝広が現在使用中。

想像魔術（イメージション）

魔術発動法の一つ。

想像力を用いて使う魔術のため、何よりもイメージが重要である。想像通りの現象を起こすことができるものの、扱いが上手すぎると無意識のうちに魔術を発動してしまう欠点がある。

原始の魔術と言われている。

火円（インフェルノ・リング）

シンラが使う魔術の一つ。円状の炎を投げて対象物を焼切る魔術。その硬度は高く、並大抵の防御術では防げない。ちなみに炎以外の魔力を用いれば違う属性の円ができる。

永久凍土のゴロー

川瀬五郎の海外での異名。

氷属性の魔術を使うために付けられた異名であると思われるが、実は戦法とその氷の魔術の硬度の高さからつけられている。

爆発（エクスプロージョン）

炎属性の魔術。爆発の威力はさほどなく、爆炎よりも煙で視界を奪うことが目的である。

しかし、発動法によってそれぞれの使用目的がある。

ホムラの魔力を受け取ったシンラが多用する。

影縫い

白葉孝広が使う魔術。

界属性の魔力を用いて、「存在を空間に縫い付ける」ことで動きを封じる。封じられれば、呼吸以外は何も、眼球すら動かすことができない。

また応用すると、「今いる空間とは離れた空間に存在を縫い付ける」ことで空間移動も可能。

鉄鋼手（ガントレット）

御子柴銀が使う魔法出力器。

西洋の鎧の一部をモデルとしていて、指先から肘近くまでを守ることができる。

彼はこれに魔力を宿して直接打撃する憑依魔術を使用する。

貴族

『言葉』

江戸時代の開国以後、朝廷崩壊を乗り越えて現在の日本の政治を行う人物たち、またはその一族を指す言葉。単純に政治をするだけでも、金持ちなだけでも貴族になることはできず、真摯に日本のために行動するものこそが貴族と呼ばれ称される。

経済面においても、彼らは日本の発展を第一に考え行動することこそが、貴族の条件という。

『制度』

作中では日本は民主国家ではなく、家柄の良い者たちや経済力の強い者たちが国を動かしている。言ってしまうえば平安時代以前のままと表面上は変わらない。ただ、人権などが制限されているわけではない。これは国際社会に出るに相応しい国として成長しようと努力した貴族たちの結果であり、あながち悪いことばかりではない。彼らは政治が腐敗する前に彼らが自主的に政治から離れて、次代の育成に取り組んでいる。日本を動かすという誇りの元、彼らは政治を行っているのだ。

旧欧州人

ヨーロッパに住んでいた人々の名称。

作中ではヨーロッパ全土と、一部ロシアが荒野となっていて、人が住める状況ではないために、ヨーロッパ人は他国に移住生活を送っている。

日本も大国に比べ数は少ないが、万単位の旧欧州人が生活してい

る。

図示魔術（グラフィックス）
魔術発動法の一つ。

空間を描く必要があるため、優れた空間認識能力が必要とされる。
図示というが、実際は発動させる場所の情報等を絵で書き込み、
座標を指定することで発動する。

ちなみに絵が下手でも（魔術自体が術者の想像力で発動するため）
一応発動する。

玄武

日本軍魔術師師団団長である川瀬五郎の異名。
四方神の玄武が名の由来。

鋼拳流（こうけんりゅう）

御子柴銀が学んだ魔術の流派の名称。

憑依魔術を広く教えており、多くの門下生を輩出している。

その多さ故に政府からは魔術学校と同等の扱いをされている。

師範は大河清斗。
おおがせいと

なおその魔術の具体的な説明は別名の「鎧崩し」を参考。

硬度

本来は物体の硬さの程度を表す言葉だが、作中では魔術の壊れに
くさのことを示す言葉として使われている。

明確な基準や数値として決められているのだが、作中では今のと
ころオリジナルの魔術が多いため、紹介する機会がないが、あえて
比較して順番で述べると次のようになる。

火円、纏火、不死炎、如意、爆発と炸裂、炎の矢、飛炎の順。な
お炸裂と爆発は威力も術としてもほとんど変わらないため同等扱い。

複合魔術（コンビネーション）

シンラが開発した魔術発動法。

二つ以上の魔術発動法を同時に用いて一つの魔術を発動することができる。

長所として、自身のイメージをより明確にするため、消費魔力の減少や威力の上昇、効果範囲の明確化などがあげられる。

短所として、高い集中力を要するため発動準備中は隙だらけとなる。

残念ながら一部天才肌の魔術師しか使用できないため、普及はしていない。

銀閃の騎士団（シルバー・ナイツ）

旧欧州人と日系欧州人が所属する日本軍の精鋭部隊。

五年前の北方四島奪還戦で活躍し、今では日本軍魔術師団団長の川瀬五郎に絶大な信頼を得ている。

魔術師と一般人が混ざった部隊だが、その結束は固い。

騎士団長は清水マリア。

射出（シュート）

炎属性の魔術の一種。

多くは足の裏に小規模な爆発を起こして、その勢いを利用して高速で移動する。

磁力弾

橋口瑞樹が使う魔術だが、その実広く一般的に使われている。

磁力の塊の球で金属を弾き飛ばすことが可能。

属性では雷属性に区別される。

数値化

演算魔術を用いる際に必要となる無属性魔術。

空間の座標など、演算魔術に必要な情報を目で見ることができるようになる。

これがないければ演算魔術は成り立たない。

魔術学校（スクール）

魔術が発見された時に各国にできた魔術師の学校。正式名称は魔術師養成学校。

十歳から十八歳までの少年少女が魔術を学んでいる。

生徒は初等部（十歳から十二歳まで）、中等部（十三歳から十五歳）、高等部（十五歳から十八歳）に分けられて、魔術指導を受けている。

中退することも可能だが、卒業生と同じく日本魔術師教会に所属しなければならぬ。

ホムラは十四歳で東日本魔術学校を中退している。（というよりもう誰も彼女に教えることができなくなったため抜けた）

朱雀

紅ホムラの異名。

彼女の魔術《不死炎》がその由来ともいわれるが、彼女が日本最強の魔術師四人の一人であることが本当の訳である。

学生（スチューデント）

当然学校に行き、自ら学ぶ者を指す言葉だが、劇中では弟子の反対の意の言葉として使用される。

詠唱魔術（スペル）

魔術発動法の一つ。

特に発動に関して必要な能力は無く、速度、安定性も抜群でオー

ルマイティーな魔術。

必要な言葉を言い、発動するが、慣れていけば魔術の名前を叫べば発動できる。

正裁の天秤（ジャステイバランサー）

魔術と科学がともに協力して、人類に貢献していこうと謳う組織。リーダーはアッセル・リーヒニスト。

精霊

魔法士が魔術を発動する際に使う魔力を提供する異世界の存在。今日の魔術師のほとんどが彼らの力を用いた精霊魔術師であり、一体どれだけの数がいるのか不明。

人間界では寿命の時計が止まるために、不死となる。

普通の人間には不可視の存在だが、精霊と契約すると見えるようになる。

契約者以外には物理的干渉ができない。そのため車などに乗ると契約者に掴まっていけないとその場に置いてけぼりになってしまう。考え方としては幽霊に近い。

普通妙な動物の姿になっているが、サクラに代表される人型の精霊も存在する。

属性

魔力が持つそれぞれの特色を分けたもの。

炎、氷、風、大地、水、雷、闇、光、天、海、界、絶、無属性の十三属性が確認されている。

童貞殺し（チェリーキラー）

ホムラの不名誉なほうの異名。

年下好きのホムラが魔術学校時代に男性関係が酷いことになって

いたために付けられたらしい。

ちなみにキスはしても本番はしていないので本当に童貞は殺していないとのこと（生殺しの故の殺しであることに本人は気づいていない）。

天照の業火（てんしょうのごうか）

ホムラの必殺魔術。

詳細は本編に登場後に追加予定。

あえて予言するがグロイ魔術。

技巧者（デバイサー）

魔法出力器の本体である物から作る者たちの名称。

ホムラの《日暮れの雨》の製作者、大川竜兵などは日本では著名な技巧者。

そういう意味ではシンラも一応技巧者。

ちなみにどこにでもあるものを魔法出力器にする者を工巧者というが劇中で登場する予定がない。

魔法出力器（デバイス）

魔術師が魔術を行使する上で必要な道具。人によっては武器にも使う。

魔術師の魔術発動をサポートする魔術が施されていて、例えば発動場所をより術者の意思を反映させたり、発射系の魔術の発射口にしたりする。

基本的にはどこにでもあるものに魔術を施して魔法出力器にするのだが、専用に道具を作られ、術を施されたものもある。

ニュークリア

科学技術で原子を用いたエネルギー転換法、及び兵器や施設の通称。

あくまでも通称であって本来の名称は個々にある。核関連のものについての代名詞として使われる。

如意（によい）

『魔法出力器』

シンラが自作した魔法出力器。

機械仕掛けで伸縮する。普段は八十センチほどの杖だが、展開すると二メートルの杖。

近接戦ではその長さを瞬時に変化させ、相手の間合いの外と内から自在に攻撃する。

『魔術』

シンラが開発したオリジナル魔術。

憑依魔術に近いが、実は演算魔術と図示魔術の複合魔術。

魔法出力器の如意の先端に槍の先のような鍔を着け、杖を槍として使うことができる。

その鍔は瞬間的に伸縮させることができる。

どれぐらいの長さまで伸びるのか、開発者のシンラにもわからない。

一番長く伸びた例は54メートルぐらい。

筆記魔術（ノート）

魔術発動法の一つ。

詠唱魔術から派生したといわれているが、より緻密な文語表現が必要とされる。

発動速度で詠唱魔術に劣る分、精度で補っている。

ちなみに英単語の *note*（書き留める）からノートという名となっている。

飛炎（ひえん）

炎属性の魔術。

ツバメの形をした炎を対象物にぶつけるための魔術。

本来は速度、追尾力ともに優れている魔術なのだが、3話でホムラがシンラに使用した時はホムラの計算違いで消滅させられた。

日暮れの雨（ひぐれのあめ）

ホムラの使う日本刀型の魔法出力器。

技巧者大川竜兵が作り上げた至高の一品。

魔術を斬るという概念の元、作り上げられた日本刀。

憑依魔術（ひょういまじゅつ）

魔術の種類の名称。

物体や人の周囲に魔力によって発生した具象を途切れることなく発生させる魔術のこと。

不死炎（フエニックス）

ホムラが作ったオリジナルの炎属性の魔術。

元々は飛炎に近い追尾力を高めた魔術だったが、彼女の精霊である《天照》に打ち込み、直接魔力の提供を受けることで爆発的な威力を発揮するようになった。

その形が伝承等で語られる不死鳥の姿に似ていることからホムラが名づけた。

彼女の切り札である。

光円（フォメノン・リング）

シンラがサクラと契約後、開発した魔術。

火円（インフェルノ・リング）を光の魔力を源として転用した魔術である。

圧縮した円状の光を相手に放つ。

飛翔速度が火円よりも向上しているが、硬度が少々低くなっているが、作中でシンラはその性質を理解していない。

なお、シンラの円状の魔術は基本的にデバイスの如意を回転させ、その軌跡をイメージに組み込むことで発動を単純化している。

不定形精霊

本来動物など何かしらの生き物を模した精霊の中で、それらに当てはまらない形をした精霊をそう呼ぶ。

白葉孝広の精霊の『ユグドラシル』が作中では現在登場している。

炎の矢（フレイアロー）

炎属性の魔術。

矢の形をした炎を対象物に飛ばすことで攻撃する。

速度はホムラの使う魔術の中でトップクラスだが、追尾力は皆無。

炸裂（ブレイズ）

炎属性の魔術。

シンラが多用する爆発と似た魔術。

こちらは元々炎がある場所に爆発を起こし、煙と爆風で視界を遮ることが目的の魔術。

攻撃の意図はない。

弟子（マイスター）

魔術を学ぶ者の名称。

一人の魔術師から直接魔術を学ぶ魔術師見習いをそう呼び、学生とは異なるブランドのようにそう呼ぶ。

およそ半数はプライド意識が高いが、そういう者はあまり魔術師として大成しない。

鋼拳流など、多くの魔術師見習いに教える流派というものもあり、その門下生も弟子を名乗っている。シンラなどは真つ当な弟子である。ちなみにホムラは学生だった。

魔術

魔力で事象を変化することを指す。

19世紀に発見されて以来、科学技術と並ぶ技術として研究開発が進んでいる。

魔術師

魔術を使うものを指す名称。

国家の戦力と経済力に影響を与えるものである。

演算魔術（マスマツテイク）

魔術発動法の一つ。

発動位置、威力などを変数として式に入力することで魔術を発動させる。

詠唱魔術や筆記魔術では不可能な正確な位置や威力を実現するため、非常に精密。

本来数式が人のイメージに与える微々たるものだが、魔力で数式を描いて、そのイメージを増幅させることで魔術発動法として成立した。

使用人口がほかの発動法に比べると極端に少ない。

纏火（まといび）

炎属性の魔術。

術者の体の周囲に炎の障壁を発生させて、周囲を焼くと同時に魔術的攻撃からも身を守る憑依魔術の一種。

ちなみに4話でホムラが爆発を受けたのは爆風が魔術的攻撃では

なく、本来は視界を奪うためだけのものだからである。

魔法士

魔術、魔法にかかわる全ての人間の名称。

今のところ魔術師とほとんど意味は変わらない。

魔法師

魔法陣を用いて魔術を発動する魔術師。

複雑で、加えて準備に時間がかかるため数は年々減少傾向にある。

魔法陣を使うため、チヨークなどのものを描くものを魔法出力器にすることが多い。

魔法陣

魔力を用いて、計算や言葉や記号、図形を描き入れて魔術を発動させる陣のこと。

図示魔術と似ているが、地面などの面に直接描かなければ発動しない。

無属性魔力（むぞくせいまいじゅつ）

精霊から提供された魔力を契約者の中で変化させることでようやく生まれる魔力。

魔術による事象から身を守るために使ったり、数値化などの魔術を使うために必要。

これの発見は近代精霊魔術にとって最高の発見だという。

それまでは魔術の攻撃を防ぐにはとりあえず壁に隠れるしかなかった。

鎧崩し

鋼拳流の魔術の別称。

拳をぶつけ魔力を流し込み、敵の体内で小規模の魔術を発動するのが鋼拳流の魔術である。

このため無属性魔術の防御が考案されるまで、船上では鎧で魔術を防ごうという考えを完璧に潰したため、苛立ちを込めてこう呼ばれていた。

もともと、鋼拳流のこの魔術がなければ無属性魔術の考案がさらに遅れたのかもしれない。

当時の人には涙を堪えて煮え湯を飲んでいただくしかない。

ルナタワー

旧欧州人が住んでいた高層ビル。全長二三メートルと都庁に比べ高さを持つ。

中は各販売店や、消防、警察までも配置されているが、テロ事件では真っ先に襲われたため警察は機能しなかった。

『銀閃の騎士団』のメンバーはここに住んでいた。

九州にはもう一つソルタワーという同様の高層ビルが存在する。

用語解説 7月11日更新(後書き)

定期的に更新いたしますので、気になればどうぞ。

キャラ紹介もそのうち出しますが、それはやりたいことがあるので、お待ちください。

1 《炎》（前書き）

この小説はフィクションです。

この小説は釣りです。

ウソです。

この小説は釣りではございません。

それとできるだけ横書きのままご覧下さい。

1 《炎》

18世紀から19世紀にかけて、産業革命と同時に世界各国で新技術が芽吹いた

人はそれを魔術と呼び 瞬く間に世界に広まった。(これというのも西洋の一部から始まった産業革命よりも各地で様々な形で生まれた魔術の方が数の上で広まり易かったのが理由である)

当時の列強国は世界を席卷したこの2つの技術を競うように取り入れていった。各国には優秀な魔術師を輩出するために魔術^{スクール}学校を設立され始めた。科学方面では機械工場が建設され、近代科学技術の集大成である武器や道具を大量に生産していった

日本、英国、米合衆国の3か国は優れた科学技術を早くから取り入れた。圧倒的な威力を誇る魔術よりも、体制さえ整えば爆発的に数を増やす科学技術に未来を見たのだ

しかし科学と魔術、この2つ技術が世界を分かち決め手にはならなかった

??????????

山間の深くの道場で一組の男女が稽古をしていた。

男は黒髪黒目の日本人。女は赤目に赤色の髪をしていた。(断つておくと女の髪は染めていない)

「やあ!」
「によう!」

赤い女の掛け声はいささか奇妙ではあったが、動きは洗礼された騎士のようだ。

女は日本刀型の魔法^{デバイス}出力器を振るい、黒髪の男ののど元を切り裂くべく迫る。

(……つく!)

狙いを理解した男は一步分後ろに下がり、紙一重で刃を避ける。危機が去ったところで彼は自身の杖型の魔法出力器デバイスで突きを繰り出す。

（狙いは脇腹！）

しかし、神速といってもよいほどの速度の突きを、女は上に飛び出して回避する。

（スカートで飛ばないでくださいー！！）

男の恨みがましい視線もどこ吹く風。宙で1回転した女は突き出された魔法出力器を蹴飛ばし、華麗に着地する。反す刀で女は男を右切り上げをするように斜めに刀を振り上げ、斬る直前でピタリと止める。

「ふふふん。あたしんの勝ちいー！」

瞬時に刀を鞘に納め、ガッツポーズをとる。

「師匠。子供みたいにはしゃがないでください」

といっても男が師匠と呼んだ女は19歳。まだまだ少女といっても通じる年（だと自負している）だ。

「ぶー。今日は久々にシャア君に勝ったんだから！」

「ゲームの話をしないでください。それじゃ、僕がシャアっていう名前みたいじゃないですか。僕はシンラですよ」

シンラと名乗った少年はため息を吐きながらバトンのように杖を片手だけで回転させていた。

彼にとつてその杖は扱いなれた獲物のようだ。

「というか僕はこれで通算455敗ですけど？」

「ふふふ。これであたしんが455回君の貞操を奪うんだね。…
…ジュール」

「全く意味が違いますけど。あと、唾が溢れていますよ」

「おっと、ゴクリ」

生唾飲み込むのと、涎を垂らすのとどちらが艶めかしいのだろうとシンラは結構本気で考え始めた。

だから気づいた時には、師匠、紅くれないホムラの整った美人顔が目前に

あった。

何のためらいもなくホムラは少し前に体を動かし、結果二人の唇が重なる。赤い髪から女性特有の甘い香りがシンラの鼻腔をくすぐる。

途端シンラは自分の中に《炎》が流れ込むのを感じた。

熱く甘いホムラの吐息や唾液と舌（何気にホムラは舌を入れ込んでいる）に付随するようにその《炎》はシンラの体に注ぎ込まれる。ホムラはシンラの首両腕を絡ませた。そしてシンラを押し倒すべく、その軽い全体重を掛けていく。

しかし、シンラはホムラよりも頭一つ分背が高い。加えて彼は同年代の少年よりも鍛えられた体をしている。仮にも（これはシンラの主観）女性のホムラがシンラを押し倒すことはできない。

（そうではあるのだが）

シンラは目を閉じたまま貪るようにキスをするホムラを見て、

（男としてこれは精神衛生上この上なく悪い）

師匠であるがホムラとシンラの年齢差はわずか三歳だ。シンラとしても十分恋愛対象内である。

そんな女性からこのようなことをほぼ毎日されているのだ。鈍感だろうがなんだろうがホムラに惹かれるところもあるのだが……。

（この女、^{ひと}キス魔の上に年下喰らいの童貞殺^{チェリーキラー}しだからな）

シンラがホムラに弟子入りしたのは四年前。その時シンラにホムラを紹介した先輩魔導師の忠告が「こいつは無類の年下好きで、数々の魔術師が犠牲になったから、気をつける」である。

当時はそんな人物を紹介するなよとシンラは本気で恨んだが、このホムラの魔術の才覚は世界でもトップクラスのものである。

シンラはある目的を果たすために、この少女に弟子入りした。それは間違ったことではなかったと確信している。

「ちゅ、あは」

少し唇を離して、微笑むホムラはぞつとするほど魅力的だ。

今まで間違いが起こらなかつたことが奇跡だとシンラは思う。

「シンラ君？ どうしたの？」

呆けていたせいか、ホムラは心配げにシンラの瞳を覗き込んだ。
「魔力を送りすぎた？」

このキスは何も二人が恋人だからしているわけではない。（別にホムラがキス魔だからというわけでもない）

魔力とは魔法を使うために必要な力である。

このキスはホムラの魔力をシンラに与えるためにしている。

人間は魔力を生成できない。

これは世界中の人間の共通認識である。

「いえ、そんなことないですよ」

すぐに笑顔で否定する。

「そう？ ならいいんだけど」

とまたしても大抵の男を落とせるであろう小悪魔的な笑顔を見せる。この師匠は本当にモデルでもしていたらいいのにと本気で思うシンラ。

魔力を生成できない人間がどうして魔法を使うことができるのか。

それは人外の存在に魔力を分け与えてもらうためである。

その存在は精霊と呼ばれている。

「さて、大丈夫なら第二ラウンド行くわよ。二ラウンド目は魔法技術対決う〜！」

「はい！」

あえて強く返事をした。そうしないと彼女の唇や香り、その頬の火照りを意識して訓練にならなくなる。

「今度は負けませんよ！」

シンラは不敵に笑う。

「にひひひ！ 456回目の貞操はいただきだよ！」

と言いながらもホムラは自身の敗北を悟っていた。

この弟子の魔力行使能力はすでに自分を上回っている。そんなこともわからないほど、彼女の洞察力は低いものではなかったのである。

魔法使いは時空の異なる世界の住人たる精霊と契約し、その魔力を提供してもらうことによって魔法を行使する。

魔術師（余談だが魔法に関係する者全てを魔法士という。魔術師は特に魔力を使った事象変化を行う魔法士の呼称である）の器量というのは契約した精霊の力量、および魔力の行使の上手さがものをいう。

しかし、魔力を使う訓練を行わなければ精霊は術師と契約を結ばない。一部の天才以外は訓練は必要不可欠なものだ。

魔力を持たない魔術師見習いに訓練をつけるのは、魔力の提供を受ける先達の魔術師たちである。

先輩魔術師は自身が精霊から提供された魔力を見習いに貸し与え、魔力の使い方、ひいては魔術を教えるのだ。（しかし、これでは魔術師の原点がわからないのだがそれはまた別の機会に語るであろう）ホムラとシンラのような関係がそれであるのだが、二人の場合はなかなか特殊だ。

ホムラは魔力の提供に先ほどのようなキスが必要だとシンラを騙していたのである。

回数にして247回目のキスを受けたあたりで自分と同様の魔術師見習いの仲間と出会い、ようやくその事実に至ったのだ。

それを正したのだが、ホムラはキス以外の魔力授与方法はいやだとなげたため、勝負でその方法を決めることで合意したのであった。

ホムラが勝てば、キスをする。

シンラが勝てば、キスなしで魔力を与える。

といった具合である。

実にくだらないと思われることであるが、当人たちは本気で問題にすることである。

いい加減にこの生活から解放されたいと願うシンラだったがその時は確実に近づいていた。

1 《炎》（後書き）

釣りじゃなかったでしょうか？

内容があれですので更新がまばらになるかもしれませんが、平にご容赦を。

どうぞ長くお付き合いくださいませ。

2 最終試練（前書き）

この小説はフィクションです。
今回は釣り要素は少ないかもしれませんが。

2 最終試練

1895年世界初の魔術と科学を使った戦争が始まった
きっかけは当時のイギリスの皇太子がフランスの魔術師に暗殺さ
れたことだ

フランスは国家の干渉を否定したが、犯人の魔術師が国家の暗部
の仕事を引き受けていた事実からイギリスは報復のために戦争を仕
掛けた。(これにはその時のイギリスが植民地主義に則った支配活
動を盛んに行っていた背景がある)

科学的進歩を遂げたイギリスは、最先端の兵器である戦車や改良
した戦艦や潜水艦、また一部では飛行機を使って戦争を有利に進め
た

しかし、フランスの魔術師全員が協力し発動した大規模魔術によ
り互いの国だけでなくヨーロッパ一帯が大きなダメージを受けるこ
とになった。

自然は枯れ果て、人の住めるような土地でなくなった欧州の回復
には100年はかかるといわれていた

科学と魔法がぶつかり合う戦争の皮肉さを世界に伝え、この戦争
は終結した

それから100年以上が経過した現在、科学と魔法を使った戦争
は起きず、対話による世界統治が今もなお行われている

??????????

シンラとホームラが稽古をしていた道場のある山の麓に、シンラは
家を借りて住んでいる。

456回目のキスを防いだシンラはくたくたになっていた。

風呂に入らずに寝てしまったため、翌朝にシャワーを浴びてから
彼は道場に向かう。

(今日は何を作るのか?)

そんなことを考えながら朝の市場をうろつくシンラは手慣れた感じで食材を見ていく。

道場には調理場があるため、普段からそこで稽古をしているシンラは借りた家よりも、道場で食事を取ることが多い。

食事の度に山を上り下りするのは体力には自信があるシンラでも遠慮したくなることだ。(一時期は体力向上のために敢えて家と道場を往復していたが、今のシンラは体力よりも魔力を使うための訓練が必要なために止めている)

馴染みの店に顔を出して商品を見ているときだった。

「おう！ シンラ、今から道場にいくのか？」

よく言って快活な、悪く言って無遠慮な声がかけられた。

面倒くさそうにゆっくりと振り返り半眼になって睨み付けた。

そこには身長180センチを超えた巨漢が立っていた。

ぼたぼたと汗を掻いている男の年はシンラと同じ年かそれより上だろう。

ランニングシャツというラフな格好をしている男の両腕には腕を守るための白金の鉄鋼手ガントレットが着けられていた。

「朝から五月蠅いぞ、銀」

「朝からシケた顔してんなシンラ」

巨漢の名は御子柴銀みこしばぎん。シンラと同じ魔術師である。

「今日もごくろうだな」

シンラは冷たく言いながらさっさと退散した方がこの店のためだなと思い、会計を済ませた。

「おう！ 俺は体力がないからな」

「代わりに瞬間的な力があるだろう？」

「一発屋みたいで嫌だな。その言い方。というか体力なかったら俺の場合致命的だぞ？」

苦笑いしている銀を尻目に、シンラはさっさと買い物を済ませる。「お前みたいに遠距離魔術が得意ならいいんだけど、俺はそういう

のは苦手だしな」

「知るかと思いなながらシンラは朝の人混みを抜けていく。

「待てよ！」

慌てたのか銀は少し声を荒げた。

ため息を吐いてシンラは茶屋の近くで銀を待つ。あの巨漢ならここがわかると考え、敢えて離れた結果である。まあ、巨漢ゆえにここにたどり着くのはもう暫く掛かるだろうが。

銀とシンラが出会ったのもこの朝市だった。

いつも通りに買い物物を済ませ、家を出たときにあの巨漢が声を掛けてきたのだ。

「お前魔術師だろう？」

「そうだが、君もか？」

魔法出力器デハイスを見ながら言われたのでおそらくそうなのだろうと見当をつけてシンラはそう返した。

「おう！ 由緒正しき鋼拳流派の魔術師、御子柴銀だ」

鋼拳流とは確か魔力を己の拳に集め、放つことを得意とした魔術師の流派だったはずだとシンラは思い出しながら、

「俺は紅先生に魔術を教わっているシンラ・ミトセだ」

「お前、日本人なのに名前を先に言うのか？」

「ああ、まあいろいろあつてな」

「まあいいけど。それで紅つて言ったらあの童貞殺チェリーキラーしか？」

ああ、こんなところにまであなたの名は轟いてますよ。師匠。

本気で泣きたくなつたが今は我慢する時だ。

「ああ。そうだけど」

「教わってる、てことはまだ契約はまだなのか？」

契約とはもちろん魔術を使うために精霊と行う契約のことだ。

「ああ、俺はまだ弟子止まりだよ」

弟子とは魔術を師から直接学ぶ魔術師見習いを指す言葉である。

反対の意味として魔術学校で魔術を学ぶものを学生と呼ぶ。

「そうか。なんか嬉しいな。俺、自分以外で弟子を見たことがなくてな。なんか親近感が湧くよ」

そんな風にして銀とシンラは出会ったのだが、その結果としてホムラのキスが魔力を渡すのに、実は何の意味もないことだと知ることになる。

シンラにとっては喜ぶべきか悲しむべきか非常に判断に困る出会いだっただ。

「しかしまあ羨ましい限りだぜ。あんな美人の師匠に毎日のようにキスされてるなんてさ」

魔法出力器を取ってから道場へと向かう道則に銀は付いて行く。

「どこがだよ？ そのうち俺は結婚できなくなりそうで震えているというのに」

本気でそう思っているのだからこの男は、と銀は頭を抱える。

「いくら年下好きの紅先生だからってあんなにお前に執着しないだろう？ あの人がだって本気じゃないのか？」

「そうは言ってもな。本気だろうがなんだろうが、浮気の心配を年がら年中かけてくれそうなあの人とそういう関係になれるとは思えないんだよ」

この鈍感があー！ と再び頭を抱える銀。シンラが前を見て歩いているから良かったものの、もし振り返った時この男はなんというのだろうか。

「いい加減開放して欲しいよ」

「だったら、さっさと契約済まして、弟子を卒業したらいいじゃないか」

いい加減に言ってからしまったと銀は後悔した。後押しするつもりなんてさらさらなかったのに、あまりの鈍感さに呆れて口を滑らしてしまった銀は、考え込むシンラに別の話題を提供することにした。

「それよりさ、またこの魔法出力器を調整してくれないか？」

銀は自分の鉄鋼手を指さしながら乾いた笑みを浮かべる。

「魔法出力器は別に機械みたくこまめに調整する必要はないだろう？」

自身の杖の形をした魔法出力器を軽く持ち上げながらシンラは言う。

魔術師にとって魔法出力器とは魔術の発射口にして、照準器、武器にして、防具である。

射出系、および照射の魔術なら発射口になり、座標指定系の魔術なら照準器、戦闘時は近接武器や防御にも使える。

魔術師になくなくてはならないものがこの魔法出力器である。

「だけど、定期的に見てやらないと誤発ミスファイクが起こるかもしれないだろう？」

誤発とは銃の不発のように魔術が発動しなかったり、使うつもりもないのに魔術が発動してしまったりすることである。

「だとしてもだ。俺がやるより自分でやる方がいいだろう？」

「お前がやった方が使い勝手がいいんだよ。頼めるか？」

「ああ、まあ分かった。そのうち渡してくれ。中の式は弄ってもいいんだな？」

「おお！ いいぞ。むしろどんどん弄ってくれ」

気持ち悪いなと思いつつ銀は諦めたように息を吐く。

(結局この鈍感の意味を逸らすことはできなかつたな)

シンラは眼に何か意思のようなものを宿していた。

??????????

「師匠、折り入って話があります」

いつもの道場の脇にある和室(ちなみにホムラはこの部屋で生活している)で朝食をホムラとともに取っていたシンラが気を見計らって、その話題を切り出した。

「ふあ何に？ しんシンラ君ふあふん？」

「いや、食べ終わってからでいいですよ？」

「ふありあふおう」

苦笑いを浮かべる。そんなリスみたいに頬一杯に溜めなくてもいいのに。

ホムラが食べ終わるのを見届けてから、改めて切り出す。

「師匠、僕に精霊との契約の方法を教えてください」

シンラの口調（真面目な時彼は一人称が僕になる）にホムラもきりつと表情を変える。

「ようやくね。シンラ君は自分から動かないから、このままずっと弟子でいるつもりなのかと思っちゃったよ。まああたしはそつちのほうがよかつたけどなあ。くつくつく」

シンラはホムラの茶々にも反応せずに、じっとその言葉を待っている。

にひつとホムラはいたずらっ子のように笑う。

「それじゃ、道場に行こうか」

それは提案ではなく指示だった。

二人は対峙していた。

二人のその手には己の魔法出力器を固く握っている。

「これは師匠から弟子への最後の試練だよ。あたしに習った魔術、武術、その他もろもろの技術を使ってあたしを倒せばクリアね」

二人の服装は先程までの流行の服の上にマントを羽織っていた。

これは魔術師の正装である。魔術師界ではマントかもしくはローブを着ることが人への敬意であり、自身の誇りを示すことを意味する。

ホムラは刀を振るうために動きやすいよう自身で切り刻んだ赤と黒のマントを、シンラは真新しい黒いマントをそれぞれ羽織る。

「じゃ、始めようか」

すつとホムラは音もなくシンラに歩み寄る。

どんな攻撃が来るかわからないので、隙のない構えを取っていたシ

ンラに。

ホムラはキスをした。いつものような激しく求めるようなキスではない。軽く触れあっただけで彼女の方から離れていく。

「ぐう!!」

しかし違いはそれだけではなかった。

シンラの体に残っていた魔力。ホムラから与えられたその《炎》の魔力の大半が持ち主の元に帰った。

しかし、シンラはわかっている。彼女は奪ったのだ。その力を。これで勝負は苦しくなった。

そうシンラは痛感し、改めて魔法出力器デバイスを握り直す。

「魔術師の愛の語らいは、互いを喰らい合うように……」
赤く輝く炎の申し子は歌うように、呪文のようにその言葉を告げる。

「おいで、愛弟子マイスター」

2 最終試練（後書き）

意外に早く出せました。

次回は師弟対決です！

キスはありません！！！！

残念！！

? 誤字脱字がありましたので修正しました。

3 師弟対決（前書き）

この小説はフィクションです。

この小説は、痛快バトルラブコメです！！！！

……自信はありませんがきつとそうです。

3 師弟対決

魔法士の世界を震撼させた発見が精霊の発見である

過去には霊力や精神力という人間に宿っている（であろう）力こそが魔力であるという意見が主流であった。（副流として神への祈り等によって齎される神力が魔力という意見もあった）

精霊の発見はこれらの意見を衰退の道へと陥れた

現在では魔術師のほとんど全てが精霊の力を借りて魔術を使う精霊魔術師である。（魔術師だけに限った話であり、一部では未だに神力を使うと主張する魔法士もごく僅かに存在する）

精霊が人間と接触を持ったのは偶発的なものだった

精霊の世界と人間の世界は隣接しているらしい。そして、精霊の世界では存在するものは全て役割を持っているという。存在が壊れる決まった日まで、精霊は役目を果たし続ける。存在が壊れる時、後任の精霊が誕生する。故に役目を果たすものがいなくなることはない

あるときどこかの精霊がたまたま人間の世界に紛れ込んだ。精霊は壊れる日が間近に迫っており、この異界で死ぬのかと考えたようだがいつまで経ってもその存在が壊れることはなかった

その精霊は長い時間をかけて精霊界に帰還し、そのことを同胞に知らせたという

これが精霊の人間界来訪のきっかけだ

??????????

赤く輝く瞳に弟子を映しながら、その魔術師は呟くように言葉を

放つ。

「フレイズ
炸裂」

その一言だけで道場に灰色の煙がシンラとホムラの間差点から発

生し、瞬く間にそれはシンラの視界を遮った。

その時、

バコオオオン！！

冗談のような音が聞こえて、充滿していた煙は吹き飛んだ。

視界が開いたシンラの前にはその師匠はいなかった。

ふとシンラは道場の入り口の引き戸を見る。

締める余裕もなかったのか、その戸は完全に開いたまま放置されていた。

ふつと微笑みシンラは獲物を追い詰めるハンターの気分で戸へ一歩踏み出した。

「ふい〜〜〜」

気の抜けた顔で大樹の枝に座ったホムラはその樹を背もたれにしてため息を吐いた。

「いきなり逃げるなんて、らしくないわねホムラ」
どこからか聞こえた成熟した女性の声にホムラはむっと顔を顰めながら虚空を睨み付ける。

いや虚空ではない。そこには文鳥サイズの赤い小さな鳥が浮かんでいた。

飛んでいるのではない。まるでそこに見えない枝が有るかのよう
に留まっているのだ。

この小鳥の姿をしたものこそ彼女が契約する精霊《天照》アマテラスだ。

「うるさいわね。あたしんだって逃げたくなかったわよ」

「逃げたことを責めてるわけじゃないのよ？ ただ珍しかっただけ」

ふふふと笑うように小鳥は全身を揺らす。

「まあ、彼といきなり道場で全力をぶつかるわけにはいかないけどね」

そんなことをしたら大変だ。あそこ借家なのよ。と何やら妙に現実的なことを考えていたホムラだったが、周囲を警戒しながら相棒に一言漏らす。

「あたしんは全力出せないのよ？　そこはわかってよ」
精霊との契約は現代の魔術師になる必須条件だ。

故に基本的に最終試練では師は弟子に対して本気を出さない。（そもそも借り物の魔力を使っている弟子は師に本気を出されると勝てない）

故に魔力に何らかの制限をつけるか、魔術式の種類を極端に減らすかしない限り、普通弟子が師に勝てる道理がない。技術も経験も圧倒的に足りないのだから。

根本的な人数が不足気味の魔術師界にとって新人の育成は急務であり、その関門を難しくするのは魔術師界全体の損失になる。

そのため、早く一人前として世間に出すよう、最終試験で師は手を抜くのだ。

加えてもう一つの理由として、精霊と契約するために必要な技量はそれほど高いものではないことが挙げられる。

精霊との契約は、魔術師が精霊に語りかけるだけ。それに精霊が答えれば契約成立。答えなければ答えてくれる精霊が来るまで何度でも繰り返す。そうすればそのうち精霊は寄ってくるものだとわわられている。

精霊は技量やらの魔術師的器ではなく、性格や波長などが合う人物かどうかを契約者を決める基準としている。完全に自分の趣味で契約を決めてしまうのだ。（このため優秀な魔術師だからと言って、精霊が優秀だとは限らないことがままある）

その点このホムラは魔術師的な器だけでなく精霊にも恵まれていた。

「あたしんが本気でしたら、この山ぐらい消し飛ぶでしょう？」

『そうね。貴女の力じゃなくて、主に私の魔力が多いのが理由だけ』

《炎》の精霊の中でも、《天照》の力は特別なものだ。

まず魔力の桁が違う。魔力の桁は発動できる魔術の種類やその質（具体的には威力や規模）の違いを表す。

しかし、それ故の扱い難さが目立つ。（ホムラにはいまいちその辺りの事情が分かっているのではないので、らしい、という接尾語が付くが）その力を行使できるホムラも特別な魔術師であるということだ。

「取りあえず《天照の業火》てんしやう クラスの魔術は使えないね」

「なら、《不死炎》ふにんくわ は？」

「その位なら使ってもいいわね」

にやりとホムラは笑い、後ろから迫り来る足音に耳を澄ませた。

道場から出てしばらくして、シンラは自身の魔法出力器デバイスに仕込まれた式の一つを起動した。

《数値化》と呼ばれる式である。

これは空間の座標をその目で見るための魔術だ。（事象を変化させている訳ではないので、厳密には魔法に分類される）

この《数値化》は演算魔術マスマッテイクと呼ばれる魔術を使うためになくなくてはならない下準備のようなものだ。

演算魔術は発動する座標と効力を等式で表し、発動する魔術だ。

式の入力に時間はかかるが、座標指定の魔術のため他の魔術よりも正確な場所で発動可能ところが演算魔術の特徴だ。

数値化自体、本来は大規模魔術などの準備に手間がかかり、位置を間違えると大変なことになる魔術に用いられる補助用の魔術である。

他にも想像魔術イマジネーション、詠唱魔術スベル（ホムラが使う魔術はこれである）、筆記魔術ノート、図示魔術グラフィックスなどがある。

しかし、シンラが使う魔術は実はこのどれでもない。

彼が使う魔術は複合魔術コンビネーションと名付けられた。オリジナルである。

ホムラは持ち前の魔力探查能力で《数値化》が発動したことに気付いた。

魔法出力器デバイスを握り直し、いつでも飛び出せるように準備をしていた。

そのことが幸いしたのだろう。

「エクスペロージョン《爆発》！」

そのシンラの声と共に目と鼻の先で発動したエクスペロージョン《爆発》の魔術を紙一重で回避したのだから。

《爆発》は魔力で可燃物質を生成し、少ない魔力で爆発起こす《炎》属性の魔術だ。

（あぶな〜）

樹から飛び降りたホムラは爆風に飛ばされながらも、超人的運動神経で着地を成功させていた。

これこそが彼の魔術、コンビネーション複合魔術。

今のは演算魔術による正確な座標と、短い詠唱による発動時間の短縮化に成功したシンラ独自の魔術だ。

《爆発》自体炎の魔術ではありふれたものだが、スベル詠唱魔術ではあまり効力がない。

精々爆風で視界を奪うのが関の山であるのだが、

（マスマッテイク演算魔術で同時に位置を魔術式に入力することによって、任意の場所で発動させる、ね）

これにより爆風をもろに食らうことになり、気絶してしまっていたかもしれない。

これを初めてシンラが作り上げたとき、ホムラはこの弟子を誇りに思ったものだ。

この技術は魔術研究と魔術師の育成において大きな変革を齎せるものだ。

すぐさま樹を離れ森で息を潜め、静かに時を待つ。

魔術の研究で、想像、詠唱、演算、図示等の魔術はそれぞれ別の発生源があり、同種の魔法でも、術の違いがあるとされている。

先程シンラが使った魔術エクスペロージョン《爆発》を例にしてみると、マスマッテイク演算魔術のエクスペロージョン《爆発》と詠唱魔術のエクスペロージョン《爆発》はそれぞれ別のものであるといわれているのだ。

しかし、彼の使った複合魔術はこの説に反したものだ。
シンラは詠唱魔術の《爆発》に座標指定に演算魔術の《爆発》同時に発動したのだ。

魔術のそれぞれの特徴で欠点を補ったとっていいだろう。
詠唱魔術は一般に広く用いられている魔術で、これが基準と言われている。

想像魔術は、魔術の発動した場面を文字通りイメージするだけなので、速度に秀でていいる。しかし、発動位置や威力が曖昧なまま発動するのが欠点と言える。

演算及び、図示魔術は座標を指定して魔術を発動できるため、その正確性が特徴の魔術だがそれと引き換えに発動速度を失った。

シンラの複合魔術はこれらの魔術の根源にあるのが想像魔術であることを証明した。

全ての魔術は魔術師の想像力を使う想像魔術によって発動する。そして、他の魔術はその想像を補強するために生まれた魔術であることが真実だった。

(……あたしんがいつまでも隠れている訳にはいかないね)

(反撃開始、ね)

契約した精霊と魔術師はその意識をリンクさせ、他の人には聞けないように会話ができる。

ホムラは音もなく森を走り抜けた。

「放て炎の矢！」

ホムラの叫びとともに彼女を頭上、左手と右手の周囲の計3か所に炎が発生した。

その炎は瞬く間に矢の形を成してシンラのもとへと飛翔する。

シンラはいち早くその魔術の発動を感知したのか、自身の杖の形をした魔法出力器を正面でバントワリングのように片手だけで回転させる。

その魔法出力器には無属性の魔力が込められていた。無属性魔力とはホムラのように特別な事象を起こせるものではないが、魔力同

士の衝突時において万能な力を持つ。（魔力同士の相性などのため、属性を持つ魔力は万能とは言えない）

故に無属性魔力は防御魔術として多用されている。

なお、魔力を無属性化するには人間が体内で魔力を操る必要があり、精霊から与えられた時点では魔力は精霊の属性を反映している。

（ちなみに《天照》は《炎》に属している）

（甘いんだよ、シンラ）

赤い少女はにやりと笑う。

そして右手の親指と人差し指を合わせ、

パン！という大きな音をたてた。

それと同時に3条の炎の矢がシンラの手前で爆散した。

これは指の鳴る音を発動キーとしたホムラの詠唱スベル魔術の一種だ。

爆発に一番近い音を発動のための詠唱として使い、魔術の式に仕込まれた起爆装置を起動することが可能になる。

つまり、ホムラの魔術は全て魔術を構成する式に爆弾が仕掛けられているのだ。

爆風の起こした土煙りで見えない弟子に向かってホムラは刀の形状をした魔法出力器『日暮れの雨』デハイスを構える。

喜ばしいことか否か、彼女の弟子はこれぐらいで倒れるようなやわな男ではないのだ。

「師匠、これはマジですね。俺を殺してもいいとか考えていませんでしたか？」

「いんやー、あたしんはそんなことは考えてなかったよ？ただ、吹き飛ばされて肋骨の1、2本でも折れてくれればなあ〜と思ってただけだよ」

「いやいや、目の前で《爆散》ブレイズを発動した人が何を言いますか」

「それを言うならシンラもあたしんの目の前に《爆発》エクスプロージョンを発動させたよね？あれは素人なら死んでるよ？」

「玄人がなにをほざきやがりますか」

いまさら思うがこの弟子の態度は師に対するそれではない。

煙が去ったのちに見えてきたシンラは、服装こそ汚れていたが目立った外傷もなく無傷だった。

彼のその手にある魔法出力器デハイスが先ほどまでの片手に持ちやすいサイズから2倍近くにまで伸びていた。

これこそが彼の魔法出力器『如意』の最大の特徴だった。

機械技術を用いた『如意』は仕込まれた式に無属性魔力を込めることでその長さを約0.8mから最大で2mまでの間で伸縮させることができる。それも一瞬のうちだ。

シンラにとって魔法出力器デハイスの長さを変えることは魔術の効果範囲、精度、照準、消費魔力量を変えることになる。

それは望遠鏡のスコープの倍率を変えることに似ている。魔術的に見える範囲が変わるのだ。

《数値化》を例に挙げると座標を表示できる距離が変わる。今の無属性の防衛魔術なら、迫りくる炎の矢フレイアローを防ぐための固く小さな盾から、爆風という広い範囲の攻撃を防ぐための障壁に変化したといえる。

「次はこちらから行きます」

わざわざ宣言するということがどうということなのか、当然ホムラにも分かっていった。

（挑発ね。乗る必要はないわ）

そんな冷静な『天照』の結論が正しいとは思う。

（だけど、弟子の自信を正面から叩き潰すのが師匠の役目だと思うんだ）

（あのね……。貴女、自分の価値観で動きすぎよ）

どう言われようとホムラはシンラの攻撃を受け止めるつもりだ。

それを理解しているため『天照』も呆れ声で話ただけで、特に止めはしなかった。

これが命のやり取りをする戦場なら二人の判断も違っていただろうが、弟子との戦いにその価値観を持つてくる必要はない。

シンラは伸びた『如意』を先ほどとは違って両手で回転させ始め

た。

その両端に炎が宿り、その軌跡が円を描く。

インフェルノ・リング
「火円」

それは短い詠唱だった。それとともにシンラは回転を維持した状態で『如意』を放り投げた。

しかし投げられたのは描かれた炎の円であった。

炎というより朱色の円は旋回しながら少し不規則な動きをしながらもホムラに向かって飛ぶ。それはまるで円形ののこぎりが射出されたようだった。

ホムラは『日暮れの雨』を大地と垂直に構え、左手でその刀身を支える。

(受け止めてあげるよ、君の愛を!!!)

(本当に貴女は、お願いだからストーカーにはならないでね)

『天照』は少し離れた位置からホムラを見下ろし、心配げな瞳でその契約者を見ていた。ガキイイイインという音を響かせ火円と刀インフェルノ・リングがぶつかり合う。

見た目それほど速く移動したわけではないのだが、刀を構えたホムラは地面を靴で抉りながらじりじりと火円インフェルノ・リングに押された。

(ぐう、この魔術、かなりの硬度だね……)

硬度とは魔術の壊れにくさを示している。

汗が彼女の首筋を流れていく。それは火の熱さからではなく緊張によるものだ。

気を抜けばこの術は彼女の刀を弾き飛ばし、その身を胸の辺りで両断してくれるだろう。それも熱で焼き切ってくれるのだ。さぞかし痛いに違いない。

数m押し進められたところで、ホムラの『日暮れの雨』が火円インフェルノ・リングを真っ二つに斬り裂いた。

「はあ、はあ」

彼女は数度息を整えるとシンラに向かい構えをとる。

「どうしたの？まだまだここからだよ？」

フツと笑うシンラにも、クスリと笑うホムラにもまだまだ余裕があった。

まだまだ前哨戦が終わっただけということである。

3 師弟対決（後書き）

どうでしたか？

本当は3話で終わる予定が長引かまして次話も師弟対決は続きま
す。

たびたび修正して申し訳ありません。
だらしねえ作者だと笑ってください。

4 《不死炎》（前書き）

この小説はフィクションです。

この小説は超絶魔術バトル小説です。

……ホントに？

2011 9 / 20 再改稿しました

4 《不死炎》

1895年のイギリスとフランスの戦争以来、確かに国家規模の戦争は起こっていない

だが、小規模な戦闘は発生している

表立つては報道されていないものの、その戦闘は国家同士のいがみ合いが原因である

ヨーロッパという広大な大地を失ったことでたくさんの難民が溢れたのが20世紀の戦闘の一因だ

難民をどの国家が受け入れるかで争論になったのだ。当時裕福だったアメリカは一応反対せずに受け入れた。日本もその要請を受けたのだが、そもそも国土の少ない日本が受け入れることができた難民はごく僅かなものだ

最も多くの難民を受け入れるよう国際連盟に要請されたのが中国とロシアである

だが、中国はこれ以上人口が増えるのを嫌って、要請を拒否。これがきっかけで中国が世界から孤立し、国家間の非難を浴びた

1921年、中国は徐々に四方から国家レベルではない攻撃を受け、解体に追い込まれることとなった

????????

爆発音を聞いて、御子柴銀はようやく状況に気がついた。

「いつかはやつちまうと思ってたが、まさか今日すぐにやるとは…」

麓の町のぼろアパートに住む銀は呆れたような、或いは感心したような声を出して朝食を食べていた。

「意外ですか？」

女性の声が聞こえた彼の目の前には三日月のような浮遊する物体にしがみついた猫のような生物がいた。

その生物こそ銀が契約する精霊『アルテミス』だった。

本来精霊は人間と同じような姿で生活していると言われていたが、こちらの人間の世界に来るにあたって姿を変える。というよりも体を世界に適するため半自動的に変化する。一部、上位の精霊は人間の姿のまま人間界に来訪するようだが、そんな精霊が魔術師と契約することは稀なことである。

彼女や『天照』もまた同じように姿を変えられただけであって、本来の姿は女性だ。

「意外も意外、あれは自分から動くのが嫌いな人間だと思ってたかな。俺が何も言わなければ何もしてなかったはずだよ」

「そうですね。あの少年は一つのこと意識を集中しているから他のことへの行動が遅くなっていると思います」

成程と銀は小さく頷いた。シンラ・ミトセと出会って2年ほどが経つが、彼が魔術に対する妄執ともいべき拘りを持っていることには気づいていた。

普通魔術師はわざわざその発動式を変えたりはしない。

シンラのように演算、詠唱等の魔術を併用したりはしない。そもそも一つの魔術を学び続けなければ、魔術師として完成はしない。

専門が違うのだ。彼の行う魔術は左手と右手で別の文字を同時に書くようなものだ。両方に意識を集中しなければならず、下手をすればどちらも文字とは言えなくなる。

それでも、シンラはそれを成功させた。

天才か、と銀は呆れながら思う。

彼の魔術はまさに天才のための魔術と呼んでいい。自分のような魔術を体の一部に宿らせて使う魔術師では使うことは不可能だ。

しかし、だからこそ。

「あいつがどんな精霊と契約するか楽しみだ」

それ次第で、あの男は自分にとって遙か遠くの目標になる。
『本当は、彼と戦うのが楽しみなのでは？』
どこか呆れたように猫が目を細めていた。

??????????

ホムラは徐に魔法出力器デバイスを掲げ、その峰を左手で支えた。それを合図にして小鳥の姿をした彼女の相棒『天照』が羽ばたき、飛翔する。

「飛び立て、浄化の炎《不死炎》！」

ホムラが《不死炎》を発動する前に、シンラは2m近くまで伸びた自身の魔法出力器《如意にょい》を地面に突き立てた。

その先端に右手の人差指で文字を書いていく。その文字は魔力が込められたものだ。

シンラはその一方、左手で図形のようなものを書いていく。

その瞬間《不死炎》が発動した。

魔法出力器《日暮れの雨》の刃から朱色の炎が飛び出した。そして、炎に向かって赤い小鳥の姿をした《天照》が突撃した。

その姿はシンラには見えていない。契約する前の魔術師には精霊の姿は認識できないのだ。

しかし、その結果何が起ころのか、それはシンラにも分かっていた。

突如爆発的に炎が巨大化した。

炎はある形に変化した。大の大人一人ほどの体に、その倍はあるうかという両翼を広げたそれは鳥。

「……《不死炎》」

呟くシンラを見て、ホムラはにこりと微笑む。赤い少女のマントは鳥型の炎が発する衝撃はで靡いている。

シンラにも何度か見せたことのある彼女の切り札がこの《不死炎》である。（切り札ではあるが必殺技ではない）

本来は少ない魔力で相手を追尾する炎の属性魔術から派生させたもののだが、炎の精霊である《天照》に宿すことで爆発的な威力を持たせたホムラのオリジナル魔術。

その最大の脅威は威力でも追尾力でもなく、持続性だ。

どれほどの妨害、防御があっても消えることなく相手を焼くまで飛ぶこと。決して絶えることのない不死の炎、それが《不死炎》の由来である。

その時、シンラの魔術が煌めく。凶形を書いて発動する力を示すグラフィックス 凶示魔術と、空間に言葉を書いて魔術を発動する筆記ノート魔術の複合。

「火炎槍《如意》！」

そして魔術を宣言する詠唱スベル魔術を最後に合わせることで魔術《如意》は発動する。

地面から出た魔法出力器の先端から鏃のような形をした炎が噴出した。

《如意》とはシンラの魔法出力器とこの魔術の名を指している。

その名の通り、魔法出力器と同様に伸びる。そしてその伸縮する距離はほぼ無制限である。（といってもシンラも限界がどれほどかは、やったことがないので知らない）

（それだけじゃないんだけどね）

どこか誇らしげにホムラは笑う。

常時発動し、なおかつ常に伸縮するという特性が維持され続ける。

それが彼の魔術《如意》。

（そろそろ仕掛けようか。《天照》）

（分かったわ）

心の中で一言交わす精霊と魔術師。

その瞬間、《不死炎》がシンラに向かって木々の狭い間をすり抜けるように滑空する。

対してシンラは突き立てた《如意》を手に取り、火炎槍の鏃のあ

る先端を《不死炎》に向ける。

「伸びろ!!!」

瞬間言葉通りに火炎槍の刃が伸び、炎の怪鳥の胴体の部分を貫く。しかし、怪鳥は速度を落とすこともなく羽ばたきながらなおも獲物に近づく。

精霊に干渉できるのは契約した魔術師だけだ。他の魔術師にも誰にも精霊は触れることも、魔術をぶつけることもできない。

《不死炎》はこの特性を最大限に生かしたものだ。

だが、シンラの目的は《不死炎》を足止めすることではなかった。シンラからは《不死炎》が邪魔をして見えなかったのだが、ホムラは額に汗を浮かべながら、乾いた笑みを浮かべていた。

彼女は詠唱時にそうしたように左手で刃の峰を押さえながら、微かに朱色の輝きを放つ《日暮れの雨》を構えていた。

その刃が寸でのところで喉元に迫る炎の槍の切っ先を阻んでいた。
（あの子の目標は初めから術者のあたしだったのね。たまたま《不死炎》が《如意》の射線上、というか延長線上にいたから当たったことね）

そう結論付けたホムラはイメージしたことだろう。《不死炎》がシンラの体を包み込む光景を。

しかし、その想像は脆くも打ち砕かれた。

《不死炎》の中心、《如意》が貫いたその部分が朱色の光を放ち、炎の怪鳥は花火のように爆散した。

（《不死炎》が破られた!?!）

驚愕に体を硬直させるよりも早く、その場から飛び上がった彼女を《爆発》の音と風が襲う。

（くっ!）

吹き飛ばされつつも空中で態勢を整える。そのすぐ背後にはホムラの体ほどの幅がある木がある。

脚をその木に向けた。すぐにその華奢ともいえる両足に自分の体重に爆風による加速のベクトルが加わった。

その全てを受け止める直前にホムラの魔術が発動する。

「《射出》^{シュート}！」

バコンー！！

その轟音は魔術により彼女の足の裏に小規模な爆発が発生した音だ。

次いでバネのように体全体を伸ばし、先ほどとは真反対の方向に砲弾のような速度でシンラへ迫る。

「その身を焦がす焰を、《纏火》^{まといび}！」

ホムラの体を紅蓮の炎が包む。その姿は炎の衣を着ているようだ。憑依系魔術《纏火》とは自身の体に炎の障壁を形成する魔術だ。

この炎は敵を焼くのと同時に、その身を魔術的攻撃から守る防御の魔術でもある。

そして、シンラの火炎槍《如意》は魔術で構成された魔槍だ。それもまた《纏火》は防ぐ。

「……」

自身の攻撃手段の一つを奪われたためか少し不服気な顔つきのシンラに、ホムラは突撃していく。

バキイイーン！と金属同士がぶつかり合う音が静寂だった森に響き渡る。

「すごいねシンラ君。《不死炎》破るなんて」

至近距離で互いの見慣れた顔を見るのは一体何度目なのか。

もちろん二人にはそんなことを考えている暇はない。

「ぐ、構成式を割り出して、魔術の中核を突けばそんなに難しいことではないですよ」

刀と金属製の杖の競り合いで少し押され気味のシンラは両脚に力を込めながら返す。

「そうかな？日本軍魔術師師団団長さんもこの魔術には手古摺ったつていうのに」

「それよりも俺は火円が破られたことが驚きですよ。あれは、ぬう。俺の魔術の中で最高クラスの硬度魔術なのに」

よく斬れましたねと続ける前に、にかああと破顔したホムラは自慢げに胸を張る。

「なんとあってあたしんの《日暮れの雨》はかの刀鍛冶、おおかわりゅうへい大川竜兵の遺作だからね。魔術を斬るといわれる大川の銘は伊達じゃないのだよ」

興味無さそうに、あるいはそんなこと知りませんよとも言いながら、はあと呟くシンラ。

そんな会話をしながらも二人は剣と杖を交え続ける。

八方から素早く鋭い斬撃と、突きを交えるホムラの剣さばきは洗練された剣士といったところか。魔術師というより魔剣士の方がその姿をより如実に表しているかもしれない。

一方シンラも武器である火炎槍《如意》を封じられているにもかかわらず、ホムラの斬撃、あるいは刺突を魔法出力器の《如意》で防いでいる。さらには反し手で如意を振るって自分からも攻めている。

(やっぱり展開した《如意》は手強いな)

近接戦でものを言うのは間合いだ。

科学の戦力として銃が多用されたのもその間合いの長さ(銃は近接武器なのだ)が理由として挙げられる。

ようは如何にして相手の間合いから脱し、自分の間合いに入れるかが近接戦での最大のキーポイントだ。

銃が刀の間合いに入ってしまったえば勝つことは大変困難だ。

《如意》はその近接戦のセオリー通りに語れば銃に並ぶ強さを誇る。魔術の《如意》はその範囲は術者のシンラさえも分かっていない。魔法出力器の《如意》はその間合いが短刀クラスから、槍のサイズにまで変化する。

短縮しているときは相手の懐から、伸ばしているときは相手の間合いの外から攻撃を仕掛けることができる。

よっぽど相手がバ力でかい武器や狙撃銃でもない限り、武器としての性能は申し分ない。

日本刀一つでは本来なら対決すれば、懐に入られて昏倒させられるか、長いリーチを生かした攻撃で意識を刈り取られるかのどちらかだろう。しかもこの《如意》はその二つを一刹那で切り替えることができるのだ。

シンラは訓練ではこの伸縮性能を展開した《如意》使うことは稀だった。ほとんどが長いか短いかのどちらか一辺倒にした戦いをしていた。

だからこそ分かる。今日のシンラは本気で勝ちにきている。

いつもはキスを掛けた戦いだが、今回は彼の巣立ちを認めるか否かを掛けた実戦なのだ。

まあ、キスがホントはかなり重たいもので、それにも本気を出すべきだろうとホムラは思うのだが自分とのキスより訓練で自身の技量を高めることが彼にとつては重要なだろう。

(そう思うと、かなり腹立つわね)

ホムラの刀の重さが変わったとシンラが感じたかどうかは定かではないが、少なくとも現実の具象として彼女の剣速が二割ほど増した。

それにしてもホムラの剣術は目を見張るものがある。リーチの變化で相手を攻撃する《如意》と日本刀一本で互角以上に戦っているのだからその腕はかなりのものだ。

懐から、あるいは自分の間合いを超えたところから迫る鋼鉄の一撃をいなす。そして、それ以上の速さをもって攻め続ける。見た目上シンラが防戦を強いられているように見えるほどだった。

しかし、そのホムラを以てしてもこのままでは体力の違いで負けてしまうだろう。

おそらくシンラもそれが目的なのだろうとホムラは予想していた。

(ま、そうはさせないけどね)

(そろそろ行っていいかしら?)

(どうぞどうぞ)

テレパシーのような会話が終わり、シンラから熱風が噴出した。

これだけで、シンラは何が起こったのかおそらく理解しているだろう。

ホムラからはその光景が見えている。

そこでは再び不死鳥フェニックスが羽を広げていた。

「く！」

齒噛みするシンラをひと蹴りし、ホムラは自身の魔術の影響を受けない位置まで離れた。

うづくまるシンラに《不死炎》が迫る。

赤い炎がその体を包み込んだ。

「ふふふ、あたしの《不死炎》がああ程度で消せる訳ないよ」

《不死炎》は例えマツチ棒ほどの火まで小さくされても、あのような炎の怪鳥の姿に戻ることができる。

この魔術は普通の魔術とは魔力の供給源が違うのだ。

普通の魔術は発動時に精霊から渡された魔術師の魔力が込められ、その時の魔力量によって現象の大きさ、持続時間、効力が異なる。

しかし、この《不死炎》フェニックスは違う。

《天照》に打ち込まれた魔術は《天照》自身の魔力を維持するための魔力として使う

故に事実上この魔術は無制限といえる（《天照》自身の魔力量は精霊の中でも群を抜いている）。

それ故の絶対的な維持能力、それこそが《不死炎》の最大の特徴だ。

（残念だけど、まだまだだったみたいね。シンラ）

自分でもおかしいと感じるのだが、嬉しくもあり、悲しくもある。

（は！？ これは）

妙な感傷に浸っていると相棒たる精霊が珍しいことに慌てた声を出した（といってもホムラにしか聞こえなかったが）。

シンラを飲み込んでいた《不死炎》の炎が一か所に集まるように

収束していった。例えるなら風呂場の栓を抜いたように炎が飲み込まれていった。

「何!？」

魔術師特有の魔力探知能力を使っても何が起こっているのかホムラには分からなかった。

いや、分かつていても受け入れられなかった。

「危なかったですよ。ていうか、下手したら俺死んでましたよ?」

平然とそこに立つ弟子の姿とその魔力を見て、ホムラは漸く理解した。

（《不死炎》の魔力を吸収した?そんな、《不死炎》の魔力は《天照》の魔力。だから、いくらシンラ君でも、それを全部吸収することなんてできるわけが……。

……違うわ。シンラ君がしたことは……）

「《不死炎》の種火の術式の魔力を吸収しました」

《不死炎》は《天照》の魔力をエネルギーとした一種の永久機関のようなものだ。しかし、《天照》が供給できるのは魔力だけだ。術として発動するためには術者の魔力が必要である。

それがシンラの言った種火。《不死炎》を動かす魔術の元。

その式が維持不能になれば《不死炎》^{フェニックス}は消える。

「魔力吸収の術なんてよく作ったね」

「いえ、たまたま道場から出る時に思いついただけですよ。一定以上の魔力を感じると自動的に吸収する魔術。それがこのカラクリの正体ですよ」

^{アーティスト}芸術家、と呼ばれる魔術師がいる。

彼らは芸術作品を作るように魔術を作る。

その一部には戦闘中に術を思いついて試行する。

これこそが芸術家の恐ろしいところだ。

（その戦法が一定にならない。^{トリッカー}奇術師とも呼ばれる。やっぱりこの子もそういうタイプだったのね）

そもそもこの弟子は新しい魔術分野を作り上げてしまうほどの規

格外な天才肌の魔術師だった。

喜ばしいような、それでいて切ないような複雑な心境でホムラはシンラに刀を向ける。

「でも君の魔術は他の魔術と決定的に違うところがあるよね……。最大の欠点かね」

剣を構えシンラへと駆ける。

対するシンラは《如意》を再び地面に突き立て、吸収した魔力で新たな魔術を構成する。

左手で空間に計算式を、右手で図形を描く。左の演算魔術マスマッテイクと右の図示魔術グラフィックスを複合せせる。

「君の複合魔術は集中力を分散させてしまう！！ただでさえ魔術を使いながら移動することは難しいことだからね。君は魔術を使いながら動くことは不可能だよね！」

魔術をイメージしながらその言葉を詠唱する。

「翼を広げよ、《飛炎》！」

彼女の背後から飛び出した炎が鳥の形を成す。その鳥は燕。

《不死炎》フェニックスの怪鳥に比べれば随分見劣りするが、その分速度で補うことができるはずだった。

炎の燕はシンラめがけて森の中を滑翔する。

「それじゃ遅すぎる」

そんな呟きが聞こえた。

「何が！？この《飛炎》ならシンラ君が魔術であたしんを攻撃するより早く君に辿り着くよ！！」

移動している彼女を座標指定で攻撃する演算魔術マスマッテイクを命中させるためには複雑な計算式が必要だ。

万一トラップのようなものを仕掛けられないために、彼女は絶えず不規則に自身の移動速度を無属性魔術で変化させている。

彼女のその考えが、甘かった。

「俺が師匠を魔術で攻撃するなんて言いました？」

その言葉を聞き、本能的な危険を察知し足を止めたときは、もう遅かった。

《飛炎》がシンラまであと数秒で到達するという距離まで近づいたときにそれは地面から発生した。

地を赤く染め、間欠泉の如く炎が噴出する。

それは《飛炎》の行く手を阻み、消し飛ぶ。

次いで弟子の声が、勝利を告げるように、

「《爆発》」

この戦いで最も彼が多用した魔術がホムラの目の前で発動した。

完全に動きを止めてしまったホムラは受け身や爆風を受け流すこともできず、もろに爆風を受け、地面に叩き付けられた。

(やってしまったわね)

相棒の声が聞こえる。

(うん。……まさか種火の方がやられるとはね)

(それだけ?)

(うん?)

(あの時、《飛炎》じゃなくてもよかつたんじゃないの? 《炎の矢

フレイアロー

》の方が速度は速いでしょ? 追尾力は皆無だけど)

(……どうしてかな?)

(わからないならいいわ。私としては《不死炎》を破られた時点で合格点をあげるつもりだったし)

呆れたような声を聞きながら、たまたま木の枝が重ならず開かれた空が見える隙間をぼうつと見ていた。

「大丈夫ですか? 師匠」

シンラに顔を覗き込まれたホムラは少し頬を赤らめて顔を逸らす。爆風で飛ばされた彼女は土が顔に付いていることに気付いていた。だから、そんな顔をシンラに見られなくなかったのだ。

「だいじょぶ。」

それより山火事とか起きてないよね？」

一応この辺りは防火魔術（炎属性の魔術師が自身に被害が及ばないように自分に掛ける魔術）を施しているため大丈夫とは思っているが。

「はい。確認してきましたから」

即答するシンラに少し彼女は不満を覚えた。

「ふ〜ん。自分でぶっ飛ばした師匠よりも、周りが火事かどうか確認する方が大事なんだ」

自分でもおかしなことを言っていると自覚しながら話す。

案の定シンラは困ったような表情をしながら、左右を見渡す。

その顔が、彼女は好きだった。

「まあ、いいわ」

そうするとホッとした表情をして苦笑いする。その表情も好きだ。彼女は何人もの男性と付き合ってきたが、ここまで好きになったのは、彼だけだった。

だからこそ、なのだろう。

どこか寂しいのは。

「おめでとう。シンラ君。これであなたは一人前の魔術師になれるよ」

これで精霊に呼びかけるための魔術を教えて、それで、彼は巣立つてしまう。

「ありがとうございます。ホムラ先生。多分これからも頼りにしますから」

さっぱりした笑顔で告げる彼を見て思う。

（ああ、そうだね。あたしん、まだまだ君に教えることがあったんだね）

例えば女の子の扱い方。どうもこの男は自分に向けられる好意を信じられない性格のようだ。その辺りから治していかなければならない。

例えば魔術師界での人付き合い。自分も決して上手い方ではない

が、芸術家気質のあるこの少年が経験する数は自分の比ではないだろう。

まだ彼女には先輩魔術師として教えられることがある。

何だか笑えてくる。

そう思っただけで、こんなに嬉しいなんて。

取り敢えずまずはこの男に自分を背負わせよう。

そしてたっぷり甘えるのだ。

彼女はそんな密かな企みの元、彼が自分を気遣うまでこのまま地面に横になっておこうと思うのだった。

「さ、シンラ君。君が勝ったんだからキスしてもいいのだよ？」

「ぶうう！ごほごほ！」

し、しませんよ！そんな！！」

ホントにかわいい顔だと彼女は笑った。

5 春風の妖精（前書き）

この小説はフィクションです。

この小説はやっぱり釣りでした。（再確認）

キスが今回もでません。

2011 9 / 20 改訂

5 春風の妖精

精霊がこちらの世界へ来るのは不老不死を求める故だという人間の世界では精霊の命の時間は止まるのだ。故の不老不死しかし、それだけならば人間と契約する必要はない。わざわざ人間一人に縛られるような生活を彼らが求めるはずもない

その訳は彼らの魔力だ

魔力とは彼ら精霊が自身の世界で役目を果たすための力だ。そのため彼らの力は自分意志とは関係なく勝手に生み出される

本来ならばその力は役目を果たすために使用されるのだが、人間界でその必要はない

魔力は消費されず溜まる

そして限界を超えたとき、彼らは消滅してしまう

それでは本末転倒である故に彼らは魔術師と契約し、己の力を消費するための蛇口として人間と関わるという

一部の精霊はまた違った目的を持つというが、一応これが魔術師の中では常識として知られている

??????????

スウスウと規則正しい寝息を立てる少年、シンラ・ミトセに音もなくその影は忍び寄っていた。

月明かりさえも遮られたその寝室で、その影は熱と自分の力の残滓を頼りに彼の眠るベッドへ潜り込む。

ベッドの中は温かい。人肌の温もりというのがこの世で一番心地よい温度だとその影は大真面目に思っている。

毛布の中で、すうつと深呼吸する。彼の匂いがした。なんだか無

意識に頬が緩くなってしまう。

のそのそとほふく前進しついに影はシンラと顔を向き合わせた。

「……何をしているんですか、師匠」

残念ながらシンラはすっかりと目を覚ましていた。

「ちっ、シンラ君。こういうときは黙ってお姉サンに任せるものだよ？すぐに昇天させてあげるから」

おそらく昇天と言葉通りに受け取るものではないと思いつながら、

シンラはやっぱり師を遠ざけるためにその体を押す。

ふにゃん。

「ああんっ」

？が飛び出しそうな声と柔らかすぎる感触にさしものシンラも体を硬直させる。

「って！」

毛布をまくり上げるとそこにあったのはネグリシエ姿の少女の体だった。

薄暗い中、まさに暗順応が働いてきたシンラの目にははっきりと映る。

決して胸の膨らみが大きいわけではないが、バランスのとれた華奢な体がつきりと出るその姿は、思春期の少年をドギマギさせるのに十分な威力を秘めていた。

「なんて格好しているんですか！！」

「うん？ネグリシエ」

「名前聞いているんじゃないやありません！！人の家に忍び込んだ上にその格好はどういう意図があるのかを聞いているんです！！」

「襲ってほしいから？」

「ゴフウ！！」

疑問形であるのにツッコミを入れられないぐらいにシンラは動揺したらしく、頭から床へダイブした。

「ぐほあ……」

グルリングルリンと二、三回のた打ち回るシンラ。

「大丈夫？」

さすがのホムラも心配したのか、ベッドの上から苦笑い気味の表情で見下ろしてくる。

「大丈夫に見えますか？」

シンラは涙を湛えた恨み深い目で彼女を睨む。

つい五時間ほど前まで二人は魔術を使った戦いをしていたのだが、既に二人はそのことを忘れたように振舞っていた。

詰まる所日常のように、であるのだがさすがにこんなことは今までなかった。

「師匠、どうしたんですか？今日は精霊との契約術を教えてくださいませんか？」

「教えるよ。でもその前に、いい加減シンラ君も理解してほしいんだ」

ジワリジワリと蛇のようにベッドからシンラに迫るホムラ。彼女はシンラに体が触れても、全く意に留めず這うように彼の瞳に迫る。
(まずいまずいまずい!!!)

シンラは己の理性のリミットが外れかけているのを理解していた。なんだこの柔らかい体は！自分と同じ素材でできているのかとどこかに問いかけたい。

「師匠は攻略可能キャラなのだよ？その辺りきっちり踏まえて接すること。」

「わかった？」

はい、わかりました。とシンラはうわ言のように呟いた。ツッコミを入れる余力は間違いなく無い。

満足げに頷いて漸くホムラは離れた。

どこことなくではなく、どこからどこまでも惜しい気がしたのだが、シンラは求める感情を一切消去した。これ以上考えたら彼は野獣になつていたかもしれない。もっともそんな根性も実際はないのだから。

荒い息を整えてホムラに帰るように促そうと、

「じゃあ、あたしん汗掻いたから」

「まずい。話の流れがかなりまずい。」

「先にシャワー浴びてるね」

そのセリフだけなら勘違いする人が多発しそうだった。

シンラの苦悩の夜は、まだまだ続く。

朝、げっそりとし、目の下に隈ができたシンラとこれ以上はないつてくらしいの機嫌のホムラは共に朝の市に来ていた。当然ながらホムラの服装は普段着であるシャツとちよつと短めのスカートだった。断じてネグリシエではない。

彼らの住む村は辺鄙なところではあるのだが、交通の要所が近い
ため商店の品揃えはその辺の大都市より多い。

「市に来るのも久しぶりだな」

ホムラは元々シンラが来る前まで、一年ほど一人暮らしをしていたのだ。ちなみにその家は今シンラに貸し出されている。当然の如くホムラも鍵を所持している。

そのことに背筋の凍る思いだったが、もうなんかいいやとシンラは開き直っている。

「今は何が旬？」

「栗がおいしいと聞きました。それと秋刀魚ですかね？」

「じゃあ栗ご飯に、おかずは秋刀魚でお願いね」

「朝ごはんのリクエストですか？」

「楽しみにしてるね」

話だけ聞くと二人は恋人か新婚夫妻のようだった。

馴染みの店を二、三件回ってシンラたちは山中の道場に到着した。そこには二人が思いもしなかつた客人がいた。

若草色の襟付き服を着た白っぽい髪をした見た目は20代後半の男がそこには立っていた。

「……………」

ホムラの表情が一転して固くなっていた。

そんな顔をシンラは一度も見たことがなかった。

少し荒っぽく足音を立てながら、シンラたちはその男の前へ歩み寄った。

「お久しぶりです。川瀬さん」

無愛想な声であいさつしたホムラの瞳は、普段殻は想像できないほど冷たい。

ホムラに川瀬と呼ばれた男は一礼した。

「シンラ君、朝食を作ってて」

反論は許さないとといった雰囲気師匠に、はいとシンラは言葉少なく返答した。

ホムラとシンラの道場の中心、板張りの部屋はかつての剣道場の名残だった。その床に正座し、二人の魔術師が相対していた。

片方は燃え盛る火炎の如き赤い髪に恒星のような自身の姓と同じ紅色の瞳を持つ女性。紅ホムラ。

対するは氷のように透き通った白銀の髪に氷蒼の瞳をした男性だった。

堀の深い頬に、スツとした鼻立ちは切れ者を思わせ、飄々としたようにも見える体はその実極限まで鍛えられた理想形であった。

男の着ている濃い若草色の襟付きの服は現在の日本軍の軍服である。

日本軍魔術師師団団長。それが男の役職名である。

男の名は、川瀬五郎。『玄武』の名を冠する軍の魔術師だ。

「久しいな。紅元伍長。五年振りだったか？」

低い声に脇に控えたオオカミのような獣が低い唸りを上げる。

氷属性の精霊、《氷狼》である。

薄い空色の毛皮をした《氷狼》であるが、凶暴そうなその顔に冷たい知性を秘めた灰色の瞳をしている。見た目は獣だが精霊界でも

賢者としてその名が通っている。

片や、伍長と軍位で呼ばれたホムラは極めて不満そうな顔をしている。

「川瀬さん、わざわざどうして軍の魔術師の最高位のあなたがここに？」

ホムラは仕返しとばかりに階級を付けずにその名を呼ぶ。

彼の位は准将。

ホムラの言うとおり名実ともに日本軍最高位の魔術師だ。

「日本魔術師協会の正式な依頼書を持ってきた。君と今から魔術師としてデビューする君の弟子に引き受けてもらう」

頼みではなく命令だった。

日本魔術師協会とは日本中の魔術師を表向き統率している協会だ。時たま魔術師に厄介ごとを押し付ける（ホムラ主観）だけの組織だ。事実名前だけの組織なのだが、基本的に日本に住む魔術師はその依頼を断れない

その実管理しているのは軍である。（もっとも、魔術師の人権等の問題からそのことは隠蔽されているが）

「……またその手ですか」

あからさまに不機嫌なホムラ。その瞳は憤怒の炎に彩られていた。「あたしん時と同じように、今度はシンラ君まで巻き込むつもりですか？」

「聞こえが悪いな。水戸瀬森羅君もれっきとした魔術師。ならば、私の指示に従うべきだろう？」

「その手が同じだって言つてのよ！！」

立ち上がり、ホムラは怒りで思わず立ち上がり、板張りの地を踏みあげた。

対して男は冷淡に、

「紅君、これはすでに決定事項だ。

それに日本という国家の存亡を掛けた任務を君たちに与えるのだ

「よ」

聞き逃せない言葉に、頭を冷やしたホムラは座布団に戻った。見計らったように川瀬は茶封筒をホムラに手渡した。

慣れた手つきで開封し、書類を流し読みする。

「京都で陰陽師と呼ばれる魔術師が暗躍している。

最近彼らが国家を転覆しかねない計画を立てていると情報が入った」

日本の公式の見解では陰陽師は魔法士であると発表されている。現在世界を席卷する魔術師は精霊の魔力を使う精霊魔術師だ。

陰陽師と呼ばれる魔術師は地理的な要因を用いた超常現象を起こすものだという。

彼らの使う力は魔力ではないと主張しているが、式神という精霊と契約しているとも考えられている。

魔術師は魔力がこの世にないと言っているが、陰陽師の主張は真逆である。

実のところ陰陽師を魔術師の立場から解釈できない。

逆もまた然り。だからこそ、双方には大きな確執がある。

「それであたしたちに京都へ行けと？」

「前から思っていたんだが、君のその『あたしん』という一人称は『あたしの』が訛ったのか？間違っているから直した方がいい」

ホムラはまた立ち上がり、

「うっさいわね！！あたしんだって直したいわよ！！！！」

直したかったのかと川瀬は己の失言を恥じた。コンプレックスは誰にでもある。彼みたく軍という上下間に絶対的な隔りがある世界に住む人物にしては軽率過ぎた。

あえて咳払いをして話を進める。

「それで、私は日本最強と呼ばれる魔術師四人の中で『朱雀』の名を得た君に頼みたい」

『朱雀』のホムラ、『玄武』の川瀬というように日本最強の魔術師が四人いる。それはそれぞれ四方神である朱雀、玄武、青龍、白虎と対応する異名を得ている。だがそれはまた別の機会に語るである

う。

「でも、それはあたしんの事情でしょう？シンラ君には関係ないよ」
「水戸瀬森羅はかえって君に付いて行こうとするかもしれないぞ。」

彼は魔術について研究しているんだったな。陰陽師が使う力に興味を抱くだろうな」

「……」

否定できない。

あの少年は何故だか魔術の研究になると人が変わったように励む。

それでこそその芸術家であるのかもしれないが、こんなふう川瀬に利用されるとは思っていなかった。

「まあ、話だけでも通しておいてくれ」

結果を理解しているのに、この男は。とホムラは歯軋りする。

では、失礼すると一礼をして川瀬は立ち去った。それについて《氷狼》も姿を消した。

後には赤い髪の少女と赤い小鳥が残された。

????????

やけに不機嫌だった師匠に何とか頼み込んでシンラはようやく精霊との契約魔術を教えてもらえた。

といってもただ決められた呪文を詠唱するだけだから単純かもしれない。というのが今日までの魔術の考え方だったが、このシンラ自身がすべての魔術はイメージを補強するだけのものだと証明している。本当に簡単なのかどうかは定かではない。

要はシンラのイメージ次第ということだ。

道場から少し離れたこの場所、木々が生える山の中で少し開けた場所であった。

「開け、異界の門。我が声に答えし、かの地の者よ。ここに來たれ」

詠唱を終えると黒い穴のようなものが彼の前に現れた。

この魔術に失敗すればどうなるか分からない。本当ならホムラに習ったこの詠唱^{スベル}魔術を3、4分毎に使うしかなかった。

しかし、彼は芸術家、失敗することは当たり前で成功すれば万々歳という考え方がどこかにあったのだろう。

手始めに彼は筆記^{ノート}魔術をプラスすることにした。

筆記^{スベル}魔術は詠唱魔術から派生したという説がある。

その説には口に出す詠唱を、空間に刻むことで魔力を行使するのがこの筆記魔術と言われている。

しかし厳密には詠唱時という言葉と空間に書く文字は異なる。これは両方を使うシンラが証明している。

おそらく言葉にする文字と書く文字には何かしらの違いがあるのだ。それが魔術を使う時に影響するとシンラは考えている。

穴が消えたたのを見計らい、言葉と同時に右手で文字を書く。

「開け、異界の門。我が声に答えし、かの地の者よ。ここに来たれ」

『異界と繋がりし扉。かの界よりの使者を招け』

意志的か無意識的にか、彼の二つの魔術は似通っていたが違う言葉で発動した。

再び彼の前に黒いブラックホールのような異界への扉が現れた。

それには先程と異なるところがあった。

金色の円のような装飾が、その穴には施されていた。

(門？俺のイメージがこの魔術に門の形を与えているのか？)

いずれにしても彼の試みは成功しているのだろう。不遇なことにこの魔術は成功したのか、失敗したのか分からない。

次はより明確に形を与えることにしよう。

また門が消えたのを見てから、そう思い立ち左手で図形を書き始める。その図形はこの場所を切り取ったようなものだ。図形の上に木や茂みなどを書き加えてこの魔術が発動する。

図示^{グラフィックス}魔術。範囲を決めるのにこの魔術は適している。

この魔術は空間を切り取り、そこに魔力で具象を起こす魔術だ。

まさしくイメージを絵に描くことで発動する。

三度現れた異界の門は金の装飾に加え、両開きの扉を備えていた。
まさしく門である。それはシンラには覚えのある形だ。

（我ながら想像力が貧困だな。まさか見慣れたものをイメージするとは）

別に彼の考えは酷く一般から外れたものではないのだが、彼には不満だったようだ。

どうやっても人というものは自分の知ったものしか考えられないというのに。

今回の門は黒い穴がない。つまりこれは自分か相手が開かなければならないものなのだろう。

ゆっくりと門を押し開く。

既に見慣れ始めた黒い異界への穴がそこには広がっていた。

「さて、次は演算魔術を足してみるか」

座標を指定する必要がある演算魔術をどのように行使するか考えながら、ふと門をみると、

薄い桜色の輝きが門の奥から差し込んでいた。

「……来たのか」

何となく心残りがあるのだがそれ以上に彼の中には自分のパートナーとなる精霊に期待を膨らましていた。

それというのも魔術師は契約した時に初めて精霊が見えるようになる。故に彼らにとって精霊との契約とは最大のイベントなのだ。

まさしく彼らが一人の魔術師として世界に認められる瞬間である。

桜色の光が黒の門の中を埋め尽くし、ついにシンラも目を開けられなくなったとき、《それ》は来た。

視界が回復したシンラが初めに見たのは陽光に透き通るピンク色の細い糸のような束だった。

この世のものとは思えない（事実この世のものではないのだが）輝きに目を奪われていると、次に金色に光る水晶が見えた。

ゴンツと何かにぶつかつたような擬音が聞こえて、彼の視界が、

今度は真っ黒になった。

嗅ぎ慣れない甘い香りを感じて、シンラは目を覚ました。

いつの間にか仰向けに倒れていた彼はムクリと上半身を起き上がらせ、キョロキョロと周りを見た。

(確かに何かと頭をぶつけたと思ったんだけど)

考え込むように顎に手を当て、ふと空を見上げると。

ピンクの髪をした和服っぽい服を着た逆さになった少女目を閉じて浮かんでいた。

桜色の和服っぽいというのは少女の服装がどう考えても日本古来のそれとは異なっていたからだ。

帯など体に触れる部分は和服の面影があるのだが、手や足などの末端に行くとはそれはもはや和服ではなかった。

腕の部分にあるはずの袖が本体とセパレートの形で分けられ、しかも無意味に長い。歩いていて地面に付きそうなほどの長さだ。

加えて本来足もとまであるはずの和服が膝上でカットされていて、言わねば和服のミニスカートだった。

「な、なんだ？」

驚天動地だった。精霊を呼び出すつもりだったのに何故人間の女の子がここにいるのか。

(いや、本当に人間なのか?)

シンラの疑問は浮かんだ少女の容姿から浮かんだものではない。

魔術師は己の身に宿した魔力の影響を強く受ける。

例えばホムラは赤い髪に赤い瞳をしているが、これは《炎》の属性を持つ《天照》の魔力が影響したものだ。

魔力にはそれぞれ象徴色というものがある。炎は赤、氷は白か青、光は白か金色などその属性によって色がある。

炎の魔力を宿すホムラはその象徴色である赤に髪や角膜の色素が変化したために、その容姿を得ている。

つまり魔術師にとって髪や目の色が変だからといってそれを問題にはしないということだ。
問題は彼女の中にあつた。

（なんだ、この魔力は？）

莫大な魔力がその少女から滲み出ていた。一応魔力を感知する能力は魔術師なら持っているのだが、それにしてもこの量は異常だつた。

例えて言うなら、人間の体に電流や血液中に鉄分が流れているのだが、その体内環境に影響が出るほどの強力な電磁石が目の前に浮かんでいるようだ。

シンラの中に残るホムラの魔力が、溢れる魔力に呼応するように燃え上がっているように彼は感じた。

その結果として少し頭痛がした。

その属性は《光》。

そこで彼はようやく理解する。

その少女こそが、精霊なのだ。

「精霊は確か、この世界に来る時に人型から形を変えるんじゃないかなつたのか？」

ある程度の知識は書物から得ているとはいえ、実際に初めて見る精霊がこんな姿だとは思ひもしなかった。

「……………」

少し不快気に顔を歪める精霊の少女。

どうしたものかとアタフタとしているシンラに構わず少女は目覚める。

ぱつちりと目が合った。上下逆転した二人の姿が瞳に映る。

「は！人間界は天地逆転しているのですか！？」

「違う！君がひっくり返って浮かんでいるだけ！！」

金色の目が特徴的な彼女は一見すると神秘的な魅力を持っているのだが、どうやら中身はそれとはかなり違うらしい。

「はっ！……」

驚いたのか宙で一回転して地上に彼女は正座で着地していた。

「は、始めました！わたし、精霊のサクラと申しますっ！属性は光です！はい！！」

ペコペコする彼女に言っただけのこととは山ほどあったが、とりあえず事項紹介しなければならぬ（というより相手にしたら面倒だと思ったために）とシンラは一礼する。

「始めまして、俺はシンラ・ミトセです」

「シンラさんですか。今日からあなたの精霊にならせていただきます」

にっこり微笑むサクラは名前の通り桜の花のように頬を染めていた。

6 師匠の不安（前書き）

この小説は釣りです。

違った。

この小説はフィクションです。
今回はラブコメパートです。

2011 9 / 20 改訂

6 師匠の不安

魔術師、いや、世界最初の魔法士がどのようにして誕生したのか。これは永遠のテーマだ

精霊の姿は精霊に契約した魔法士にしか見えない
それならば、一体どのようなにして最初の魔術師は精霊と契約したのだろうか？

諸説あるものの、それは……

その先を読む手が止まる。

「いつまでそうしているつもりです？」

そこは白い空間だった。白い大地に、白い空、白い机の傍にある白い椅子に腰かけた青年に、黒いレースの付いたドレスを着た少女が無表情に話しかけた。

「まだ序章プロローグも読み終わってないのだが？」

茶色の外套を着た青年は読んでいた真っ白い表紙の本を閉じて机に置いた。

青年も少女も黒い目に黒い髪でこの白に満ちた空間では浮き出ている。

「それだけ読めれば十分でしょう？早く仕事をしなさい。さっさと行け」

あどけない顔つきと違い少女の口は悪い。

やれやれ、と青年は苦笑いを浮かべながら立ち上がる。いつの間にかその左手には漆黒の鞘に納められた刀が握られていた。

その目前に黒い穴が現れる。

「じゃ、世界を救いに行きますかね」

一言、心底面倒臭そうに肩を落としながら青年は告げる。

「いつてらっしゃい。アッセル・リーヒニスト」

振り返るのも面倒に感じたのか無反応に、青年・アッセル・リーヒニストは黒い穴を潜って白い空間から出て行った。

首を振って少女は疲れたように溜息を吐く。それでも少女は無表情のままだった。

「やれやれ。蛇足にならなければいいのですが」
それは彼女にとって常のセリフだった。

?????x?????

「はむはむはむ」

「もぐもぐもぐ」

……。

補足すると前者がホムラ、後者がサクラである。

サクラと共に道場に帰ってきたシンラはホムラから一喝受けたのだ。

「あ・さ・ご・は・んううう!!!」

ちなみに彼女は《日暮れの雨》を抜刀して斬りかかってきた。

川瀬と話したが本当にいろいろ大変そうだったので、「ご飯どうします?」と聞くのがとても訊きづらかったのですとシンラの心情を付記しておく。

赤髪の少女と、桜色の髪をした少女と一緒に食事をしているのはなかなかシニールだ。

といってもそう思うシンラもいつか見た目が魔力に順化し、髪や瞳の色が変わってしまうのだ。あながち他人事というわけでもない。「……」

ちなみにシンラは罰として朝食抜きである。まあ、すぐに昼食の時間になるわけで、特に罰とも思わない。それに味見の時に彼はこうなることを予想して多めに食べていた。

「シンラ君、それでこの娘は誰なのかな?」

いかにも興味ありませんと敢えてシンラを見ずにサクラを見ていたのだが、明らかに気にしている。答えによってはすぐさまシンラを焼き尽くす気満々だ。そのあとはベッドに連れ込む気であるのは敢えて言うまでもない。

シンラにとつてはただの精霊で、パートナーなのだから、変に動揺もせず答えられるはずだった。しかし、その言葉をいうことはできなかった。

「わたしはシンラさんの一生のパートナーです!!」

頬や口周りにご飯粒を付け、堂々とサクラはシンラが口を開く前に宣言した。

なぜ一生なのか。確かに精霊は契約した魔術師が死ぬまで契約解除はしないのだが、それでも自己紹介が先だろう!とツッコむより先に、ホムラの呪詛の言葉が聞こえてしまった。

「ほお〜」

動揺からか「ふお〜」と甘噛み気味に言ったのでどこかの宇宙忍者のような声になったが、シンラには込められた感情がビシビシ伝わっていた。

即ちそれは怒りである。

もちろんシンラは弁解しようとした。

しかし、こういう場で男の弁解は女性には信じられないものである。

結果だけ言うと、借家の道場は無事であったとだけしか言えない。シンラはこの先いかな状況であってもサクラより自分が先に話をしようと思いに決めた。

《不死炎》を使った追い駆けっこを繰り広げ、ぐったり柱に倒れこむシンラとホムラ（彼女は食後に走り回って消化不良を起こしたため）の前に回ったサクラは、

「改めました。始めました。わたし、シンラさんの契約霊のサクラ

と申します!」

台詞の初めでシンラとホムラは内心で（何かの事業でも起こすのか!）とツツコミを入れていたが、二人とも気力を失っていたので口にはしなかった。

「あ、っそう」

なんかもうどうでもいいやとホムラはシンラを見る。

この少年が見た目美人で儂げなこの少女とどうにかなっているはずがないのだ。そもそもこの少年にはそんな気概もない。

実に今更な思考で少女は自分の湧き上がる黒い感情を抑え込んだ。

「シンラさん、この人はシンラさんのいい人ですか?」

へたり込んでいた二人が数センチほど飛び上がり、

俊足で駆け寄ったホムラがギュツとサクラの手を握り締めた。

「サクラちゃん、あなたいい子ね。ご褒美にアメを上げるわ」

「へ?ああ、ありがとうございます」

なんだかわけのわからないと呆然としたまま、どこから取り出したかわからない飴をサクラは口に含んだ。ちなみにイチゴ味である。

「いや、この人は俺の魔術の先生だよ」

再び柱にもたれかかったシンラが修正した。

「!」

キーンという音を立てて銀光が煌めく。

「お願いですから一々日本刀を抜刀しないでください!」

バシツとホムラの一閃を両掌で挟み込むことで防ぐシンラ。

「おお! 真剣白刃取りですね!」

なぜか興奮して目を輝かすサクラ。

「つうつう~~~~~!!??」

声にならないホムラの文句に、シンラは頭を悩ませながらもサクラを見た。

「ところでいい人ってどういう意味だ?」

ぽかんと覇気を納めてホムラは首だけサクラに向け、

「もちろん恋仲よね!」

日本刀持ったままいう彼女の言葉は脅しじみているが、サクラは意に閑せずあつけらかんという。

「いいえ、シンラさんに優しくしてくれるいい人という意味のいい人ですよ。」

先生なら、いい人ですよ。シンラさん」

はじける笑顔で言っただけのけるその精霊を見ながら、もうこの娘の発言は真に受けまいと誓い、師と弟子はだらりと脱力するのだった。

「ところで師匠、サクラのような人型の精霊なんて、この世に居たんですか？」

気を取り直して昼食時、三人は円卓を囲んでいた。

ちなみに朝食一（本人主張）から一時間ほどしか経っていないのにホムラは苦も無くご飯と豚の角煮と野菜サラダをペロリと食べた。「居るには居るわね。過去に四回出現しているわ。」

一番新しい事例だと、二四年前に現れた精霊王と呼ばれる《フェンリル》が人型の精霊だったらしいわよ」

文章や何かで読んだことを思い出すように、顎に人差し指を当て考えるホムラもシンラを悩ますほど可愛い。

「それに、もつと気になることがあるのよ」

ホムラはちらつとゆっくりと昼食を食べ進めるサクラに目をやり、シンラの目を見た。

言うべきかどうか迷っているという表情だった。

『精霊は契約者以外には干渉不可能。でも、サクラにさっきホムラは触ってたわね』

聞きなれない声が天井からした。そこには枝につかまったように空中に停止している文鳥サイズの赤い小鳥がいた。

ばさばさと羽ばたいて、その鳥《天照》はホムラの肩に本当に留まり、

『始めましてシンラ君。というのは何か変な感じね、私はあなたを

ずっと見ていたから。私がホムラの契約霊、《天照》よ
柔らかな声に慌ててシンラは頭を下げた。

「ど、どうも。改めまして、シンラ・ミトセです」

まじまじとシンラは《天照》を見つめる。

『どうしたの？』

気になった《天照》が尋ねると些か恥ずかしそうにシンラは、

「いえ、いつもは《不死炎》になった時の姿しか見ていませんでしたから、まさかこんなに小さい小鳥の姿をしているとは思ってもみなかったんです」

シンラがイメージしたのは雄々しき怪鳥のような鳥だ。それこそ人を運べるような巨大さを想像したのだが、全然違った。何これ。インコ？

深窓の令嬢とかが飼ってそうなイメージがあるシンラなのだが、「うん？」

目の前にいる彼の師はどう見てもお転婆な娘だ。いや、少々恋愛面に奔放的過ぎるが。

まあ、精霊は契約者の外見ではなく、内面を判断するのだが。

「精霊に干渉できるのは契約者だけでしたよね」

《天照》だけでなくホムラにも確認するように顔を見た。

「うん。その通り。《天照》はあたしんに触れてるけど、シンラ君には触れられないよ」

「そうなんですか？」

『何なら試してみる？』

いたずら少年みたいな声に何をです、と聞く前に。

鳩尾に赤い鳥が突進してきた。

「ごぶうっ！？」と何かを吹き出す動作をしたところで、気付く。

「……。何ともない？」

振り返って見ると、《天照》は優雅に飛翔していた。

「この通り、精霊は物体に触れられなはずなのよ。さらに言えば、飯を食べることなんてできるはずない」

二人は一心不乱に食事に取りかかるピンク髪の少女を見る。

「思いつきり食べてますけど」

「……そうね」

首を捻っている二人を尻目に、知ってか知らずか当の本人はとぼけたようにも見える笑顔を浮かべていた。

食後に二人はまあ精霊ならいいかという結論に至ったのだが、そこからまだシンラがサクラから魔力の譲渡をしてもらっていないことに気付き、急遽道場に三人は集まった。

そこに思わぬ（というべきかどうか分からないが意外ではある）来客があった。

「うおー！　なんか一人増えてるー！！」

来て早々その客、御子柴銀は驚いた。

「銀、どうした」

「いやー、お前が契約するなら今日ぐらいかなと思ってな。陣中見舞いってやつだ。ところで、そちらの御嬢さんはどちら様だ？」

籠に入った色とりどりの果物を指しながら銀は道場に入った。それに反応したホームラが「りんごちょうだい」と駆け寄った。……まだ食べますかとシンラは呆れる。

「えー、説明し難いんだが、これが俺の契約霊らしい」

ピンクブロンドの髪を揺らして、サクラは一礼した。

「始めました、じゃなかった。初めまして、シンラさんのパートナーのサクラです」

シンラと《天照》のやり取りから学んだのか、サクラは初めて正しく自己紹介をした。

「……」

「どうした？　銀」

「いや、見目麗しい女の子が男のパートナーと名乗るのはどうかと
思ってたな。」

魔術師でも精霊って分からのだから、普通に二人がこれなのかと誤解されるぞ」

ホントに興味ありませんよとも言いたげな表情のまま、小指を立てる銀。

「小指を立てることに意味があるのですか？」

サクラの疑問に表情を変えずに銀は言う。

「どうだろう？ただ、一般的に運命の赤い糸は小指に繋がっているぞうだ」

（どこの一般だ？それと意外とロマンチックな例えをしゃがるな）

この巨漢（シンラ目線）はもつと無骨で無愛想な人間だと思っていたのだが、とシンラは微妙なことを気にした。

「しかし、人型の精霊か……」

銀は怪訝な顔で、サクラとシンラを交互に見る。

『これはまた意外ですね』

背後から浮遊する半月状の物体にしがみつく猫のような生物が語る。

「これが銀の精霊か？」

「ああ、《アルテミス》だ」

『初めましてシンラさん。《アルテミス》と申します』

猫は器用に半月に掴まったまま顔だけでぺこりとお辞儀をした。

「どうも、シンラ・ミトセです」

今日は自己紹介してばかりだとシンラは思う。つまりそれは彼にとつての門出であるということでもある。

とにもかくにも、改めて初めてサクラの魔力をシンラは受け取るために、二人は向かい合った。

「ではいきますよ」

何となく不安を覚えそうなほどのんびりとした口調で、サクラは両手を上げる。

魔力の譲渡はただ精霊がそう望めばいつでも行えるものだが、何故かサクラはわざわざモーシオンを付けた。そのことに疑問を抱い

たシンラを除く面々だったが、気にする間も無くそれは起こった。

シンラの体が輝きだすと、

バコオオオオン!!!!!!

爆発音とまばゆい光で、各人の視界、聴覚機能が奪われた。

「なに!? どうしたの?」

「おおお! なんかスゲエ」

やがて見えてきたのは黒こげになったシンラが目を回す愉快的な光景だった。

見事に道場には危害無く、シンラだけが灰になっていた。

「ああ!? ごめんなさいっ! わたし、どうにも魔力の扱いが下手で」

それで黒こげにされたのだからシンラとしては堪ったものではない。

「シンラ君? 大丈夫?」

膝枕で支えられたのだが、その柔らかさや、いい匂いを気にする余裕も返事をする余裕もシンラにはなかった。

「シンラ君? 意識無いの? だったら人工呼吸してあげないと!」

「一応言っておきますが、呼吸してる時に人工呼吸するのはかなり苦しいですからね!」

「おお!! 黒こげのまま起き上った!」

「驚くのもいいけど、心配してくれ……」

ちつと舌打ちするホムラを無視してシンラは立ち上がる。

「サクラ、もう一度だ」

「……でも」

失敗を恐れているのかサクラは消極的になったように、シンラの言葉に素直に頷けなかった。

「大丈夫なのか?」

爆発に巻き込まれないようにしっかりと距離を取った銀のセリフに、真面目にキレてもいいかと思ったがシンラだが、

「俺は紅ホムラの弟子だぞ、これぐらいなんともないさ」
むしる精神的には貞操の心配をしなくていいので楽だ。

なるほどなと頷く銀の隣で頬を朱に染めたホムラが気になったが、今はそれよりもやる必要がある。

「サクラ、遠慮せずにこい！」

ボロボロのくせに強がって笑う彼を見て、サクラは頷いた。

「いきますよ〜！」

ピカアアア、バコツオオオンという光と音がシンラの意識を今度こそ刈り取った。

?????x?????

眠ったシンラはそのそばに付きっきりのサクラに任せ、ホムラと銀は道場で向き合っていた。

「どう思う？本当に陰陽師たちが何か仕掛けるのかな？」

日本軍最高位の魔術師である川瀬五郎の持ってきた依頼、京都の陰陽師の計画の阻止。

二人が話し合っているのはそのことについてだ。

銀は鋼拳流を最年少で免許皆伝したことで有名だ。同じ村にいるホムラも当然彼の話は知っている。

ホムラは一人の魔術師として彼の意見を伺ったのだ。

「どうでしょう？」

あれは確か、地理的要因を使って魔法現象を起こすといわれてますからけど、……土地の開発が進んだ今の日本で、国家を転覆させるほどの力が出せないと思いますよ」

だが一方で、窮鼠猫を噛むという。

もしも彼らが衰退の危機にせめて最後に、と行動をとるかもしれない。

そういう思いを込めて銀は懐疑的な言葉を口にした。

「そうね。……やっぱり見てみないとわからないか」

赤い瞳を細めてホムラは心底嫌だと言外に語った。

苦笑いを浮かべた銀と精霊たち。

「川瀬准将のことがそんなに嫌いですか？」

「嫌いよ。大がつくほど嫌い。気に食わないのはそれでもあの男に従わなければならない今の状況ね」

特にシンラを利用して自分を引っ張り出すところが気に食わない。シンラを戦いに巻き込むのが腹立たしい。

無論魔術師である限り、何かしら物騒な物事に関わらざるを得ない。

まだまだ魔術は戦争関係で使われることが多い。戦争によって発展するのは、魔術も科学技術も同様だ。

ホムラもまた、戦いを経て日本最強の四人の魔術師に数えられるようになった魔術師の一人だ。

例え魔術師を成長させるからといえ、魔術師になっただけの者を、そんな国家レベルの騒乱に参加させていいものではない。

(何より、シンラ君はその危険性を理解した上で、それでも進んで加わって来るっていうのが果てしなくムカつく)

ぐぐぐうつと歯噛みしてキツと何故か銀を睨み付け、

「銀君は実戦経験ある？」

と若干脅迫気味に尋ねた。

まあ、銀の答えは脅されようがどうされようが変わらないのだが。

「ありますよ。四、五回は」

事もなく告げる銀。

ホムラはマジマジと彼を見る。

魔術学校を卒業する年齢は若くても十八。実戦を味わうのが二十過ぎというのが普通なのだが、銀の年齢はシンラと同じ十六歳である。

その年でその数の実戦を踏むのは異例と言える。

しかし、ホムラにはあまり重要なことではない。

「だったら今回の依頼に着いて来て、シンラ君をフォローしてくれない？」

少し考えた後、銀は静かに頷いた。

6 師匠の不安（後書き）

本当はこれで一章が終わる予定でしたが、

まとまりませんでした。

もう少ししたら続きができると思います。

7 〈光〉（前書き）

この小説はフィクションです。

お待たせいたしました。

2話目以来のあれが来ます。

それも、二回も。

7 《光》

?????
x?????

シンラが目を覚ましたのは翌日の早朝だった。

和室に敷かれた布団で彼は必要以上に右手が温まっていることに気が付いた。

そうまるで、誰かが手を握っているように。

(まさか!?)

こういう時は決まってホムラがいる。よりもよって彼女の生活する家で倒れてしまったのがいけなかった。

ぱっと右側に首を向けると、

ピンクの髪の少女がすやすやと眠っていた。

「……え？」

「シンラクくん、あっそびに来たよー、って!!! ナニコレ？」

突然襖の奥から出てきたものの、あまり状態に表情を失った少女が呆然と口を開けたまま停止していた。

またしてもネグリシエ姿のホムラも見応えのあるのだが、シンラの意識は今自分に触れているこの柔らかい手や花のように甘い香りや、さわり心地の良さそうなほつれの無い髪や、白く柔らかそうな肌に集中していた。

「……焼き尽くせ」

呪詛のような詠唱を聞いて、慌ててシンラはサクラの手を振り払って、ホムラに向かって駆ける。

そして片手で彼女の口を塞ぐ。

そのまま、彼女を押し倒してしまった。

「……」

「……」

二人ともひたすら無言である。

畳に横たわった少女を真上から見下ろすシンラ。

つくづく可愛い。一応この少女は三歳年上なのだが、それでも彼女に抱く思いはそれ一つだった。

「うわぁ！」

ペロツと何かがシンラの掌を舐めた。

もちろんホムラの舌意外に有り得ないのだが。

「何するんですか!？」

「それを君が言う!？」

シンラはそこでホムラの格好に改めて気が付く。今更過ぎるだろうがある意味それが彼らしさなのかもしれない。

照れて彼は視線を逸らす。

そんな姿を見てホムラは微笑む。

「ね、シンラ君。あたしは童貞殺しとか言われているけど、その実、処女なのだよ?」

ぶうつ!!と明後日の方向を向いて吹き出すシンラ。

「だから、キスから先は知らないんだ」

腕を彼の首の後ろに回して彼女は笑う。

「ここから先は、君に教えてほしいんだ」

彼女の微笑みをシンラはまともに見れなかった。

誰でもいいからこの人の発言を止めてくれ!!と叫ぶ彼の心の声に神は答えた。

「なんだよ、騒がしい……」

襖を開き、この混沌に割り込んだのは銀であった。

彼はこのカオスを見渡した。

シンラが寝ていた布団でサクラが眠り、その隣でホムラにシンラが覆いかぶさっている。

コクリと銀は頷いて、

「お邪魔しました」

ボタンと襖を閉めてしまった。
「邪魔じゃないからこの空気をなんとかしてくれー!!」

そして朝食時、四人は円卓を囲んでいた。

「酷いな銀。あんな状況なのに助けてくれないなんて」

「いや、あの状況に入り込むのは容易じゃないぞ?」

襖を開いたあの状況ですらかなり気まずかったのに、それに入れ
というのかと銀はシンラを睨んだ。

事の顛末は結局シンラが己の理性を総動員して部屋から逃げて終
了である。

首謀者であるホムラとサクラは食事を終えて、のんびりとテレビ
を見ていた。

「そつだ、京都に行こう」

「師匠!? あなたどうして岡山の観光地紹介を見ながらそう思った
んですか!?!」

テレビではキャスターが岡山の名所を巡りながら、その魅力を語
っている。

「いや、岡山遠いし」

「京都も十分遠いですよ!」

「いやいや、言ってみただけだから?」

「何故疑問形!? 自分の発言に責任を持ってください」

「シンラ君は責任持つてくれるの?」

「何をですか?」

いやな予感しかしないがとりあえず聞き返す。

じつと彼女はシンラを見つめて。

「あたしのキスを奪ったことに責任持てる?」

「いや!! あなたが僕の唇を奪ったんでしょ!?!」

「ヒドイ、あんなに激しくしたくせに……」

ヨヨヨとわざとらしく泣いたふりをするホムラ。

「表現もおかしいですし、何よりとんだ事実誤認ですね!!」

その二人がじゃれあっているのに我関せずといった風にテレビを見続ける銀にのっそのっそと近づくものがあった。

「銀さん、でしたよね?」

円卓の下から顔を出したのはサクラだった。

「……行儀悪いからちゃんと座れ」

むふふと頬を膨らませながらも、一応は銀の言うことを聞いてサクラは彼の向かいに座る。

「キス、とは何ですか?」

ふむ、と銀はホムラとシンラを見る。

「ある程度仲が良くなった男女がするものだ」

大まか過ぎる説明だった。が的は得ていると銀は自己評価した。

「うん?????」

?がいつぱい彼女の周囲に飛んでいた。

比喻ではなく、魔力を使ったためか?型のピンク色の光が頭の辺りに四つほど浮かんでいた。

(む、無駄なところで魔力の制御が上手いとは……)

転移だけが苦手なのか、サクラは楽しそうに?を上下に動かしていた。

「とにかく恋人、お互いがお互いを好きに相手と唇と唇を合わせる行為がキスだ」

「コイビトですか?」

「銀さん、精霊界には恋愛という概念がないので少し理解しづらいと思われます」

銀の後ろに浮遊していた《アルテミス》が彼の肩を叩いて言う。
「そうなのか?」

「そもそも生殖という行為自体が精霊界では必要ありませんから」

精霊界では後世霊という存在が自分の死後に自分と同じ役目を果たす存在が現れる。それは自分の知識や経験等を受け継いでいて、安定して役目を果たし続けられる。

だからこそ、精霊界には子孫を残す必要もないがために、恋愛という考えそのものがない。ある種の息抜きのために人間の模倣をする者もいるにはいるのだが、ごく少数である。

「生殖活動が恋愛に結び付くのはどうかと思うが……」

『結果的にしていることは変わらないと私は認識していますが』

やれやれだ。と銀は溜息をつく。見た目彼はゴツイ朴念仁だが、中身は結構ロマンチストだったりする。

こういう恋愛のれの字も知らない精霊や、やたらとキスばかりしている（されている）友人が周りにいると、もう恋なんてしないと
か言ってしまうそうだ。

（そもそもキスとは相手との愛を確認しあう本能的な行動じゃないか？そのくせこの二人ときたら魔力の譲渡手段として使うなんてな
《朱雀》の名が泣くだ……）

そこまで考えて思いつく。

シンラとホムラのキスによる魔力譲渡は確かにおふざけのような行動だが（少なくともホムラは本気で楽しんでいるが）魔力の譲渡は恐ろしいほど正確に行われていた。

どれほど熟練の魔術師でも魔力を完全に操ることはできない。魔術発動時に無駄な魔力が誰にでもあるし、魔力譲渡の時は魔力が拡散して、受け取った時には大分減っているものだ。

だが銀が何度かこの二人の間で行われている魔力譲渡を目にした時、そのような拡散は見られなかった。

銀が見た中で、一度も、

「三人とも、ちよつといいか」

銀は自分でも気付かない内に笑っていた。

彼はシンラの成長を楽しみにしていたのだ。

「……で、俺たちにキスをして見せると？」

「ああ、簡単だろう？」

「ふざけるな!!」

バン!!と円卓を叩き、シンラは銀を睨んだ。

「ふざけてない。魔力転移の見本を見せればサクラもそこから何か学ぶかもしれないだろう?」

「だからってなんで師匠とキスすることになるんだよ!?!」

「……まさか俺の方がいいのか!?!」

「その面白くない冗談を言いやがる口を消し飛ばしてやるうか!!」
銀はつまらなそうに溜息を吐いた。あまりの状況にシンラの堪忍袋は弾け飛びそうだった。

「紅さん、あなたがシンラにキスをしていたのはなぜですか」

おもむろに尋ねる銀に番茶を飲み干してから、ホムラは口を開く。

「キスが好きだからです!!」

「そんなことを堂々と宣言しないでください!!」

見事にシンクロしたシンラと銀のツツコミを華麗にスルーし、ホムラはお茶のお代りを注ぐ。

「まあそれも本気なんだけどね。あたしんとしては。

でも本当に魔力の転移に向いているんだよ?だから、サクラにお手本として見せるのは悪いことではないと思うよ?」

好きに言ってくれるとシンラは心底疲れた表情で肩を落とす。

これしかないのかと諦めることにした。何故ならリップクリームを丁寧に塗り始めたホムラを彼は止められる気がしなかったのだ。

それもどうかと銀は思っていたのだが、自分が言い出した以上今更止めとは言えないと妙なプライドを張って事の顛末を眺めていた。

《天照》はホムラの背後でどうしようもないわねと温かく(?)見守ることにした。《アルテミス》はどうでもよさそうに欠伸をしている。その姿を見ていると本物の猫のようだ。というか猫だろう。

サクラはこれから何が始まるのかと、映画の開始を心待ちにする子供のように両手を握りしめてシンラとホムラを見つめていた。

各人が準備を整えて(?)その瞬間を待っていた。

「それじゃ、行くね」

「お、お願いします」

二人は何故か正座して向かい合いともにお辞儀をし合っていた。

「……」

「……」

二人ともそのまま動かない。常なら問答無用に接近してくるのだが、今回はホムラはじつと見据えるだけだ。

ああ、それにしても吸い込まれそうな赤い瞳だ。シンラは目を逸らしたくても逸らせない微妙な心境に悩まされながら彼女の瞳を見つめ続けた。

「ねえ、シンラ君？」

「な、なんですか？」

すぐ目の前にまで近づくホムラ。

「偶にはシンラ君からして欲しいな」

ガコンツッ！と銀が円卓に頭を思いつきりぶつけ、その後ろの猫が月上の物体から滑り落ちそうになった。

この時、銀は（もうあんたら付き合えよ！！）と心中で叫んでいた。

ホムラの後ろの《天照》だけが本当にどうしようもないわねと特に変わった様子もなく思っていた。

「でも、僕が魔力を送るわけじゃないですし、やり方もわかりませんから」

改まった口調の一人称「僕」を使ったシンラの言い訳じみたセリフに諦めたように息を吐いて、ホムラは迷わず動いた。

唇と唇が触れ合う。四五七回目のキスはリップクリームの味がした。次にホムラの甘い香りが彼の鼻腔を擽る。

理性が乱れるのを感じる。本能が、体が彼女を求めてしまう。

だが、それは次に感じるものが、幸か不幸か抑えてしまう。

炎。熱く燃え盛るホムラの炎がシンラにより深く理解させてしまうのだ。

これは魔力の譲渡なのだ。

もちろんホムラがそれ以上の意味を込めているのは知っている。しかし、信じてはいない。

人は人の気持ち完璧に理解できないとシンラは思っている。精々二〇%理解できれば良い方だ。そんな考えを持っているからこそ彼は例え何となく分かってても、信じることができないのだ。

もし、ホムラが思いを口にすることができれば何か変わっていたかもしれない。だができない。それはホムラの弱さでもある。

それを分かった上で、シンラは何もできずにいる。言い訳が、二人の仲を妨げているのだ。

より深く、ホムラはシンラを求める。シンラの歯を舌でノックして何度も開くように促す。

少し開いた際にシンラの口に舌を侵入させ、ディープキスに移行したところで、

「うつつん!!」

銀の咳払いを聞いてはつとした二人は離れた。何かを心の奥で繋げたまま。

「とサクラ、今の見えたか？」

もちろん銀は魔力の流れが見えたのかという意味で聞いたのだが、サクラはぼうつとしたままシンラを見つめていた。

「サクラ？おい？どうしたんだ？」

「すごい!!!人間はすごいです!!!まさかこんな魔力の渡し方があったなんて!!!」

無駄に瞳を輝かせ、サクラはホムラの手を握った。

「ホムラさん、ありがとうございます!!!」

正直下心ありまくりのホムラとしては、そんな純粋な感謝の気持ちを向けられると多少罪悪感のような申し訳なさを覚える。

すぐにシンラに向き直り、サクラはじつと見る。

「わたしもすぐに実践したいのですが!」

これにはホムラも唾然とした。恋愛などの概念がない故に、それに伴う羞恥心なども精霊にはほとんどないのかもしれないと彼女は

考え、納得させた。

それでも、なぜか靄が彼女の心を覆っていると分かっていた。

「シンラさん、わたし早く一人前のパートナーになりたいんです。そのためには何としても魔力をあなたにさし上げないといけない」

真剣な目をした彼女に下心を抱くのは失礼だとシンラは思う。

彼女には彼女の目的があるのかもしれない。シンラはなんとなくシンパシーを感じていた。どこが似ているのかは分からないのだが。

「……………」

見つめあう二人、精霊とはいえサクラは割と美少女だ。ホムラのように明るいだけでなく、少し儂さが漂う感じの少女。

そんな彼女とキスをしていいのだろうか。それは、シンラだけの問題ではない。

「……………」

シンラが視線をやった先にはホムラが一切の表情を消して、ただ吸い込まれそうな赤い瞳を向けていた。

（だが……………）

彼にはやるべきことが、やらなければならないことがある。

それを果たすために、サクラの力は必要だ。

サクラの溢れるほどの力を目にして、シンラはそれを欲した。

例えそれでホムラが、……………嫌だと思っても。

ここにも彼らの不明確な関係が影響を及ぼしているのだった。

「……………」

シンラは重々しく頷いた。

（お、重すぎる……………）

一人、なんでこんなところにいるんだろうかと思っている男が一人。そう、御子柴銀だ。

（俺、こんな修羅場にいるべき人間じゃないだろう）

とはいえ、やはり提案者の自分が見届けなくてはならないと意地

を張っているのだ。

(……ははは)

《アルテミス》は苦笑しながらその契約者を見守る。彼がどこことなく羨ましそうに見えるのは気のせいではない。

(誰を羨んでいるのですか？シンラさん？それとも彼女たち？)

横顔だけ不機嫌にして銀は言外に語る。

黙ってくれ、と。

サクラがゆっくりと近づく。

シンラはマナーかなと思ひ、目を閉じる。

すぐに彼女は彼の唇を喰らうようにキスをした。実際に何度かシンラの唇を軽く噛んでいた。

シンラは特に痛みは感じなかったが、人によってキスの仕方は変わるのだなど、どうでもいいことを考えていた。

ホムラも激しいという意味では似たようなものかもしれない。ただ、やはり慣れた感じはあった。

サクラは慣れていない。

当然なことだろう。前日まで精霊界にいたサクラはキスがどのようなものかも知らなかったのだ。する機会もなかったのだろう。

どこか熱に浮かされたように貪るサクラはホムラがしていたように舌を入れ込もうと、シンラの歯の隙間に潜り込め、半ば無理やり開かせた。

ホムラなら、きつと開くまで待つのだろうとぼうつとし始めたシンラは考えていた。

ホムラはその様子を直視できず、視線を逸らした。

痛い。苦しい。切ない。苛立たしい。

サクラは精霊だ。その魔力を得なければシンラは、一人前の魔術師には成れない。そのためにこれは必要なことだと言いつける。

だが、納得などできるはずもなかった。

(どうしてこんなに……)

ホムラは童貞殺しの名の如く、多くの人物と関わってきた。シンラとは違って名実ともに恋仲となった男もいた。

酷いことだがその時ホムラは二股三股ぐらいはしていたりした。さらに相手の男とは別の男とキスしているのを敢えて見せつけたりした。

それがこんなに苦しいことだなんて、彼女は知らなかった。

(むう、どうしてくれよう)

取り敢えず何か自分に奉仕させよう。夜這いもしばらく続けてやるう。

そんなことを思いながら彼女は空を見上げていた。

暖かい、春の木漏れ日のような温度をシンラは感じた。

ホムラの魔力とは違う属性の魔力。サクラが言っていたようにそれは《光》だ。

魔力の感覚とでもいうものが違ったのだ。

それ以上に違うことがあった。

それは量。圧倒的ともいべき量だ。

ホムラはどうしても《天照》から与えられた魔力をシンラに与えることしかできない。つまりは魔力の又貸しである。

故にどうしても与えられる魔力には限度がある。そもそもその魔力の貸与でさえ、その後の魔力を使った訓練のために使われるもののために、ホムラ自身の魔力を残す必要がある。

「はん……、うう……」

「!?!?……ごふっ!!」

咳込み、シンラはサクラから離れた。

「あれ?どうしたんですか?」

サクラの舌が彼の喉の奥を吐いたがために、彼は咳き込んだのだ。相手のことを考えられない下手なキス。それがサクラのファーストキスだった。

涙を浮かべながらサクラを覗む。

(いや、それは仕方ないな)

そもそもホムラほどにキスに慣れている人もいないのだ。(それならシンラもキスに慣れていることになるが本人は気づいていない)

「悪い、ちよつと咽た」

適当に誤魔化してから、シンラは改めて自分の中の魔力を感じ始めた。

「どう、ですか」

サクラや銀、それにさつきまで目を背けてたホムラもぐいとシンラを見つめる。

「成功だ」

シンラは掌に魔力を集中させる。すると腕首から先が光を発し、輝き始めた。

「おめでとう。シンラ」

『おめでとうございます。シンラさん』

銀と《アルテミス》が相次いで祝福する。

しかし、シンラとしては今一つ喜べない。

キスなら魔力を渡せるサクラだが、今後キス以外の方法を見つけないと大変なことになるような気がするシンラだった。

もつとも、サクラがそれを気にしているかといえば、

ちらつとサクラをシンラは横目で見た。

呑気に笑顔を浮かべている。

先が思いやられるとシンラはこっそり溜息を吐いた。

『おめでとう。さて、シンラ君も無事に魔力を得たことだし、例の件を話しましょう』

円卓の上に立った《天照》はそう言っただけでホムラを見た。

「いえ!?何!?!」

不自然なくらい驚くホムラにシンラは何してるのこの人といった眼を向ける。

『とばけないの。川瀬准将からの命令があるでしょう』

あつけなくばらされホムラは子供のようむくれ、絶対話すものかとそつぽを向いた。

サクラを除いたその場にいる誰もが『ガキか!』とツッコミたくなつたが、我慢する。彼らは大人なのだ。そしてサクラは空気が読めない天然なのだ。

もう面倒なので《天照》が代わりに説明し、ようやくシンラも状況を把握した。

「昨日のお客さんが川瀬准将だつたんですか？」

シンラは冷たい表情の男を思い出す。

「師匠、それならそれで教えてくださいよ。俺も「永久凍土のゴロ」と呼び恐れられる日本最強の魔術師の一人に会いたかつたですよ」

川瀬五郎は最強高度の氷属性の魔術を多用する。それ故に海外の軍隊からは「永久凍土のゴロー」の名で知られている。

もつとも、シンラが想像するような魔術を彼は使わないのだが、それはまた別の機会で語るであろう。

「いや! あたしん、あいつ大っ嫌いだから! 顔合わせるのも嫌なのに何でわざわざお気に入りだのシンラ君を紹介しなきゃならないのよ!」

キーンと怒り狂うホムラ。その頭上に留まり、《天照》は連続でつつきを食らわせる。

「痛い! 痛いから!」

『いい加減にしなさい』

なんとなくシンラにとっては見覚えのある光景だ。彼はよくこんな風に痛がるホムラを見ていて、何をやっているのかと不思議に思つたものだが、《天照》がホムラを諷めていたのかと長年の疑問が解消された。

『とにかく。全てはシンラ君次第。私たちが口出ししていいものじゃないわ』

まだ不服そうだったがホムラは黙ってシンラを見つめる。

「シンラ、お前はまだ契約したての魔術師だから、断ったっていいんだぜ？」

一応銀は彼に退路を示す。だが、彼はシンラがそれに従うとは思っていないかった。

「どうします？シンラさん？」

サクラは無垢な瞳をシンラに向ける。全てはシンラが決めるものだと言外に言っているようだ。シンラは思った。

しかし果たしてそのような考えが彼女にあるのかどうかは、本人を除けば誰にも分からない。

シンラは自分の中に渦巻くサクラの光を目を閉じて感じた。それは意識を集中させれば体のどこでも感じることができるものだ。

彼は日々この魔力の提供を受けて、体に蓄積させていくのだ。

それをどこかで試してみたい。それも実践で。そんな思いがシンラの中に芽生え始めていた。

陰陽師への興味は二の次に、彼はその意思に従うことにした。

「行きます。京都へ」

サクラは微笑みながら頷いた。

これにより、彼らの京都への旅が始まることになった。

ホムラはむくれていた。この状況が川瀬の思い通りであるのが気に食わなかったのだ。

（そんなに怒らないの）

《天照》が魔力を介した通信で彼女を宥める。《天照》はホムラの抑え役兼宥め役なのだ。

（でも〜）

（でもない。シンラ君にも実戦を経験する機会はいずれ出てくるわ。なら、私たち師匠が見守れる状況で慣れさせておくに越したことはないわ）

（……）

ついには通信ですらも無言を通し始めたホムラに《天照》呆れ気

味ながらも、これは最終手段を使うしかないかともう一度だけ話しかける。

（そんなに不服なら、シンラ君との京都デートだとも思えばいいじゃない）

（……デート？）

聞き逃せない単語に反応したホムラは考える。

京都 舞 和服 帯ぐるぐる。

（よし！行こう！！京都へ！！）

（自分で仕向けていてなんだけど、単純すぎない？）

そんな呆れ声にも気付けないほどホムラは舞い上がっていた。

多大な不安を残しながらも、彼らの旅が始まる。

とりあえず寝台特急を用意しようとホムラはほかのメンバーにはれないようにこっそりと部屋を抜け、携帯電話を取り出した。

寝台特急の方が、彼女の夜這いに都合がいいのだった。

7 《光》（後書き）

早めですがこれにて1章終了です。

あと6話の人物の話を二つ追加しますが、シンラたちは登場せず、新キャラオンリーの断章という形になります。

それともう一つお知らせを。

個人的事情により、年明け2011年1月の間は更新ができません。

大変申し訳ないのですが、しばらくお待ちください。

新年の更新は2月3日からの予定です。12時頃に覗いてください。

詳しくは活動報告にもありますのでよろしく願います。

断章1 人災警官隊（前書き）

この小説はフィクションであり、実際の人物、団体、国家等とは何の関係もありません。それ故に、一部科学法則を無視した現象があります。

今回は残酷表現があります。

苦手な方は次話から読んでいただいても話は分かります。きつと。

断章 1 人災警官隊

中国解体後に東京の西部の一角に巨大なビルが建設された。ルナタワーと名付けられたそれは二〇〇四年に全長二三二メートルの都庁に次ぐ高層ビルとしてようやく完成した。

ここは現在日本に住む旧欧州人や日系欧州人が住まうために政府の税金を用いて作られた。冷暖房完備、十階に一つ温泉が用意され、医者や警察、コンビニや家電店など様々な施設がこのビル内に用意された。だが、元々ここは人が住むための建物であり、当然のように一世帯あたりに一部屋用意している。

建設当時からここは下手な金持ちよりも豪勢な生活ができると、国民の不満を買ったが旧欧州人たちは自由な生活を保障されておらず、将来は何らかの国家奉仕（多くは軍役など）に就かなければならないのだ。

その事実が明らかになると自然と不満の意見も収まった。

そんな来歴のあるこのルナタワーが爆弾テロの標的となった。

爆破によりちょうど中間にあたる階層の二四階が爆破され、多くの住人や、関係者たちがテロリストの人質となってしまった。

その事件の解決、具体的には犯人のテロリストの制圧（逮捕ではない）、人質の解放のために警察庁はある部隊に出動を命令した。

その部隊が人災警官隊である。

人災警官隊はテロの鎮圧し、人質解放を目的に結成された機動隊の一つだ。だが、実質彼らはレスキュー隊と機動隊の働きをしている。

その装備は世界最新のもので、サイバーテロにさえも対応することができる。

また、公的組織にしては珍しく魔法士と一般人の混合された組織でもある。

ルナタワービルは建物の中心に一貫したエレベーターが通り、その扉の周辺がホールとなつている（ちなみにエレベーターは南北にもう二台）。そこから各小部屋へと続く通路があるのだ。ここまでそのような構図が続いていたため、この先もそうである可能性が高い。

書類ではマンションに分類されているが、中身はホテルとそう変わらない。

爆破階層の一つ下のルナタワー二三階のホールには煙は少なかつたものの、爆発の衝撃で壊れた扉や窓の残骸があちこちに散らばつていた。

軽量酸素ボンベとマスク、防火服製の防弾服を着た黒尽くめ人災警官隊四〇名の中の一人の青年、かつ魔術師でもある藤原真左人はそこで奇妙な感覚を感じた。

（嫌な予感がする）
酸素マスクの下で顔を顰め、天井を見た。

彼は風属性の精霊、《薰風》くんぷうと契約した魔法警官でもある。

《薰風》の魔力量は少ないものの契約者にある特殊能力を与えることができる。

予見能力。不定期に発動するその能力を真左人はそう呼んでいた。

（……隊長）
（どうした藤原）

無属性魔力を用いた双方間通信術で真左人は人災警官隊の隊長、

白葉孝広しらはたかひろに話しかけた。

（嫌な予感がします）
（何？お前の力が知らせているのか？）

真佐人は無言で肯いた。

孝広は魔術師である。一般人と魔術師が共に活動する団体で、魔術師が指揮を執ることは珍しいことである。

それだけ孝広は上司にも部下にも信頼されているのだ。

(分かった。なら念のため隊を二つに分けよう)

(ありがとうございます)

(いや、礼を言うのは俺の方だ。用心しておくに越したことはない。お前の進言がなかったらともしもの時の対応を忘れるところだった) おそらくそんなことはないのだからと思いつくと思いつくしながらも眞左人は納得することにした。

「ここで隊を二つに分けるぞ！南条、菱田、花崎、吉田の各小隊はここで待機、残りは俺と共に上階の制圧にかかる！」

号令と共に各員は行動を開始する。

上階の制圧組の眞左人は気を引き締めて階段へと歩き始めた。

二四階は地獄図のような惨状だった。

赤い火が煌々と燃え盛り、黒い煙が充満している。その中で人の生活していた名残が焼き尽くされていた。通路の壁や部屋の壁までも吹き飛んでいて、他の階よりも見晴らしがよくなっていた。

その結果、より凄惨な光景が目に見える。

ボロボロになった天井、壁、床に付着した赤黒い液体。そして、人だった部分の肉塊。

それは手であり、腕であり、足であり、脚であり、腰部であり、胸部であり、頭部であり、眼球であった。

それは爆発によってもたらされた死の光景だった。

臓物を、脳髓を撒き散らした死に様。

常人なら吐き気を覚えるこの光景を見てなお、人災警官隊の隊員たちは冷静に、しかしどこか荒々しく行動する。

「隊長、やはり階段はダメでした」

「そうか……。よし、準備しろ」

爆発の衝撃でここより上に続く階段が途絶えていたのだ。

孝広の命令で隊員たちは慌ただしく動き出す。

何故彼らは目の前の惨状に動揺せずに行動できるのか、それは死に慣れていることもある。

しかし、もつと大きな理由がある。

それは死を怯える恐怖心を憤りに変化させることだ。

恐怖は人を止めるが、怒りは人を推し進める。

自身の感情を上手くコントロールすることで彼らは残酷な争いの中を掛けてきたのだ。

隊員が配置についてから、三人の若き隊員が孝広の前に立つ。

一人は先程の予見の能力を持つ藤原眞左人。

その左隣に立ったのが女性隊員の倉田祈^{くらたいのり}。背の高い少女でマスクに隠れた髪は魔力に馴化して、金髪に変化している。

眞左人の右隣にたったのが、祈と同じく女性隊員の橋口瑞樹^{はしくち みずき}。一般的な身長の少女で眞左人と同期である。髪は稲光のような青白く、瞳はアメジストのような紫に馴化している。

三人ともこの隊の魔法士である。

「頼む」

はいっ！と三人が同時に返すと行動し始める。

隊にはある程度の出来事に対応することができるようにマニュアルのような策を用意している。

今回はビルなどの建築物で上階への道が閉ざされていた場合の行動。

まずは眞左人の予見能力で場所を決める。

「あそこの綺麗な部分がいいと思う」

ホールの中心の天井のまだ白い部分を眞左人は指さした。

「分かりました」

といい、背の高い祈はベルトに固定したケースからチョークを取り出した。

そしてその真下の床にチョークで何かを書き始めた。

その一方、

「思いつて何よ」

眞左人の隣でツンと言いながらも左のホルスターから九ミリ拳銃を取り出すのは瑞樹。そして銃を構え、その部分を狙う。

短く音を出した銃弾はペイント弾だ。

そして九ミリ拳銃を仕舞い、右のホルスターから別の銀色の銃を抜く。それは完成当初最強の拳銃と呼ばれた銃、S & W M 29。

リボルバー式の銃であるがそれには弾は込められていない。そもそも彼女はそれを必要としていない。

なぜならこのS & W M 29彼女の魔法出力器デバイスなのだからだ。

狙いをつけて引き金を引くと同時に詠唱魔術を発動する。

「磁力弾！」

鉛弾ではなく、不規則に揺れる磁力の弾丸が銃口から飛び出す。

もちろん本来の磁力は不可視な力だ。しかし、魔力を変換した磁力は黒い球状の物体に紫電が時より走っているように彼らには見える。

その磁力がペイントで印付られた天井に接触する。

そして、

バゴン！と音を立て、天井に丸い穴が空いた。

しかし、下でチヨークを走らせる祈には破壊に伴うはずの瓦礫が落ちてくることはなかった。

雷属性の魔術、磁力弾。それは硬度S級の魔術で、その用途は金属を磁力で操ることである。

強力な磁力を放つ磁力弾はそれ自体が強力なS極を帯びている。

故に周囲のS極の電子を弾きだす。そのS極電子は魔力によって金属に宿りS極の磁力を与える。

磁力弾はその金属と反発し合い、吹き飛ばす。

空いた穴の端々には鉄筋が上方に折れ曲がっていた。

大抵のビルは鉄筋コンクリート製である。鉄筋コンクリートとは弱いコンクリートの中に棒状の金属の鉄筋を入れることで補強したものである。

つまり、コンクリートの中に、鉄筋が入っているのだ。

磁力弾はそれに干渉し、それを弾いたのでアイスが棒から抜けるように、コンクリートだけが吹き飛ばされ、上階の天井に埋まってしまうのだ。

眞左人と瑞樹が頷き合い、二、三步、離れると祈が立ち上がった。その足元には白い石灰で描かれた円があった。

いや、正確には円ではない。外周は円だが、その中には文字、計算式、図形などが細かく描かれていた。それらは離れると幾何学模様のように見えた。

魔法陣とこの円を人は呼ぶ。

グラフィックス

図示魔術と似ているが、魔法陣は空間ではなく、地面に直接陣を描かなければ発動しない。

さらに書き込まれる情報が図示魔術とは精密さにおいて比較にならないほど魔法陣は詳細だ。

全ての魔法の原点とも呼ばれる魔法陣。それは人が生み出してきた世界を表現する方法全てが編み込まれている。

言葉、計算、絵、図。それら全てを書き込まれた陣。

魔法士という言葉の本来の意味、それは魔法陣を描き、呪文を読み、対象を測り、想像通りに事象を変化させる者。

現在では全ての魔法に関わる者を指す言葉であるが、その中でも魔法陣を描く者を魔法師と呼ぶ。

源流として、畏敬を込めて。

彼女はその魔法師である。

属性は《天》。

「準備できました」

祈は隊長に振り返って知らせる。

「分かった」

一言だけ告げ、孝広はその陣の中心に立つ。すると陣が起動する。

白線が宙に浮かび上がり、その上の孝広もそれに伴い浮遊する。

そして、丸く空いた穴に向かってゆっくりと上昇する。

天属性の魔力は空中移動、飛行に関する事象変化を得意とする属性だ。

この陣は祈の任意の場所へ魔力を込めた陣の上に立つ人間を移動させることができる。

その力から、「移動エレベーターさせる者」という異名を彼女は得ている。

孝広が二五階層に煙と共に侵入する。

そこはホールの中心。ここも窓や壁に爆発の被害が現れていたが、さほど厳しいものではなかった。

孝広はその様子を確認する。

エレベーターの扉を背に、肩からサブマシンガンを下げ、特殊部隊のような酸素マスクを被ったテロリスト五人は立っていた。

その少し離れた通路の壁を背にして、縄で自由を奪われた人質たちが座らされていた。

女性が六人、男性が八人と孝広は人質の数を数え、九ミリ拳銃を抜く。

そして突然の事態に理解が及ばないのか、呆然としたテロリストに向け引き金を引く。

二つの銃声が響き、どさりと重い肉塊が崩れ落ちる音が響く。

陣から降りて、孝広は残りのテロリストへ駆ける。

慌ててテロリストたちは肩にかけていたサブマシンガンを向ける。

その前に一瞬のうちに孝広は防弾防火性のベストから白く細い指揮棒を抜く。

そして、そのタクトの先端を敵に向ける。

刹那、トリガーを引こうとしたテロリストたち指が止まる。

いや指だけではない。足、腕、胴体、口、眼球に至るまで体の全てが微動だにできない。あたかもコンクリートの中に埋められたように、空気が彼らの動きを阻害するかのように、身動きできない。

孝広はマスクの下の表情を変えることなく、絶望に浸るテロリストたちに引き金を三回引いた。

次に陣に乗って上がってきた眞左人は孝広が撃ち倒した五人のテロリスト達を見て、顔を顰めた。

抵抗することもできず、命を奪われた彼らに向けた瞳に宿るのは同情。

孝広の魔力は《界》の属性。界とは即ち空間である。孝広は空間を操る魔術師なのだ。

テロリスト達が受けた魔術は《影縫い》。その存在を今いる空間に固定させることで、人の体の動きを止める魔術だ。もつとも、呼吸だけは対象外にしているらしい。

彼ら五人のテロリストは世界に動きを止められ、最期を迎えたのだ。

眞左人が複雑な思いで揺れる間に、下の階から陣に乗って瑞樹が上がってきた。

彼女は立つたまま、人質解放にも手を貸さない眞左人に話しかける。

「何してんのよ？」

喧嘩腰なのは二人が同期で切磋琢磨しあつた仲だからである。ライバルというべきなのだが、それは二人とも認めていない。

答えない眞左人の視線を追うと、血の海に浮かぶ五つの死体があった。

少し嫌な気分になりながら半眼で眞左人を睨む。

「いつもながら甘いわね。これだけのことをしてるんだから、当然の報いでしょ？」

テロリストたちを見る瑞樹の瞳に宿る感情。それは黒く燃え盛る憎しみである。

眞左人はそれには気づかず「……そうだな」と声を漏らしてから、「でも、あの人質の人たちに人が死ぬところを見せたくなかったよ。あの人たちは、ただの被害者なんだから」

隊員たちに指示を出す孝広を旧欧州人の人質たちは震えながら見て

いた。彼ら彼女らにとっては武器を持ったテロリストよりも、それを一人で斃した孝広の方が恐ろしいものだったのか。

(違うか……)

瑞樹は思い直す。確かにそういう面はあるのかもしれないが、それより彼らは人死に、ひいてはそれをしても動じない態度が恐ろしいのだろう。

この職に就いてから数々の人死を見てきたが、やはり初めて目の前で人が死ぬのを見た時のことは忘れられない。

悪夢という形で再現されてしまうほどに。

眞左人はそれを憂いている。彼らの今後を、悪夢を慮っているのだ。

(ホントにバカ)

人災警官隊は速やかな事件解決を求められる。彼らが出動している時点で会話による事件解決は望めない状況なのだ。

武力による制圧を行う以上、血を見るのは逃れられないというのに。

どうしようもないか、と瑞樹は話題を変えようと口を開いた時、

眞左人の息を呑む音が聞こえた。

眞左人は予知(正確には予感と言ったほうが正しいだろう)の力を持っている。

今彼が感じたのは悪いことが起こりそうだという予感だ。それは理論で説明できるものではない不安にも似た感覚。

彼は予感に従い、縛られた人質たちを解放していく仲間の姿へ視線を動かす。

その陰で、一人の既に解放された人質が不自然に内ポケットを漁っていた。

金属のような光沢が見えた瞬間、眞左人は脇差から小刀を抜いた。それにより、彼の魔術が発動する。

拳動魔術^{アクション}

一つの行動（たとえば、タクトを向けるなど、簡単なものが多い）をすることで、一つの魔術を発動させる魔術発動法。

小刀を抜くという行動で、発動したのは風属性の《加速》の魔術。彼の精霊、《薫風》は魔力量の多い精霊ではない。それゆえに、彼は単純な魔術しか使えない。

だが、その《加速》は人体の限界を超えた速さを彼に与える。その不利点があるからと言って、彼が弱い戦士（魔術師としては格下に見られがちではある）というわけではない。

瞬時にホールの端から端まで駆け抜ける彼の速度に、皆が呆然とする中、

ポケットから男が取り出した物が果物ナイフのような刃物だと認識し、眞左人はその手に、

疾風のような速度の手刀を食らわせた。

手のどこかの骨が折れるような音がして、男はナイフを落とした。

男が痛みに声を上げる前に、第二撃の手刀が男の首筋を襲い、意識を刈り取った。

「……」

あっけなく倒れた男。

鮮やかな彼の戦いに人災警官隊までも意識を奪われていた。

迅速にして単純、それが彼の戦い方だ。

「……内通者というヤツか」

眞左人に歩み寄ってきたのは孝広だった。

そのまま彼はドイツ製の九mm拳銃を抜く。「ッ！！」と人質た

ちは息を呑む。

「隊長！待ってください！！そいつはもう戦闘不能状態です！！」

眞左人は小太刀に手を掛けながら孝広の前に立つ。

「どけ、藤原」

孝広は隊長として一言命令する。それは隊である以上、従わなければならぬ言葉だ。

それでも、眞左人の本質がそれを拒む。

瑞樹や祈など他の隊員や、人質たちも固唾を吞んで見守る中、呆れたように溜息を吐いて孝広はタクトを振った。

倒れている男の方へ。

慌てて振り返った眞左人の目に飛び込んだのは、倒れたまま男がスイツチらしきものを取り出し、今にも押そうとしている光景だった。

もちろん、孝広の『影縫い』でその男の動きは封じられているのだが。

「反抗の意思の有無も分からない相手を拘束もせずに置いておくな。眞左人を避けて銃を構えたまま孝広は男に近づく。

その姿を眺めてから、男のシャツを捲った。

男の体には無数の茶色の筒がテープと共に巻きつけられていた。

「ダイナマイトか、またメジャーな物を……」

微苦笑した孝広を見ながら、眞左人は戦慄していた。

(自爆……)

もしも、

もしも孝広が男の動きを止めていなければ、どうなったか。

そして、一步遅れて憤りが生まれる。

自分に、さらに、こんなことをしてまで何をしたいのだという事件への怒りだ。

「何か、言い残すことはあるか？」

銃を向けて孝広は尋ねる。

スイツチを奪い、タクトを外し、男が話せるように整える。

「……バケモノめ」

空気が凍る。その言葉は魔術師に向けられたものだ。

それだけでこの事件の裏にあるものが、彼らには分かった。

魔術師排斥運動。

旧欧州大戦時、魔術よりも科学技術に傾倒していた日本には、魔術師を認めない考え方が根強くある。

魔術は誰にでも使えるわけではない。だが、(一般的には)科学

技術は誰もが等しく使えるものだ。さらに日本は全体で均一であることを望む文化がある。

一般人の彼らにとって魔法は目障りな存在だったのだ。

日本は世界の中で魔術師が暮らし辛い国だった。

しかし、三〇年前の沖縄戦。五年前の北方四島奪還戦に代表される国家防衛戦に参加する彼ら魔術師の活躍などで、その社会的地位も向上しているのだが、このような事件もまだ多いのが現状である。短員たちは動揺せずになり行きを見守る。

孝広は作業のように淡々と引き金を引く。

火薬を身に着けていない額から、男の頭蓋と肉を撃ち破り、その鉛弾は男の命を絶った。

孝広はきびきびとした動きで銃をホルスターに戻す。ただ、それだけだった。

上層階の制圧を他の隊員に任せ、隊長の白葉孝広と藤原真左人、倉田祈、橋口瑞樹の四人は先程から一つ階を上がり、二六階で救出された人質たちと共にいた。

二五階は煙で満たされて人質たちも苦しい状況だったのだ。

「隊長」

人質たちのケアを女性二人に頼み、孝広が窓を見下ろす中、真左人は話しかけた。

「何だ？」

彼らは四人ともマスクを外していた。角刈り気味の孝広の野性的な顔が、不機嫌にも見える。

「その、……すみません」

「命令違反の事か？なら気にするな。お前だからな」

孝広は微笑する。

「すみませんでした」

深く頭を下げた後、真左人はすっかりした表情になり、

「ところで、このテロの目的は何なんでしょう?」

人災警官隊に回ってくる事件は武力で制圧することが多いため、その実詳細な情報が伝わらないことが多い。

それには情報を隠そうとする政府の意図があることもあるのだが、もつとも末端隊員の眞左人はそれを知らない。

「俺は旧欧州人への差別活動関係のテロだと上から聞いたが、どうも違うらしいな」

先の内通者の言葉から、これは魔術師排斥を訴えるテログループの活動だと孝広は考えていたのだが、二つ理解できないことがあった。

「魔術師排斥関係なら、このルナタワーを襲った理由がわかりませんね」

そうだな。と孝広も首肯する。

反魔術師のテロならもつと他に狙うところがある。魔術省に魔法出力器の生産業者、技巧者組合デバイサーの工房、魔術学校など魔術に関する場所は多い。

にも拘らず、ルナタワーを襲った犯人たちの思考が理解できない眞左人。

しかし、孝広にはある仮説があった。

「心当たりがあるとすれば《銀閃シルバー・ナイツの騎士団》ぐらいだな」

《銀閃の騎士団》とは旧欧州人たちが所属する日本軍の隊名だ。彼らは五年前の北方四島戦の際から活躍し始め、今では魔術師師団団長の川瀬五郎から絶大な信頼を得ている。

ルナタワーの住人は多くがその《銀閃の騎士団》の関係者だ。もしここを抑えれば、軍の魔術師への牽制となり得る。

それを一応知っていた眞左人は成程と納得したようだが、孝広はもう一つの疑問で頭を悩ませていた。

(それ以上に、何故今回の事件の詳細を上は隠すんだ?)

知られたらまずいことを、このテロリストたちは知っているのだろうか。

目を細める孝広は、見えないものを見ようとしているように真左人には思えた。

ようやく制圧が完了したとき、人質の数は総勢五〇〇人以上。犯人は生き残った者だけで十二人居た。

ここからが人災警官隊の真の見せ場である。

三〇階まで上った彼らは、それぞれの魔力を合わせた魔術、即ち大規模魔術を発動させるため、円陣に組んでいた。

彼らの魔力は祈のチヨーク型の魔法出力器に宿る。

それを使い、祈は陣を描いていく。

一方、隊長の孝広は犯人を含めた二六人の人質たちを二九階に集めていた。

タクトを抜いた孝広は、先にテロリスト以外の人質一人に先端を向け、右に一回転させる。

すると向けられた者はその場から消えてしまった。

驚く一同を無視して、次から次にタクトを向け回転させる。

界属性の魔術《影縫い》。それは存在を空間に固定する魔術だ。

それを応用すれば「今存在する空間から離れた別の空間に固定することで、空間移動する」ことができる。

平たく言うとテレポートというものである。

しかし、一人一人しかできず移動距離もそれほど長いものではない。

故に彼は二三階に待機した別働隊の元へ送ることしかできない。

『隊長、避難開始させました』

「分かった。今からテロリストの生き残りを送る」

そして、それを終えると彼は上階の動きを待つ。

その上階では祈が魔法陣を完成させていた。

大規模魔術「天空塔」。それが作戦名でもある。

孝広の待つ二九階層に、比較的に怪我もなく元気な人質と共に人

災害官隊は下りていく。

「何が起こるんですか？」

眞左人の警護する銀髪に碧眼の旧欧州人の少女が不安そうに尋ねた。

「へへっ、まあ見ときな」

回答していないのだが、二カリと笑って天井を見上げる眞左人からは不安は感じなかった。

二九階で窓を開き、孝広は煙草を吸っていた。

最後に二九階のホールに辿り着いた祈が、起動の式を描く。

するとキシキシと音を立て、天井に近い壁にヒビが入る。

銀髪の少女が少し恐怖を感じて眞左人の手を握っていた。

眞左人は少し驚いたが、弱く握り返す。

「大丈夫、心配はいらない」

少女の眼を見て頷く。

「は、はい」

頬を朱に染めて少女も頷く。

その時二九階より上が切り離されたように浮き上がった。

大規模魔術の陣が三〇階の床を動かし、五〇〇名近くの人質たちをそこから上の階層ごと移動させる。

ゆっくりと地上に降下していくタワーの上部は、まるで空を飛ぶ神秘の城のようである。

それが「天空塔」。祈の指定した近くの広場まであの構造物は飛んでいく。

これらの働きにより、残る人質は少女が六人、少年が四人、成人男性が一人、成人女性が二人、男性老人が一人の十四人だった。

しかし、彼らにはそれ以上何もできなくなる。

魔力の枯渇により、魔術が使えないのだ。それに加え、長時間の作戦の為隊員たちの疲労も酷い。

こんな中で、火の勢いが強い階層を防火服の無い人質たちと共に抜けるのはほぼ不可能だった。

もちろん彼らには策がある。

分けられたもう一つの班がいずれ先に渡した人質たちを地上に届け、こちらの救出に向かってくるのだ。

それまでは彼らもゆっくりできる。

人質たちもそれを知っているため、比較的リラックスした状態で、隊員や住民同士で談笑している。

だが総勢四十名ほどが得ていた休息は、長くは続かなかった。

(む?)

孝広の携帯電話型の連絡機が震える。

見るとそれは人災警官隊の特秘回線の番号。

サイバー技術を専門にする隊員たちが政府にも警察庁にも報告せず、勝手に作った回線だ。

「白葉だ。どうした?」

孝広は連絡に応じて連絡機を耳に当てる。

「……隊長、聞こえていますか?」

どこか緊張したような声の主は羽衣はころもたくみ。人災警官隊のアナライズ

担当であり、実質隊のナンバー二である。

「どうした?」

声音から異常に気付いた孝広は少し緊張した面持ちで次の言葉を聞いた。

『隊長。政府の命令でそちらを救出できなくなりました』

「……どういう事だ?」

動揺はせずに冷静に聞き返した孝広であったが、その心拍数はにわかにながりに続けている。

嫌な予感が血液と共に頭の中をよぎる。

『公安が手に入れた情報で、そのビルの下に、ビルを倒壊させるほどの量の爆薬が仕掛けられていることが分かりました』

「……」

それだけで、孝広は理解してしまった。

助けが来ない理由を。

間に合わないのだ。

「あと五分で爆発します。」

……政府は被害の軽減のために僕らに救出を禁止して、付近の住民の避難誘導を命じました」

いつの間にか、吸いかけの煙草の灰が、手に迫っていた。

その場ですり潰しながら、孝広は決断する。

（知らずに死ぬより、知って死ぬ方がいい）

「隊長……」

「よく知らせてくれた。助かった、後を頼む」

何か言おうとした巽を封じて、連絡機を切る。

一度顔を両手で覆う。

思い出されるのは、幼い娘と最愛の妻の顔。

それを振り切り、彼は立ち上がり、深く頭を下げた。

「隊長？」

顔を上げると疲労困憊の隊員たちとキョトンとしているタワーの住人達。

「今、下から連絡があった。タワーの地下に爆弾が仕掛けられていたらしい。犠牲を減らすために、救助は来れない」

呆然とする。重なる不幸に旧欧州人の住人達はそれを嘆く余裕もなくなっていた。

数多の修羅場を乗り越えてきた人災警官隊たちでさえも絶望に暮れる中、一人だけどこか安らかな表情をしている隊員がいた。

「藤原？」

眞左人は不安気でもなく、ただ安らかに座っていた。

「大丈夫ですよ。助けは来ます。必ず」

どこから溢れたのか、彼は自身に満ちた表情で笑っていた。

「お前の予知能力は知っているが、それでもこの状況を切り抜けることができるとは思えん」

敢えて孝広は否定的な物言いをする。それは眞左人の能力を知らない者たちが彼の言葉が無責任なものと怒ることを抑えるためでも

あつた。

「俺も分かりません。ただ、そんな気がするんです。誰かが助けてくれるような」

やはり要領得ない予知能力だと内心嘆息するが、それでもその予感に助けられた経験は無視できない。

その時、ギギっという音を上げて、ホールの中心に位置するエレベーターの扉が開かれた。

咄嗟に孝広をはじめとする人災警官は銃を抜いた。

扉から現れたのは一人の青年だった。

黒髪黒目の純日本人風の背の高い青年。茶色の外套を羽織り、左手に黒い鞘に納められた日本刀を持っていた。

拳銃などの銃兵器で武装していないことから、孝広はこの男が魔術師と断定した。

もしそうであれば、魔術同士の対決となりうる。魔力を使い果たした彼らには遠慮したいことである。

「……」

しばし無音が世界を支配する。

青年は気怠そうに辺りを見渡し、口を開いた。

「突然だが、助けてほしいか？」

思ったよりも低い声で青年は告げる。呆気なく。素っ気なく。

すると、旧欧州人の男性が答える。

「できるのか？」

彼は鷹揚に頷く。

「ああ。詳しいことを話す猶予はない。だが、俺の質問には答える」
誰もが息を呑み彼の言葉を待っていた。

「もし、お前らが生き延びたなら、お前らは公式には死んだことになる。お前らは元の生活には戻れないだろう。そして、俺はこの事件の裏にあることをお前らに教える。

本来なら知らなくてもいいことをな。

それでもいいなら、俺に手を伸ばせ。

それでも生きたいなら、俺に手を伸ばせ」

青年はこの場の全てを支配しているかのようになり、言葉だけで空気を呑み込んでいく。

しかし、唯一の老人がそれを破るように口を開く。

「ワシはここに残る」

青年は驚いた様子も見せず老人を見つめた。

驚くほど黒く澄み切った瞳だ。

「お祖父ちゃん！！何言ってるのよ！！」

ようやく動いたのは先程眞佐人にすがりついた銀髪に翡翠色の瞳の少女だった。

「いいんじゃない、アイナさん。ワシはもうここで朽ちるべきなんじゃない。あの子のためにも」

寂しそうに笑う老人だったが、青年の眼にはホツとしているように見えた。

長年の苦役から解放される間際のような、どこか清々しい。

「違う！違うよ！ヘルはお祖父ちゃんに生きていてもらいたいはずよ！！だから、あの娘は軍に入って、お祖父ちゃんの分まで奉仕義務を果たしてるんだよ！！」

「……………」

老人は沈黙する。どこか苦々しそうに。

青年が表情を消した顔で老人を見つめた。

「ご老人。事情は知らないが悲しんでくれる人がいて、生きる術が残っているなら生きるべきだと思うぞ。…………まあ、俺が今この状況で言うのもどうかと思うがな」

諭すように青年は語る。面倒臭そうに頭を描いて青年は半眼で老人を見た。

「あの子は、…………ヘルはワシを恨んでおる。あの子がワシの死を悲しむとは思えんな」

「そうかもしれないが、目の前にアンタの死を悲しむ人がいるだろっ？」

老人はアイナと呼んだ少女を見つめる。

彼女は涙を両目に溜め、今にも泣き崩れそうだった。

老人はやはり苦しげに胸を押さえながらも、アイナの頭を撫でて「すまんの」と短く謝辞を述べた。

「さて、他はどうする？」

このままここで死ぬか？何も知らずに、残したものに全て投げて死ぬか？

それとも荊の道と知りながら、真実を求め生き続けるか？」

青年は演説をするように語りながら周囲を見渡す。

地響きが聞こえた。

立つてられないほどの揺れに皆一様に膝を着く。

だが、青年だけはその中で立っていた。

「知らずに死ぬより、知って死ぬ方がよくないか？」

青年の背後から何か後光のような光が射している。まるでオーラだとそれを見たものは感じた。

背後の光と同じ輝きを持つ青年の瞳に吸い寄せられるように、全員が、最後まで警戒を解かなかった孝広までもが手を伸ばす。

それはまるで、救世主にすぎる人々の絵の、一枚の宗教画のような一瞬だ。

オーラの光が、ホールの中の人間を包み込む。

一瞬、蒼に煌めくと青年たちは跡形もなく消えていった。

遅れて爆発音が響き渡り、彼らのいた空間を崩壊させていった。

断章1 人災警官隊（後書き）

チートキャラの話なのにほとんど登場しない……。
彼を出すにはかなり長い前座が必要なのか。

そんなことより、なんで更新してるんだと疑問に思われたでしょうが、実は12月中はまだ更新できるのです。
今年はまだ一話追加して、書き納めます。

断章 2 正裁の天秤（前書き）

この小説はフィクションです。

ま、間に合った……。

断章2 正裁の天秤

藤原眞左人は真新しいベッドの上で目を覚ました。

簡素なシャツとズボンのインナー姿の彼は、現状を把握しきれなかった。

(ここは?)

起き上って見渡してみる。

折り畳み式の収納ベッドと、小さな机、そして衣装ケースだけがあり、他には何もない薄暗い部屋だった。

ただ、壁に当たる部分が遮光カーテンのようなものである。おそらく大きな部屋をこのカーテンで区分けして、いくつかの小部屋として活用しているのだろうと眞左人は結論付けた。

(……俺たちはどうなったんだ?)

無意味に動くよりもここで落ち着いて整理した方がいいと思い、ごろんと寝ころび、手を組んで頭に添えた。

(あの男が来て、手を伸ばして、それでどうして俺がのんびり寝てるんだよ?)

今更ながら、疑う眞左人。

目を閉じて思い出す。あの男の能力。あれはおそらく大規模な転移魔術だろう。

(あんなの、孝広さんでも使えないぞ)

そもそも空間に関わる魔力の《界》を扱う精霊自体が少ないので、眞左人には《影縫い》しか空間移動魔術を見たことがないのだ。

突然シャツと音を立て、カーテンが開かれた。

身構えて、威嚇のために銃を抜こうとしたところ、それが無いのに気づき、眞左人は頭を抱えた。

(今更銃とか小太刀がないことに気付いたのかよっ!!)

「……何をしていたらっしやるんですか？」

カーテンを開いて現れたのは黒いフードを被り、口以外の顔のほとんどを隠した少女だった。

その手には盆があり、それにコップに入った水がある。

「……え」と

どこの中世の魔術師だよ！！と眞左人は内心ツッコミを入れた。本当は今でも魔術師の正装にフード付きのローブはあるのだが、需要は少ない。

まあ、状況も分からないうちに荒事を起こしても仕方が無い。

「とにかく、どうぞ。お水です」

小部屋のある小さなテーブルに盆のコップを少女は置いた。一瞬、それを飲むべきか眞左人は逡巡する。もしも水に何かを入れられていたらと疑ったのだ。だが、武器を奪われている時点で彼女たちに抵抗しても何の解決にもならない。

立ち上がり、コップを手にして一気に飲み干す。

「もう大丈夫そうですね」

少女の唇が少し微笑んだように動く。

「聞いていいか？ここはどこで、あんたは何者だ？」

「ここは、とある貴族の屋敷。わたしは正裁ジャスティスの天秤ハルンサーの葉山香恵はやまかえです。正裁の天秤。眞左人には覚えがないが、おそらく何かの組織名なのだろうと結論付けながらコップを少女に手渡した。

「その正裁の天秤ってのは何をやる組織なんだ？」

「正裁の天秤とは魔術と科学の両方を適切に扱い、時には二つを合わせることで新しい技術を生み出そうとする結社の一つです」

少女は活き活きした声で即答した。

（歴史上、そういう組織は多少あったな）

例えば米国の自由人フリーマンという組織は魔術を研究しながら、工業企業などが参加していた。この少女が言う正裁の天秤もまたそんな組織だと眞左人は結論付けた。

「俺たちを助けたあの男もその正裁の天秤の一員なのか？」

眞左人の疑問に香恵は唇を笑みの形にし、
「ええ、彼は私たちのリーダー、アッセル・リーヒニストです」
そう答えた。

正裁の天秤のリーダーたる青年、アッセル・リーヒニストはルナ
タワーの事件を報じるニュースを見ていた。

『大変衝撃的な事件でした。テロリストによる無差別爆破、これに
よる死傷者は五四名。行方不明者は爆発時に巻き込まれた警察の機
動隊を含めて、九六名です。』

では、解説の沖さん。死傷者よりも行方不明者が多いのはどうし
てでしょう？』

にやり、と青年は笑う。

(それはほとんど俺が連れ去ったからだよ)

アッセルはタワーから脱出不可能になった藤原眞左人たち人災警
官隊と、タワー住人の計六五名を貴族の屋敷に移転させた。

その際同時に人の認識域を超える光を浴びせ、一時的に気絶させ
たのだ。アッセルとしては一時的のつもりだったが、長時間の
緊張状態にあった彼らはそのまま眠りについたため、タワー崩壊か
ら既に五時間が過ぎていた。

今はもう夜も更けているのだ。

(だが、それでも人数が足りない。つまりそれは……)

考えながら青年はリクライニングの椅子に腰を下ろし、そのまま
背もたれを倒し、寝ころんだ。

その背後に二つの黒い影が近づいた。

「……」

フツとアッセルは笑う。

「何しに来た？」

右側の背が高い影が低い男の声を投げかける。

「さあな？世界を救いに来たとしても言うておくよ」

青年は嘲るように唇を歪ませる。

アッセルは行動に男の隣の低い背の影が肩を震わせながら、

「ふざけてるの？」

声を怒らせて少し歯を軋ませるのは少女の声をした影だ。

「この世界の管理は完璧よ。あの人が作った世界だもの。あんたなんかに救われる必要はないわよ」

無言ながら男も肯定するように小さく頷いた。アッセルはそれを見ているが、何故か理解して、ため息を吐く。

「世界は確かに完璧かもしれないな。」

だが、お前たちは？本来はここにいないはずのお前たちがいつまでもここに留まつているから、妙なことになってるんだよ」

彼は実に面倒そうに首を回す。

「だから、早く帰れと？」

男は冷静に結論を言う。

「分かつてるな。だったら早く帰れ」

彼の背後の気配が薄れる。

最後に「それができれば、苦労ないさ」という言葉を残して。

(やれやれ)

面倒臭い奴らだとアッセルは呆れ、浅い眠りについた。

屋敷は眞左人が想像したものよりも広いらしい。

黒フードの少女に案内されたところだけで既に三つの宴会場クラスの大部屋を発見している。どこの貴族だよと本気で眞左人は頭を抱えたかったが、少女の手前止めた。

天皇制度や華族制度は廃止された日本だが、その実、華族から貴族たちへと名を変えた彼らは未だに政界などを牛耳っている。

貴族は国内の治政を担当し、軍は海外との交渉と戦闘を担当する。故に警察の上層部は貴族が大半を占めている。

対して軍は基本的に誰でも所属できる。魔術師師団団長の川瀬な

どは元はただの一般人だ。

講堂と思われる部屋に通された眞左人には、ある疑問があった。

比較的魔術師に寛容な軍とは逆に、貴族は反魔術師派が主流である。にもかかわらず、この屋敷主はおそらく魔術師であるあの青年アッセルや自分たち人災警官隊を保護するのは何のためか。そもそも魔術を認める思想に近い集団である《正裁の天秤》に協力しているのは何故か。

(どっちかっていうと、正裁の天秤が俺たちを引き込みたがってるからそれに協力した感じがするがな)

何気に特殊能力の予感を発動させながら眞左人は出されたコーヒーを飲んだ。

その時、眞左人は耳に生暖かい風が流れ込まされた。

ビクツ！と眞左人は肩を驚かせ、瞬時に振り返ると、

半透明で何かの虫のように腺が通っている羽を持つ小人の少女、まるで童話などによく出てくる妖精のようなものが浮かんでいた。

「……何やつているんだカオル」

「いやー、人を心配させた罰？悪戯？」

少女は悪びれた様子もなく頭を掻いた。

カオルと呼ばれた妖精の本名は《薫風》。眞左人の契約する精霊だ。

薫風だと呼びにくいので、薫の部分だけを訓読みしてカオルと呼んでいるのだ。

「……というか何でここにいるんだ？俺ら、一応転移術で移動したはずだから、お前じゃ補足できないんじゃないのか？」

「もう、ほんとに困ったわよ。お手上げ？王手？」

肩を竦めるカオル。

「疑問符を語尾に付けるのは止める。……それじゃ、どっしてここに？」

「いやー、よくわかんないけど、ここに来なきゃいけないと思ってね。野性の感？超感覚？」

「そんな曖昧なものを頼りにするなよ」

呆れて肩を落とす眞左人ではあるのだが、その実、彼も予感という曖昧なものに従っているのだが、あまり深く考えていないので彼は気づいていない

「ちなみにほかのみんなも同じものを感じてここに来たのよ。フィールシエア？共感覚？」

フィールシエアは共感覚の直訳だろう、とツツコム前に壁から白い翼を持った白馬が湧き出てきたので、タイミングを逸した。

「……《ペガサス》。頼むから壁から出てこないでくれ。心臓が止まる」

『……すまん』

低い男性の声が白馬から聞こえた。この《ペガサス》は天属性の精霊で、眞左人と同じ警察の組織、人災警官隊の一員の倉田祈の契約精霊だ。

他にも多々精霊が現れる。鷹に、黒猫に、牛にしては小さい何か、手のひらサイズのミミズクに、糸目のトカゲ等。いちいち壁抜けして出てくるので恐ろしい。

精霊はこの世界に存在しているのだが、その体は様々な物理法則には縛られないのだ。

ここだけなら、靈魂などとほとんど変わらないのだが、唯一の例外は契約した魔術師本人だ。精霊は契約者に触れることで物理法則の影響下に入る。そのため、電車などの公共交通機関に乗れば魔術師にしがみつく精霊が見つけることができる。ちなみに、見つける側の人間も魔術師なので同じような格好で乗っている。

そういう訳で、彼ら精霊は壁をすり抜けることができるのだが、眞左人は怖すぎるから止めてもらいたいのだ。特に突然後ろから出てこられるとキツイ。

ガチャッとノブを回す音がしたので見てみると、黒フードの少女が入ってきた。後ろに一人少女が立っていた。

薄暗い廊下の中、青白い髪とアメジストのような紫色をした瞳の

少女、橋口瑞樹は部屋に入って驚愕する。

「ここは、って何!?どこの動物ワンダーランドよ!！」

フードの少女は首を捻った。魔術師でない者に精霊は見えない。よってフードの少女が見たのは妙にビクビクしていた眞左人だけなのだ。

「……」

ギロとアメジスト色の殺意を込めた睨みを送る瑞樹。知らん知らんと首を振り、ジエスチャーで返す眞左人。

フードの少女が去った後、向かい合うソファにそれぞれ腰かけ、二人は会話する。

「で、何か分かったの?」

何で妙に上から目線なのかと眞左人は内心憤ったが、瑞樹にそれを言っても藪から対戦車砲が飛び出てくるので放置する。

「ここはどっかの貴族の屋敷だってことと、俺らを助けた男がアッセル・リーヒニストって名前らしいこと、あの女の子とアッセルが所属する組織が正裁の天秤って言うらしいこと、ぐらいいかな」

正裁の天秤とは魔術と科学の調和を求める組織だと説明し、彼らは自分たちを利用するつもりなのだろうと言った後、高圧的にフンと瑞樹は鼻を鳴らす。

「使えないわね。アンタ」

自分は何も調べてないのを棚上げにして何を言っただけだと眞左人は本気でキレそうだった。

『そう怒らないで瑞樹』

彼女のソファにいつの間にかゴールデンハムスターが登っていた。

「トール。あたし寂しかったよ」

掌に乗せて、瑞樹はハムスターに頬擦りする。

(なんだこの激変振りは!?)

驚愕し、震える眞左人。この雷女は意外と可愛いもの好きなのかと彼はその様子を凝視する。

「……何よ？」

種に染めた頬を膨らます瑞樹。

なんだこのかわいい少女は！と驚愕し、目を逸らす眞左人。不覚にも彼はときめいたのだった。

遂に眞左人たちがいた講堂に、アッセルが助けた八四名が集まった。

基本的に皆一様に助かったことを喜んでいたのだが、一人、後ろで冷やかな目でそれを見つめる男がいた。

人災警官隊長、白葉孝広である。

彼も他の隊員と同じく装備を一式管理されて、動きやすく、炭素加工した繊維で編まれたジャージを着ている。

その彼は壇上を睨みながら、行動を決めかねていた。

（奴は妙なことを言った）

確かに自分たちはほとんど死亡に近い行方不明だが、それとしても、自分たち元の生活を送れないとは思えない。

（一つだけ考えられるのは、政府にとって知られたくないことがある事件にはあったのか）

口止めが一番確実に簡単な方法は、その人物を抹消することだ。経費も少なく済む上に、信頼度も高い。

ならば、ここで聞かずに去るべきだ。そう孝広の理性は訴えている。だが、自分でさえ知らされていない情報を何故アッセルが知っているのか、その情報とはいったい何なのか。

それを知りたくてしょうがない。どうする。

悩んでも答えは出ず、アッセルが壇上に立っていた。

「さて、突然の出来事でまだ混乱しているだろうが、聞いてほしい」
アッセルは真剣な表情だった。

（動くなら今しかない）

瞬きを左右交互に二度繰り返す。

それが拳動魔術の発動キーだった。

アツセルの周囲の空間が歪む。

一瞬の後に、アツセルと孝広は屋敷の外の庭園に飛ばされていた。孝広とアツセルの距離は一〇メートル前後まで縮められていた。

「やって来るとは思っていたが、今のタイミングだとは想像できなかったよ」

突然の事態にもかかわらず、むしろ余裕に満ちた笑みを孝広に向けた。

「確かお前の魔力は尽きていたと思うのだが、どうやった？」

軽く微笑む彼に、孝広は齒軋りして、怒りを露わにする。

「俺の精霊の《ユグドラシル》は不定形の精霊なんだよ。実はあの事件の時もあいつはずっと俺のそばにいた。転移の時も一緒だったらしいぞ。気づかなかったのか？」

皮肉気に返したのだが、アツセルの表情は変わらない。続けることも言いたげに、掌を差し向ける。

「それで、俺が眠っている間に魔力の譲渡を済ませたんだ」

孝広はちらつと月光で浮かび上がった自身の影を見た。

すると少し影が揺らいだ。

彼の精霊は彼の影と同化し、常に彼に付き添っている。

つまり、彼は魔力の補充をどこでも行えるのだ。しかし、大抵の精霊は一日二四時間に一度しか魔力を譲渡できない。

ルナタワー時ではユグドラシルは魔力を提供できる時間ではなかった。だが、今は魔力譲渡が可能である。故に孝広は渡された魔力を使い、武器一式とを魔力で作り出した亜空間に納めていた。

亜空間からタクトと9mm拳銃を取り出し、まずは銃だけを向ける。「話せ。ルナタワーの事件の裏側を」

まずは自分が聞く。それがもし隊員やルナタワーの住人が知るべきではないと判断した時には、どんな方法を使ってもこの男を止める。そう孝広は覚悟しているのだ。

アッセルは肩を竦めながら口を開く。

「昼間のルナタワーの事件は反魔術師派のグループが起こした事件だが、その裏に潜むのは科学至上主義の貴族たちだ」

アッセルは銃を向けられているのに、臆面もせずに語り始めた。

「奴らは遂にニュートロンを完成させたらしい」

孝広はその一言を聞いて、あまりに衝撃的だったため、銃を落としそうになった。

「ニュートロンだ!?!」

およそ一〇〇年前、米国が完成させた兵器ニュートロン。それは爆発と放射線によって生命を駆逐する大量殺戮兵器だった。

日本では核兵器と呼ばれている。

核兵器は未だ実戦では使われていないが、米国ではエネルギーとしても既に使われている。また、実験も行われていて、中国解散の折に、太平洋のとある孤島で試験使用したことがある。

その当時、島の自然は壊滅し、人の住めない土地が一つ増えてしまったと学者は嘆いていた。

「これによって科学至上主義の貴族はこう考えたそうだ。『これなら大規模魔術に頼らなくても、大国と対等に渡り合える』ってな。それで、魔術師を排除にかかっているらしい」

馬鹿げたことだと孝広は苦々しく顔を歪め、内心で貴族たちを罵倒した。

だが、アッセルの言葉が真実だと決まったわけではない。と思い直し、銃に力を込める。

アッセルは特に驚かず、続けてポケットに手を伸ばす。

孝広はタクトをいつでも向けられるように構え、その行動を監視する。

「これが証拠の写真」

アッセルがポケットから出したのは一枚の写真。

真っ白な防護服に身を包んだ数人が、黄色い三角のようなマークが付けた白い設備に触れている。

「これは核反応を起こさせる施設だ。それで、この施設の研究が成功したようだ。」

来週には発表になるそうだが、政府はこれを使った発電所を作る法案が可決される。これでニュートロンを所持していると世界に示すつもりだ」

発電施設に核を用いることができるなら、兵器に転用することもできる。アッセルはそう言いたいのだ。

「まあ、これでも疑わしいことは多々あるだろうし、信用しろとは言わないがな。ただ、これで被害を被るのは魔術師であるお前たちだ。ついでに言うと、ルナタワーの旧欧州人は強力な魔術師が多い。それを管理するためにも本当は生け捕りにしたかったらしい」

次にアッセルは折りたたまれた紙と別の写真を取り出し、孝広に渡そうと手を伸ばした。

それを孝広は銃を構えたまま受け取った。

紙は書類だった。

書類には最後、人質はなるべく生かせ。という誰かの言葉が記されていた。

「それはテロリストとその背後の提供者の会話記録（パトロン）。そっちの写真は昨夜のルナタワーの防犯カメラの映像だ。写っているのは、特務隊か？」

特務隊。それは政府の密命を受け動く秘密部隊。

人災警官隊が動かないような国外のスパイなどを排除する組織。

それでいて、他国にスパイを送り込むこともする。いわば日本版CIA。

写真は地下のもので、黒づくめで顔も隠した集団が大量の何かを柱に張り付けている様子を映したものだっただ。

「タワーの支柱を爆破したのはテロリストじゃなくて、この国直属の部隊だったわけだ」

皮肉気に笑ったのはアッセルだったが、笑いたいのには孝広だった。人災警官隊は軍とは違い、政府の、ひいては貴族の指揮下にある。

つまり人災警官隊（自分たち）は身内に切られそうになったのだ。「万に一つ、このことが人災警官隊に漏れないとも限らない。だから突入部隊には消えてもらうのがシナリオだったようだぞ。まあ、お前の采配のおかげで全滅はしなかったが、このまま進めば残りの人災警官隊を含めた魔術師全てが、この国に潰されるぞ」

貴族は人一倍プライドだけが高いものが多い。そのためか、魔術という能力を自分たちが使えないのが腹立たしい。

そんな劣等感が、彼らの魔術師嫌いを生み出している。

その実態を知っている孝広は、射殺すかのような瞳をアッセルに向ける。

「馬鹿馬鹿しい。それが事実だとすればなお馬鹿馬鹿しい」

ドス黒い殺意を放ちながらタクトを向ける。

「だが、それを話す必要があるのか？ちゃんと自分たちは何も知らないと証明すれば、あいつらは普通に暮らせるはずだろう？」

「そうかもしれない。そうでないかもしれない。だが、最悪の事態を考えて動いた方が何事もいいものだ」

アッセルは影を落とした表情でその殺意を受け流した。

「……」

孝広は少し、納得してしまった。

アッセルの言う通り、そんな希望的な観測で物事を言われても信用できないだろう。

だが、それでも普通の生活を送らせてやりたいと思う彼の意思は曲がらなかった。

「お前には黙っていてもらう。あいつらに元の生活を送らせるためにな」

「……」

それでいいのか？

何も知らないまま、何時か魔術師だからと言って迫害されたり、殺されたりする日が来るというのに、今を平穩に過ごせればそれでいいのか？

多少苦しんででも、真実と向き合わなければならぬ」
遂に孝広はタクトをアッセルに向ける。

「眼球までも動きを封じられたアッセルに孝広は引き金を絞りながら言う。」

「お前のそれは理想論だ。人間はそんなに強くないんだよ」

孝広が、家族との生活を守りたいと思い、銃を撃つように。

正しいことを人がいつも行えるわけではないのだ。

バンツ！！

銃声と共に射出された銃弾がアッセルの眉間に迫る。

その時、

孝広は動かないはずのアッセルの唇が笑みの形に歪んだように見えた。

次に彼が見たのは真っ暗な庭園だった。

先程までアッセルが立っていた芝の上には靴型だけが残され、そこには誰もいなかった。

(何！？)

銃を構え直し、前後左右を確認するがどこにもいない。

(そもそも影縫いの魔術からどうやって逃げられるんだッ？)
存在を空間に固定されて動けるはずがないのだ。

例えるなら、この世界という面に存在という紙を刺しとめる釘、それが影縫いだ。

それを動かすためには多少紙を破る必要がある。

つまり存在が保てなくなる。

消えるのだ。

(消えたのか？)

少し緊張を解いた孝広に、

「油断しているな？」

と声が聞こえた。

瞬時にタクトを振るう。

彼が立っていた場所に、熱を持った光が襲う。

芝を焼く臭いと音が影縫いで移動した孝広に届いた時、

先程まで孝広が立っていた場所の一步後ろにアッセルが白い光に包まれて現れた。

神々しいとまで言えるその様子に、思わず孝広は息を呑む。

はっとして銃を撃つ。

アッセルはいつの間にか左手に黒い鞘の刀を持っていた。

刀を右手で抜き、振るう動きを刹那の間で行い、銃弾を弾いた。

銀色の刀身を自身の光で輝かせるアッセル。

「……何故、影縫いを抜けられた？」

銃を向けながら、尋ねる。

「それが分からないのか？経験不足だな」

どう見ても年下のアッセルに言われたのだが、全く違和感を感じなかった。

「《界》を操る魔術は、同じく《界》を操る魔術の干渉を受けやすい。つまり、妨害が簡単にできるんだよ。」

白葉孝広。お前が同系統の魔術師と対決の経験がないのが仇になつたな」

アッセルは笑う。

だが、孝広は静かに汗を流していた。

アッセルの言う通り、孝広は《界》属性の魔術師と戦ったことがなかった。

だが、この青年はそれを常識のように話す。

改めて、この青年は何者だと孝広は疑問を抱く。

そもそもルナタワーを脱した際の大規模な転移魔術は何だったのだ。

疑問が疑問を呼び、彼の中にえもいえぬ恐怖を生み出させる。

影縫いで動きを止める常の戦法は封じられた。

普通に銃弾を撃つても弾かれる。

(ならば、影縫いで移動し、死角から銃弾を撃ち込むだけだ！)
タクトを振るい、アツセルの背後に移動する。
はずだった。

孝広の表情が驚きに染められていく。

確かに魔術は発動したはずだった。魔力も消費されている。

だが、彼はそこから移動していなかった。

「俺の空間移動術は、魔力を広げた空間を自分の領域ソーンにする。その中を自由に瞬間移動できる。領域内の空間は俺の思うままだ。お前の空間移動ぐらい止められるよ」

この男は一体どんな魔術を学んだのだと憤る孝広。

(なら、最後の切り札だ)

銃を亜空間に戻し、円を描くようにタクトを振る。

アツセルの光は既に収まっていた。しかし、彼の余裕を持った表情は変わらない。

「アツセル・リーヒニストだったな？」

ニヤリと孝広は笑う。

タクトが描く円に、何かが集まっていた。

それは揺れだった。

陽炎のように揺れる球状になったそれは、濁った水晶球のように見えた。

『界弾』というのがこの魔術の名称だった。

界属性の魔術師である白葉孝広が使うそれは、世界の質量を重量に変化する。

世界、空間とは人には認識できないが、確かに存在するものだ。

そして、それには数量がある。世界の重さ、というものを人に干渉できるものに変化させ、放つ。

これが『界弾』だ。

空間の質量は莫大なものだ。それをぶつけられれば、体中の骨を砕き、押し潰される。

純粹な巨大な質量。それこそが最大の武器だと、この魔術を通じ

て孝広は実感した。

「これを受けきれるか？」

アッセルは笑みを消し、目を細める。
タクトをレイピアのように突き出す。

濁った世界の質量を込められた弾がアッセルに向かって飛ぶ。
アッセルはただ刀を垂直に構えた。

途端に閃光弾が破裂したようにアッセルの体から光が吹き出す。
そのまま刀を、地面と平行にした。

刀身に黄金にも似た光が宿る。

そして、突き出すと同時にそれは黄金の濁流となって界弾を呑み込む。

あまりの輝きに孝広は目を開けてられなくなり、
次に開いた時には空が見えた。

(何?)

一歩遅れて、自分が地面に倒されていると気付いた。

「白葉、お前の負けだ」

起き上ってみると、アッセルが面倒臭そうに頭を掻いていた。

「お前はいつたい何者だ？」

心の底からの疑問を彼にぶつける。

彼はニイツと笑い、

「さあ、言うなれば異世界人かな」

なんだそれはと孝広はため息を吐いた。

それと共に、今更ながら彼は自身の弱さを悔やんだ。

(何が人災警官隊長だ。切り札を一つ封じられただけで、こんなにあっけなく負けるとは)

「さて、じゃあ俺はみんなに話させてもらっぞ」

アッセルは倒れたままの孝広を放って、屋敷へ向かい始めた。

「待て」

無視されるかと思っただが、意外なことにアッセルは止まった。

「これから正裁の天秤はどうするんだ？」

もしも協力することになるなら、それは知っておくべきだった。アッセルは少し考えるような素振りを見せたが、笑うと、「京都で魔術師協会が行動を起こすらしい。俺たちはそのサポートをする」

「魔術師協会が？」

「魔術師協会は軍の傀儡みたいなもんだからな。貴族に対抗するには軍に貸を作っておくのがいい。」

あいつらは自分の分野である外交に入り込まれたのが気に食わないらしいからな、好意的に受け入れられたよ」

アッセルの言葉に、それで解決できるのかと疑問を持った孝広は、疑わしそうな視線を向ける。

「ふ、心配するな。ちゃんと考えてある」

アッセルはそう言い、

「だから、お前も戦えよ」

それだけ言い、彼は屋敷に向かって歩いて行った。

断章2 正裁の天秤（後書き）

今から読み直すと修正したくなります。

少なくとも2月までは大丈夫ですけどね。

それではよいお年を。

1 寝台特急（前書き）

この小説はフィクションです。

釣り、なのだろうか？

ようやく追加いたしました。いつもより少なめですがご容赦を。

1 寝台特急

????+?????

京都へは寝台特急を使って向かうことになった。

最も早い上に、資金に拘らなければ快適な旅を送れるためである。

一応日本最強の魔術師の一人であるホムラは仕事をしなくても暮らせる経済力を持っていたりする。

加えてこの旅自体軍の仕事なのでホムラは軍宛てで領収書を貰っている。ちなみにその他のメンツはその様子を見て見ぬふりをしていた。

二段ベッドが二つ備えられたプライベートを確保した寝台車の一室。男女別にしようとシンラが頑なに主張したため、ホムラは別室で一人寂しくいるはずである。

しかし、男女別のはずなのだが……。

「……どうしてこうなった？」

呟いたシンラに両腕を巻きつけるようにサクラが抱き付いていた。彼女は上機嫌なようで、今にも鼻歌を歌いかねないほど幸せそうな顔をしていた。

「精霊は、物理法則に従えないんですよ。だからこうして、抱き付いてないとわたし電車で移動できないですから」

すりすり顔と腕を腕に擦り付けるサクラは小動物っぽく、はたで見ている銀は正直可愛いと思いつながらその様子を見ていた。

そんな銀の精霊である猫の姿をした《アルテミス》は彼の肩に爪を立ててしがみついている。おそらくホムラの精霊の《天照》も似たような格好で彼女の体を攫んでいるのだろう。

「……主よ。あなたは僕の自制心をどこまで試すのですか？」

精霊とはいってもサクラの外見は美少女そのもの。腕に感じる柔らかさや、仄かに香る甘さなどは少年には刺激的過ぎた。

「気持ち分かるが、壊れるなよ」

気の毒そうな表情で銀は祈り始めたシンラを窺^{たしな}める。

「……悪いけど少し寝るから」

シンラは一言断りを入れ、サクラを引っ張るように連れながらベツドに座り込んだ。

「ああ、頑張れよ」

この状況では別の意味と捉えられそうな銀の言葉だったが、シンラはその意を正確に汲んだのか、軽く空いた手を上げてカーテンを閉めた。

『あなたはどうするの？銀？』

眠たそうに欠伸をしながら《アルテミス》は尋ねる。

「俺はまだ眠たくないし、食堂車で何か飲んで暇を潰すさ」

彼はそう返し、部屋のスライド式の扉を開いた。

「……」

出る前にシンラとサクラが入ったベッドを一瞥し、彼は部屋を出た。

別車両に移ろうとした時、「ちょ、サクラ！腕を噛むな！！」という叫びが聞こえた気がしたが、銀も《アルテミス》も気にせず食堂車を目指したという。

?????x?????

ジャスティスバランス

正裁の天秤のメンバーたる青年・藤原真左人は食堂車で目を点にしていた。

「はむはむ。……あ、瑞樹さん。そっちのチョコパフェも一口くだ

さい」

「いいわよ。代わりにそっちの抹茶パフェを貰うからね」

「二人だけずるいです。わたしにもください。メロンパフェあ

げますから」

六人掛けの食堂のテーブルの一つ、眞左人の正面でその光景は展開されていた。

三人の美少女がパフェをあ〜んし合っているのだ。

眞左人は知る由もないが精霊少女たるサクラとシンラ・ミトセの絡みも目の毒だったが、こっちもかなりの猛毒だった。

ぶすーっとしながらコーヒを味わう眞左人の隣に窓を眺める男がいた。

片目でその青年を眞左人は見る。

茶色の外套を脱ぎ、ひどく細身の黒い長袖とジーンズを身に着けた彼はアッセル・リーヒニスト。

眞左人たち正裁の天秤のリーダーたる青年で、自己申告によると異世界人だという。

アッセルは意外にも甘党らしく、ココアと持参したイチゴの練乳漬けという自作料理を食べていた。

「胸やけそうなメニューですね」

少し皮肉を混ぜた言葉にアッセルは微笑んで、

「どうも最近糖分が足りない気がしてな」

と返し、ココアを飲み干して笑う。

「ところで、みんなこれからのどうするのか、わかってるな？」

口調を鋭く、表情も引き締めたアッセルは左前から順に顔を見ていく。

彼の正面でチョコパフェを食べるポニーテールに結った稲妻のように青白い髪と、アメジストの瞳を持った少女は橋口瑞樹。

彼女は眞左人が元々所属していた組織である人災警官隊テロル・キーパーズの一員だった。

その隣で抹茶パフェを前に置いた少女はリーナ・リーネ。ルナタワの事件の際、アッセルに救われた旧欧州人の少女だ。今は赤いコートと黒のスカートでお洒落をしている彼女は短い間に瑞樹と親交を深めたらしい。

最後の少女はリーナと同様ルナタワーの住人だったアイナ・レフエルト。日本人と旧欧州人のハーフで、銀のショートストリートヘアと黒と灰色のオッドアイを持つ少女だった。

「これから俺たちは魔術の抗争の中に進むわけだからな、緊張感を持ってと言わないが、それを意識してくれよ」

「意識と言われてもどうすればいいの？」

瑞樹は不満げにパフェのスプーンを振り回した。

「とりあえずは……」

アッセルは自分の背後に目をやり、その青年を見ていた。

「目立たないようにしろ」

ぼそりと呟きココアを口に含んだ。

「何ですかそれは……」

三人は呆れたように目を細めながらも、彼の言う通り息を殺しながらも、食事を進めるのだった。

御子柴銀は食堂車に入った途端に魔術師の集団を見つけていた。

集団といっても、魔術師は見たところ二人だけのようだった。

一人は青白い髪的女性で、彼女からは溢れんばかりの魔力を感じた。

もう一人は黒髪の青年で、その髪のに引つ張るように掴む妖精のような小人が彼の目に映った。

（まあ、でも珍しくもないか。魔術師は日本の人口の三割強。公共交通機関に乗ればすぐ見つかるし）

銀はなるべくその集団と顔を合わせないようにゆっくりと、しかし迅速に一番端のテーブルに着き、コーヒーをオーダーした。

彼も多少名の知られた魔術師である。それ故の危険もあるのだ。

身内である魔術師に襲われる危険だ。

それには二つの理由がある。

一つ所謂腕試しの為に、銀は時たま厄介ごとに巻き込まれること

もあつた。

とにかく、認識の無い魔術師には関わらないのが吉だった。

彼は手持ちの携帯を取り出し、メールを開いた。

そのメールは陰陽師に関する報告だった。

運ばれてきたコーヒーを受け取りながらも、彼の瞳はメールの文章を追う。

『陰陽師とは日本古来から存在する者たちですう。その役目はあ、主にい占いとか暦読みとかだそーでーす』

絵文字がふんだんに使われたそのメールをどこか微笑ましそうに彼は読み進めていった。

『最もそれはあ表向きの話であつてえ、裏では今日の都の繁栄のため治水工事や、土木建築を指揮していたようですう。というのもあ、陰陽師は風水学にも通じる点があつたらしいですう』

京都や奈良の都は、風水的に良いとされる配置をなされていた。

古来の人々はより深く迷信や伝説、呪術を信仰していた。まるで今の科学のように。

『風水だけでなく、陰陽師は地理的な観点や伝承などに伝わる現象を起こしたと言われています。これは式神の力を用いた精霊魔術と解釈されてますがあ、彼らはそうだと認めていません』

どのような現象を起こすにしろ、それにはエネルギーが必要になる。人が体を動かすにも、空気が動くにも何かしらのエネルギーの働きがあつてこそ、現象は発生する。

魔術という現象は精霊がもたらす魔力というエネルギーが引き起こすものだ。

(なら、もし陰陽師が不可思議な現象を起こすことができるとした場合は一体何のエネルギーを使っているのか……)

思考をまとめながら、銀はさらにメールを読み進める。

『今回の騒乱の原因は日本の首都についてだそうですう。風水的に首都東京は素晴らしい条件であるようですが、それもあと数年で変化するそうです。それで陰陽師や京都出身の貴族は京都に首都

を移せと要求しているそうですね

でもお、日本政府はそれを聞き入れようとしてないらしいですね
『それもそうかなと銀は納得していた。』

日本政府の中枢を掌握するのは科学派の貴族たちである。風水などという非科学的な問題を気にはしないのだろう。

『それで陰陽師たちは、「それならいつそ我々が日本を支配する！」とか言ってる反乱を計画中のことですね』

(極端すぎるわ……)

銀は飲み干したコーヒークップを置き、最後の文章に目を通す。

『追伸(ですう)。今度、お買い物に付き合ってくださいね。お姉さま』

彼はフツと空気が緩んだような笑みを浮かべ、返信を打った。

『お姉ちゃんに任せなさい。歩あゆみに似合うような服を見つけたから楽しみにしててね』

携帯をポケットにしまい、ふと先程の魔術師たちの席を見ると、そこにはもう誰も座っていないかった。

銀は特に気にした様子もなく、勘定を済ませて自分のベッドへと歩き始めた。

????????

銀が食堂車へ向かってから五分ほどで、サクラは寝てしまった。

煩惱との戦いのプロたるシンラは、精霊に睡眠は必要か否かという疑問を真剣に考えた結果、三十分で眠気に襲われ、何事もなく夜を過ごすはずだった。

しかし、そんなことを認めるはずもない人物が一人。

肩に寝息をたてる赤い小鳥を乗せた少女。紅ホムラ、その人である。

「ふふふ。旅の一夜というおいしいイベントをこのあたしんが見逃すはずないのよ」

先日のサクラとシンラのキス以来、片時も離れようとしないうらに（といっても契約精霊なので仕方が無いはずなのだが）、耐え難い嫉妬心に身を焦がしていた彼女はなんとしてもこの機会にシンラを振り向かせたいのだ。

（旅は人を開放的にする。つまり、今シンラ君に迫ればごちそう様できるかもしれないわー！）

じゅるつと滴る唾液を吹きながら彼女は、シンラが眠るベッドへ蛇のようににゆるつと潜り込んだ。

そこはいつもと同じように温かく、心休まるような空間だった。ゆっくりと彼女はシンラの枕まで這い進む。

「……」

そこでは横になった彼が、静かに眠っていた。

安らかなその顔を見ているとホムラは何だか自分が急に恥ずかく感じられた。

計画を変更し、彼女はこのまま寝顔を眺めることにした。

（……シンラ君。ちよつと生き急いでるようで、あたしんを支えてくれた人）

黙っているときのことを思い出してしまう。

ホムラはそれを振り払うようにシンラの肩に額を付けた。そして、その細い両手を彼の腕に絡める。

失うことを恐れているかのように、しっかりと離れないように握る。

そこからシンラの体温がじんわりと伝わる。

温かく、安心して瞳を閉ざすことのできる温度。

「極東の太陽」とも揶揄される炎の魔術師の彼女が求めた温度だった。

天秤たちの暗躍 1 (前書き)

この小説はフィクションです。

今回は前回の続きで天秤について主に説明をしております。
前回のフラグ、約一名実はおと……、は未回収です。

????????

藤原眞左人は手元の写真を見ながら、眉にしわを寄せて考えていた。

その写真にはどこかの庭園らしき場所で、夜の空のような光沢がありそうな黒髪の華奢で小柄な少女が立っている光景が写されていた。

少女は可愛いと綺麗の中間点を体現したような美人。服装は写真だけでも高級だとわかるような純白のドレスだった。年齢は十五歳程度だと推測される。

壁に背を預けるアッセルと写真を交互に凝視してから、眞左人は疑問を自称異世界人のリーダーにぶつけた。

「アッセルさん。これは何なんですか？」

食堂で、目立たないように食事を終らせた一行が解散を言い渡されたとき、眞左人と瑞樹はそれぞれアッセルの部屋の前に集合せよと命じられた。

瑞樹は女子組と別れるのに手間取っているのか遅れてしまったために、先に眞左人だけがその写真を見ていたのだ。

アッセルは面白そうに唇を歪め、

「そうだな……、探し人つてところかな」

何が楽しいのだろうか、絶えずアッセルはニヤニヤと笑っていた。探し人つて何のこと？」

眞左人が振り返るとそこには紫電を宿したような瞳があった。

「よう。遅かったな」

未だに笑みを絶やさないアッセルの言葉を不満そうにしながら聞き流し、眞左人の手元の写真をひったくるように奪い取った。

「……この娘がアツセルさんの探し人？」

「正確には俺じゃなくて、ジャステイバランサー正裁の天秤の探し人だな」

首を捻る眞左人とは対照的に、事情を把握したらしい瑞樹は興味を失ったように写真をアツセルに押し付けた。

「どついう意味なんだよ？」

瑞樹は溜息を吐き、人差し指を眞左人の鼻先に押し付けた。

「いい？どんな団体にしろ、活動するには絶対に必要なものがあるの。なんだと思う？」

ぐいぐいと押される鼻を気にしながら彼は直感的に思ったことを口に出す。

「金か？」

「ほぼ正解ね。特にこの正裁ジャステイバランサーの天秤みたいな思想組織には金持ちなパトロングについてなきやろくに活動できないことが多いの」

「ほー」

微妙に納得できないのか眞左人は気の抜けた声で返答した。

瑞樹は人災警官隊で、組織犯罪の調査を担当していた。そのため、彼女には比較的身近なことだったのだが、平隊員の眞左人には縁遠い話であった。

「例えばだ」

笑っていただけのアツセルが真剣な表情をし、窓枠に腰かけて語りだした。

「どこかに平和を訴える思想団体があったとしよう。」

そいつらは活動は人々にその思想を広めることってことになる。

そのためにはどうするか」

流れる風景を背に、組織の中核たる青年は語る。

「必要なのは、そうだな……、アドバタイジングまず広告。チラシとか、可能ならマスメディアやインターネットを使った大規模な呼びかけが効果的だな。

これにどれだけの費用が掛かるか」

チラシの紙代。配布物を付けて配るならその分の代金。マスメデ

イアの利用は多額の費用が必要であり、インターネットを使うにしても通信費などが必要だ。

そうアッセルは指折りしながら例示していく。

「活動だけでこれだけ、さらにこれに加えて働いた団員への支給、窓口設置に関する住宅費、通信費。平和の為に政治関与も必要とするなら、もつと膨らむぞ」

コクリと頷き、瑞樹が引き継ぐように口を開く。

「そこで必要になるのがパトロン。後援者よ。思想に共感した人もそうだけど、その団体の活動が自分の利益につながると見越して出資する投資家みたいな人もいるわ」

次々に想像もしなかった金銭事情を聞かされ、少し頭がパンク状態になった眞左人は結論を急ぐように「つまり？」と尋ねる。

アッセルは先程瑞樹に邪険に扱われた少女の写真を人差し指と中指で挟んで持ち、二人に見せる。

「この少女を搜索することで、ある貴族が俺たちに出資してくれているということだ。」

ちなみにこいつは橋口瑞樹の言ったタイプのどちらのパトロンでもない。俺たちを便利屋として雇っているつもり野郎だよ」

「どうしてその貴族サマはこのかわいい（ブニ）女の子を探せと？」
途中鼻を押し潰されたために詰った声になったが気にせず眞左人は続けた。

その異様な光景にアッセルは引きつった顔をして二人を見ていた。
「……………」

少し冷静になったのか、眞左人の鼻から瑞樹は手を退けて明後日の方向へ顔を逸らした。

解放された眞左人は不満そうに鼻を擦り、アッセルを見た。

「この少女は貴族様の娘なんだが、その立場が悪い」

この際二人とも無視したアッセルはこの上なく楽しそうに笑い、告げた。

「この貴族が科学推進派。だが、娘は魔術師なんだよ」

佐賀県のとある海岸線。そこにぼつりと一軒だけ建てられた古めかしい日本家屋に、人災警官隊テロル・キーパーズの隊長だった男がいた。彼の名は白葉孝広。現在は人災警官隊隊長ではなく、正義の天秤ジャスティス・バランスの窓口として活動している。

アッセルは魔術師と陰陽師の争いに介入するために京都に向かった。同時期にここで極秘の科学技術のお披露目プレゼンがあるという情報から、彼がここに派遣されたのだった。

その際、正義の天秤の長たる青年は、

『お前が正義ユスティの天秤に來た理由を確かめてきてくれ』

(俺がこの組織にいるのは、……核兵器、ニュークリアの情報を知るため。だとすると、ここで行われることは……)

辺りを見渡す。

その家屋には彼の他にも十数人の人物が集められていた。

その幾人かに、彼は見覚えがあった。

とある大手の兵器開発会社の代表。電力会社の社長。そして、

(……陸軍大佐、波佐間修平)

モミアゲと繋がった髭が獅子の鬣のような大男。軍の兵器開発課の男が私服でそこに存在した。

(アッセルの言った通り、ここでニュークリアの軍事的開発を行っているのか?)

だが、それにしても他の面子がどうしているのかが納得できない。軍事使用のニュークリアに、なぜ電力会社の社長が来たのか。

疑問は尽きないまま、案内役らしき白衣の男性が障子の奥から出てきた。

「どつぞこちらへ」

言葉短く男はその奥を指し示す。そこには返された畳と、その奥に地下へと続く階段があった。

あたかもその先が異界であるかのように、材質がコンクリートに

変わった階段だった

階段を下りた先には筒状のエレベーターがあった。

白衣の男性に従って、一行はそれに乗り込みさらに下を目指す。数秒の後、薄明るいエレベーターの中が突如青い光で満たされた。ガラス張りのエレベーターから見えたのは、幻想的ともいえる青く輝く揺れるカーテンのような天井だった。

それは海中から見た海面の姿だ。視点を下に移すと海藻が揺れ、魚たちが自由に飛ぶ、人が干渉できない世界が広がっている。

しかし、その中に不似合な建造物があった。

およそ一〇キロメートルほど離れた海底に、ドーム状の仄かに緑に発光するそれはあった。

「海底都市ポセイドンです」

息を呑む孝広たちに、白衣の男は解説する。

「正確には実験都市でして、様々な研究開発を続けております。本日皆様にご披露する研究は……」

男は勿体付けるように一度間を空けてそれぞれの顔を見渡す。

「核エネルギーを用いた発電技術であります」

孝広は佐賀へ旅立つため、空港にいた。

そこは秋の大型連休間近ということもあってか、大変混雑していた。

しかし、その中にも彼を歩く青年は一際浮いていた。

「孝広。アンタに教えておきたいことがある」

見た目は特に変わったところはないのだが、不自然に落ち着いた雰囲気と余裕に満ちた態度がどことなく不気味なアッセルは言いながら孝広にベンチを勧める。

一瞥し、孝広は無言で首を横に振る。

見ると小学生ほどの子供がその周囲を走り回っていた。アッセルは肩を竦め、そのまま歩き続けた。

「改まってどうしたんだ？」

孝広は半眼でアッセルを睨みつける。まさかこれから行くところは危険だと今更言うつもりでもあるまい。

「いや、俺たちのグループについて話しておきたかっただけだ。そう警戒するなよ」

そんなつもりもなかったのだが、敢えて否定はせずに、「それで？」と先を催促する。

「俺たちは簡単に言っただけで折衷を目指すグループだ。難しい理念や、規則はない」

盗聴を警戒しているのか、アッセルは魔術や科学技術などの言葉は使わずに説明する。

「折衷といっても、それが簡単ならグループは生まれなかったはずだろう？」

歴史の表だけを見ても、三つほど彼らと同じ思想の元で活動した者たちもいた。裏の数を含めればどれだけ膨らむものか分かったものではない。

アッセルもそれに同意したのか頷く。

「だが、やらなければならぬ。そうやって欲しいと思った男がいた」

遠くを見るため、天井を見上げるアッセル。その顔には少しの悲哀が滲んでいた。

しかしそれはすぐに消え、彼は落ち着いた様子で次の言葉を紡ぐ。「そいつが、天秤を作った。二つの技術のバランスをとって、正しい世界を築き上げるために、な。」

それが正義組織の天秤の由来だ」

「それがお前なのか？」

「いや、違う」

少し驚いたように孝広は目を開いた。リーダーをやっているのだから、彼の話だとばかり思っていたのだ。

「そいつは病気だった。今の医療技術では救えない、な。だから、

そいつはこう思ったんだ。『魔術ならこの体を治せるかもしれない』と」

孝広は少し目を伏せて、その創設者の心中を察した。

おそらく、可能性には全て掛けたのだろう。名医を求めてコンタクトを取ったり、新薬が開発されれば真っ先に飛びついたりといった風に。

だがそれらは全て効果を出さなかった。それで、魔術という全く違う技術を求めたのだろう。

「結果から言うとそれは駄目だった。魔術でできるのはせいぜいどこが悪いのかを調べることだけだからな。根本的に治すことは不可能だ」

よくあるファンタジーのように体の傷や病を治癒する魔法はこの世界にはないのだ。

魔術は異能ではあっても、万能ではない。

「だが、どこが悪いのかは分かった。それによって治療法も確立された。今では、あいつの病は治るものだ」

二つの技術が意図せずに協力し、より良いものができた。それは、正裁の天秤が目指したものの先達であった。

「だが、あいつの病はもうその時にはもう手遅れだった」

なんと報われないことだろう。しかし、それを語る青年の表情は特に暗いものはなかった。

孝広は話よりも彼の表情や態度が気になった。

アッセルのそれは、日常会話をするものとほとんど変わりなかった。

さっきの悲哀が嘘のように、彼は平静そのものだった。

「そいつと俺が出会ったのはその時期だ。もう死を迎えることしかできなかつた彼は、最後に願った。『自分のようなことが二度と起きないように』と。それを聞いたそいつの友人たちがこの組織の原型を作った」

孝広は話が落ち着いたと見て、疑問を口に出す。

「それを話して俺にどうして欲しい？」

そこで始めて、アッセルは笑った。
理解がいい。

その顔は言外に語った。

「別にどうにも。これはただの昔話だ。重要なのはここからだ。

俺はその組織にリーダーとして加わって欲しいと頼まれたわけだが、
その際二つ条件を出した」

彼は親指と人差し指を立てた妙な指の形で二を表した。

「一つはこの組織の目的を二つの技術の折衷を目指すとともに、過
剰な技術研究には断固として対抗させることだ。

もつと簡単に言ってやる。暴力を使ったとしても、止めるべきも
のは止める」

暴力とはすなわち戦うということであった。

だからこそ、思想組織の正裁の天秤に孝広たち人災警官隊が加え
られたのだ。

生存と引き換えにして。

暴力を使ってまでも自身の主張を押し通す集団を、人はテロリス
トと呼ぶ。

つまり、その時正裁の天秤は思想団体から、テロリストにカテゴライズ分別さ
れる組織になる。

「もちろん、あくまでも過剰な研究。……そうだな。人体実験とか
だな。そんなものがあれば実力行使で潰す」

「穏やかじゃないな。後盗聴の心配はもうしなくていいのか？」

「問題ないさ」

短く告げる。

孝広もそれ以上追及しなかった。

おそらくこの異世界人を名乗る魔術師はそれぐらいの対策は既に
済ませているのだろう。

ならば心配するだけ無意味だ。

アッセルは親指を折って、指の数を減らす。

「もう一つは……」

驚きと疑惑を含んだ視線を孝広は向ける。

彼は知らずに息を呑んでいた。

より一層目を鋭く細めるアッセル。冗談のような気配など欠片もない。抜身の刀のような威圧感が絶えず放出されている。

「……それは、無責任ってものだろうが」

止めていた息を吐き出すように、孝広は怒りを露わにする。

ふざけている。

今アッセルが語った二つ目の条件はそもそも前提に矛盾するものだった。

致命的とも言ってもいい。地雷を処理するためにその地域一帯を爆撃するといったような根本からずれた欠陥。

「気に入らないなら自分で思考し、行動することだ」

アッセルは笑う。

どこまでも楽しそうに、どこまでも虚しそうに、その男は笑う。

「それよりも白葉孝広」

仕切り直すように彼はその名を呼んだ。

「お前にはこれから行く場所が武力制圧が必要かどうかを見てきてくれ」

「……一つ目の条件ってやつか」

「ああ。あそこは情報だけ聞いてるが、ヤバそうだ。お前を行かせるのはその辺の知識も十分で、なおかつ次回攻める時のことも考えてくれそうだからだ」

人災警官隊の隊長を務めていただけあって、孝広の武器や戦闘で必要な情報収集能力は高い。そのことをアッセルは当然のように見抜いていた。

「そのことはまた後で話し合わせてもらおうぞ。」

俺たちは創設当初のメンバーじゃないからな」

それは暗に二つ目の点について、しばらくは問わないということ伝えていた。

「とにかく頼む。もう伝えたように俺は京都でちょっと魔術師の争いに顔を出してくる。」

理解したのか、していないのか、アッセルは事務的にそう言い放つ。

そのまま、孝広の返事を聞くこともなく、彼は背を向け去って行った。

(アッセル・リーヒニスト。あいつは信用できない)

ドームへと続く長い一本の道。それはアーチ状の形をしていて、光景だけ見れば水族館の水中トンネルの中のようなだった。

動く床による自動移動の道の進む中で、彼はアッセルの言葉を思いついて出した。

『暴力を使ったとしても、止めるべきものは止める』

それは決意表明に似ていた。覚悟に満ちたそれはどこか頼もしく思えるが、果たして認めていいものだろうか。

いや、だからこそ見極めなければならない。

アッセルを、正裁の天秤を、世界を、この研究施設を。

ドームの前に彼らは辿り着いた。

白衣の男が扉らしき隔壁に近づいた。そこにはセキュリティ用の暗証番号入力装置と指紋認証装置が見えた。

男はそれの入力と認証を終えると、前かがみになって何かに顔を寄せていた。

どうやら角膜の紋まで調べられるらしい。

確認が済んだのか、男が少し隔壁から離れた。何気なく孝広は男の足を見た。ただ単に左足を後ろに引いているだけだった。

ずいぶん嚴重なことだと嘆息しながら、孝広はそのドームへ足を踏み入れた。

2 前線基地（前書き）

この小説はフィクションです。

今回はいろんな人の視点で話が進みます。
そろそろ物語の核が見えてくるかと。

まだまだ銀さんの話は遠い。

2 前線基地

? x ? x ?

シンラたち一行は無事に古都京都へ到着した。

観光地ということと賑わっている京都の中で浮かないように彼らはそれぞれお洒落^{変装}していた。

シンラは年も相まって学生に変装している。折り目正しく学ランを着ている。

着慣れていないためか襟元を気にしている彼の手には野球のバットをしまうような黒皮の細長いケースがあった。その中にあるのは彼の魔法出力器である可動杖《如意》である。最小サイズのメートル程度で納められている。

その隣のジーンズに白いブラウスの上にデニム素材のジャケットを羽織っている少女。

「来たわよー！京都！」

無駄に勢いよく拳を上げるのがホムラだ。

彼女は肩に引つ提げる形で布で包めた『日暮れの雨』を携帯している。

「修学旅行みたいなノリは止めてくださいよ。俺たちは何しに来たんですか？」

傍から見ると修学旅行に来たとしか見えないシンラが溜息を吐くと、半眼になってホムラは睨み付ける。

「あのね、シンラ君。あたしんたちは一体何のために呼ばれたのかちゃんと理解しているの？」

「何のためって、単純な戦力じゃないんですか？」

言った途端にホムラは小馬鹿にしたような笑みを浮かべた。

「ふっふっふ。甘いわシンラ君。チョコレートを塗りたくって蜂蜜掛けて、アンコでコーティングしたマシュマロみたいに、うえっぶっ」

「自分で言って自分で想像して胸焼けしないでください師匠」

口元を抑えて蹲るホムラ。今更ながら何でこの人日本最強の魔術師の一人なんだよなシンラは本気で頭を抱える。

しばらくして復活したホムラは勢いよく立ち上がり無意味に胸を張った。

「あたしんたちは所謂あれよ。抑止力と軍がどれだけ本気かを見せるための演出なの」

シンラがあまりにも無反応だったためか、照れたようにホムラは頬を朱に染めていた。

どうも軍は穩便にことを済ませたらしい。自分たちが本気で陰陽師たちと相対していることを印象付けるために四聖獣の名を冠したホムラを呼び寄せたという。

「魔術師と違って陰陽師は数が圧倒的に少ないそうよ。それに、術を使うためにはそのための場を用意する必要があるんだって。あらかじめ魔力を得た魔術師に敵うはずがないの」

「ようは痛い目を見たくないならおとなしくしているってことですか」

そういうこととホムラは首のあたりをマッサージしながら肯定した。

「でも、いざとなったら戦うんですよね？」

シンラはいつの間にか笑っていた。

彼の眼は戦いを望む眼だ。ホムラは赤い瞳を細めそれを見た。四年前の初陣での彼女と同じその瞳を。

「倒す必要はないよ。シンラ君は自分の身の安全だけを考えてね」
「はい」

顔に影を落として彼はそう答えた。

(絶対にそうしないわね)

ホムラはそう断定した。しかし、どうすればいいのかわからないまま時間だけが過ぎていった。

そうするうちにもう一人の男が立ち上がった。

「皆。どうやらお迎えが来たようだ」

指さす銀は黒いスラックスに黒のノースリブの上着の下にホムラと同じようなカッターシャツを着ている。しっかりとした体つきの銀のイメージにはそぐわないカジュアルな格好だった。

一人一人の変装は悪くはない。しかし、三人が揃うと何しに来たのか分からないような妙な集団だった。

ちなみにサクラは服装を変えることもできないし、何より一般人には見えないので常の通り桜色の丈の短い和服である。

銀の指差す先、黒いワゴン車からサングラスを掛け、スーツを着た男が近づいてきた。

男は無言で車内を指し示す。

「無愛想な案内役ね……」

そんなホムラの感想はともかく、それに従って彼らはワゴン車へと向かう。

もはや空気と言って差し支えないサクラはシンラにしがみ付きながら、シンラはそのサクラを引きずるように、銀は頭を一度ぶつけながら、ホムラは何の障害もなく、それぞれが乗り込んだ。

ワゴン車はその後部座席と運転席が完全に切り離された非一般的な構造になっていた。まるで囚人を運ぶために作られたようでもある。

また、後部座席は二列あったのだが、前の列は後ろの列と向かい合うように既に向きを変えられていた。それを見てホムラは電車にある向かい合った席を思い出していた。

「ちよつと狭くないですか？」

ゆっくりと車に乗り込むシンラはちよつと顔を顰めながら呟く。

「確かに。移動用ならもう少し広くてもいい気がするな」

頷きながら銀も乗車する。

「ああ、軍つてのは資金不足なんだろうな。あと五、六メートルほど長くないと乗用には向かないだろう」

「全く同意だ、シンラ。俺なんてデカイ分、余計にしんどいだろうが」

二人の表情は真剣そのものだった。

それ故に、もう一人の同行者のひき様は尋常ではなかった。

「……えっ!？」

改めて驚愕のリアクションを取ったホムラに、一同は視線を集める。

「師匠? 何ぼんやりしてるんですか?」

「え!?!……あのお、二人とも、その話って本気で言ってるのかな?」

そんなわけないよね、ないよねと呪詛のように内心で繰り返すホムラ。

「師匠? 俺たちの会話がどうしたんですか?」

「なんか妙なことがありましたか? 紅さん?」

お二人とも大真面目でした! !とムンクのシャウトのように悶えるホムラはだらりと腕を伸ばし脱力する。

彼女たちが乗るこのワゴン車は一般で使用されているのと同じサイズである。

常識的に考えてここが狭いわげがない。つまり彼らの常識が一般と違うだけなのだ。

「もしかして、お二人は、ものすごいお金持ちの家の出身だったりするのかな?」

一瞬、空気が死んだように沈黙が車内を支配した。

それを見計らったように車が動き出す。

あまりにも静かなエンジン音だったが、今の彼らには十分なきっかけだったらしい。

合わせたように二人は高速で首を振る。

「なな、何言ってるんですか！し、師匠！？僕は普通の普通の人間ですよ？」

口調がおかしい上に普段は使わない僕という一人称を使うシンラは、隣に座り汗をだらだらと流す銀から見ても怪し過ぎた。そんなことを思う銀もホムラから見れば同様に怪しいのだが、そんなことにも気付かないほど動揺しているらしい。

本来ならホムラとしても気にすることではないのだが、あからさまに誤魔化されると逆に気になるというのが人の性だろう。

「そういえばシンラ君のお家の話、聞いたことないよね。どんなところなの？」

シンラにそれを聞いてしまった。

(意外にあたしんもシンラ君のこと知らないしね)

そんな好奇心も加わって、さらにホムラはシンラに詰め寄る。

焦るシンラに嗜虐的な笑みを浮かべるホムラ。

「べ、別に普通の家だったと思いますよ？」

「ホントに？ホントに？」

密かにホツとしている銀を脇目に留めつつも、どうやって切り抜けるべきかとシンラは頭をフル回転させる。

「だから、ちよつと僕の家の方が大きかっただけで、そんなことぐらいで人をお金持ちの出身だなんて思わないでくださいよ」

しかし、先程の彼らの言葉はリムジンなど的高级車のことを指していたのだろう。そして一般人はリムジンを乗用車に持っていることは皆無に近い。

さらに追及しようとするホムラが口を開いた時だった。

「やめてください！！ホムラさん！！」

甲高い声が響いた。それはシンラの隣から放たれた声だった。

全員の視線がサクラに集まる。

彼女はぎゅっとシンラの腕に抱き付き、ホムラを鋭く睨む。

「シンラさんがどんな家の人かなんてどうでもいいじゃないですか！なのにどうしてそんなに問い詰めるんですか？」

薄い桜色の瞳には燃えるような感情が宿っていた。

対するホムラはどうしていいのか分からず視線を宙に迷わせた。もちろんホムラは本気で問題に思っていたわけではない。ただ、シンラの事を意外と自分は知らないのではないかと気づき、少し不安になっただけなのだ。

シンラが本当に拒絶すれば、彼女だってそれ以上は尋ねなかつたはずだ。

ただサクラにしてみれば、自分のパートナーが追い詰められるように感じてしまったのだ。

ここは素直に謝った方がいいわねとホムラは思考を変え、銀とシンラに向かって「ごめんなさい」と頭を下げた。

シンラと銀は顔を見合わせ、それに合わせるように笑う。

「自分が本当にこういうことを言う資格があるのかはわかりませんが、大丈夫ですよ紅さん」

「気にしてませんよ。師匠。サクラもありがとう。でも、そんなに怒ることじゃないよ」

サクラを宥めるようにシンラは彼女頭を掌で優しくなでる。

目を細めてそれを堪能したサクラは目を細めながら「はいッ」勢いよく首を縦に振る。

かすかに香る彼女の名と同じ花の匂いを感じながら、シンラはサクラについて考えていた。

（もう少し人のコミュニケーションってものを教えないといけないのかな？）

今のやり取りはホムラにしてみれば悪ふざけで、シンラを傷付ける意思などあるはずもなかった。

人との会話という点で、サクラは見た目以上に幼く、経験不足なのが露呈した。

（サクラも見た目は人間でも中身は精霊なわけだし、何かある度にこんな些細な衝突をしてたらきりがないよな）

自分の魔術の訓練もしたいところに、思わぬ障害が浮上してきた

ことにシンラは眉間をほぐしながら悩んでいた。

ビルも立ち並ぶ京都の街並みを進むこと十分。

ワゴン車はとあるビルの地下駐車場に入った。

薄いオレンジ色のライトが彼らを照らし出していた。

『ホムラ、貴女ここがどこかわかる？』

旅路ではずっと黙っていた《天照》が首を左右に忙しなく振る。

「あー、多分魔術協会のなんかでしょう？あたしんもよく知らないけど」

落ち着きのない小鳥の動きをうっとおしそうにしながらホムラは眠たげに眼を擦った。

思ったよりもこの座席の座り心地が良かったのかもしれない。

『《天照》さんに、サクラ。何だか少し妙な感じがしない？』

銀の膝に寝ころぶ《アルテミス》がぴくぴくと髭を動かしながら二人の精霊に尋ねる。

「どうしたんだ？いったい何があるんだ？」

『分からないです。何だか胸を圧迫されるような……。これは不安、恐怖といった感情なのでしょう？』

怯えたような表情で固まる猫を銀は優しく撫でる。それを見ながら赤い鳥は、

『妙な気配はするわね。でも、それは大分前からしてたわ。確か、あの列車に乗っていたころだったかしら？』

まだ冴えない頭を揺らされながら、ホムラは思考する。

（魔力を生産する精霊を感じる不安？何よそれ？）

生物にとって不安や恐怖とは何か。最も原始的な恐怖とは即ち、（死の恐怖？この世界では不老の存在の精霊がそんなものを感じるの？）

駄目ね、と彼女は首を振る。まだ寝ぼけているためか、その思考は少し脈絡に欠けていた。

「私もちよつと……」

サクラが遅れて反応した。

怯えるように隣のシンラの腕をさらに固く握る。というよりも絡みつくようであった。

その豊富な胸がシンラの上腕を夢のような感触で埋め尽くす。脳内の自制心を総動員し、彼は意識を外に逸らそうとしているが、鼻の下が伸びているのは隠せなかった。

そんなものが目に入ったのだから、寝ぼけていたホムラが覚醒するのも当然といえたかもしれない。

彼女もまたぎりぎり歯を鳴らし、拳に力を込め、シンラに抱き付くサクラを羨み、席を替わりたいという気持ちを必死自制しようとしているのだった。

（落ち着け！あたしん！あの娘も精霊だから、《天照》のように不安を抱えているだけなんだから仕方ないわ！

あの娘は精霊だから仕方ない。あの娘は精霊だから仕方ない。あの娘は……）

呪詛のようにひたすら繰り返し自らにホムラは言い聞かす。

しかし、そんな彼女の努力を否定するかのように次の言葉は紡ぎだされた。

「私、暗いところが怖くてだめなんです……」

ただの暗所恐怖症だというカミングアウトの元、ホムラの頭の中の導火線に火が点いた。

「そんなに暗いのが嫌なら……あたしんが何もかも照らし出してやるわよおっ……」

ホムラの魔力が赤い煌きを帯びる。

いち早くシンラが彼女に飛びつき羽交い絞めにする。

「師匠……！それ、車内で使う魔術じゃないでしょうが……」

しかしホムラは逆に顔を真っ赤にして、彼の脇に引っ付くサクラ

をギリリと輝く赤い色の瞳で睨む。

「明るくして欲しいんですけど？じゃあここを太陽並みに明るくしてあげるわよ！！！」

「そんなことをしてどうするんですか！？俺たち燃える尽きるじゃないですか！」

「シンラ君とならむしろ本望よ！！！」

「さすがにそれは受け入れ難いですよっ！」

バタバタと暴れるホムラ。

シンラはつらそうに歯噛みしながら腕の力を強くする。

腕っ節が弱いわけではないシンラだったが、本気で暴れる彼女を抑えることは難しい。小柄ながら彼女は魔術を日本刀型の魔法出力器を使う魔術師。腕力など筋力は男性にも劣らないものだった。

「シンラ君！！どうして邪魔するのよっ！？？」

「俺たちにも被害があるからです！！それと魔術師が精霊を攻撃するのは御法度ですよ！！！」

「そんな法律はこのあたしんがぶち殺してあげるわ！！！」

「くだらないこと言わないでください」

そうこうしている内に車は止まり、そのスライド式の扉が開かれた。

「到着です」

無愛想な男は社内の混沌とした絡み合いを見ても平然とした顔でそう言った。

ただし、眼光が絶対零度の冷たさを感じさせた。

『何やってんだクソ野郎！車内であればねーぞゴラルウアア！』

男の瞳は言外にそう語っていた。

「……………」

ホムラもシンラも流石に反省して大人しくワゴン車から降りて行った。

地下駐車場からエレベーターが設置されたホールに向かう一同。ホールにはガラスの自動ドアがあった。しかし、その前に道を塞ぐように男が立っていた。

茶色の外套を纏い、その片手には黒い鞘に納められた日本刀がある。

黒髪黒目で、見た目は二十代半ばほどの青年はにこやかな笑みを浮かべた。

「ようこそ皆さん。歓迎しますよ。」

紅御一行様」

シンラは綺麗に一礼し、ホムラはフンツと鼻を鳴らし、銀は頭を掻いて無理やり笑みを浮かべた。

その反応を見て、青年は一礼し刀を腰に帯刀した。

「初めまして。私はここからの案内を務めさせていただく者です」
そうしてまた人の良さそうな笑みを青年は浮かべた。

「……」

「……」

「……」

沈黙がしばらく続き、耐えかねたようにシンラが口を開く。

「あの、お名前は？」

「聞く必要はないわよ」

青年が答える前にホムラは面倒臭そうに口を開いた。

「はい？」

「この人、裏方の人だわ」

ホムラの鋭い眼光が青年を貫く。かすかな憎悪を込めた視線に、青年は肩を竦めるだけで受け流した。

シンラはその様子に違和感を覚え、ホムラの後ろ姿を見る。

「裏方とはなんです？」

車外に出てようやくシンラから離れたサクラが首を傾げた。その彼女はさらに青年から離れた場所で様子を窺っていた。

「正規の軍人じゃない協力組織の人間の事をそう呼ぶんだよ。表立ってできないこともするから裏方ってあだ名されるそうだよ」

最後尾にいた銀が敢えてシンラにも聞こえるような声で説明した。なるほどとシンラはこっさり頷いた。

サクラはほへと分かったのかそうでないのか分からない反応をしていた。

「もし不便と思われるなら、私の事は六月とでもお呼びください。漢数字の六に年月の月で六月と表記します」

六月は恭しく頭を下げる。どこか他人の事であるようなその態度がシンラには少し気になった。

「ではこれから私が皆さんをご案内するのですが、それにあたってお願いがあります」

しかし六月の影の無い表情を見てるとそれが何だったのか分からないまま霧散してしまった。

「皆さんにはこれから識別のための魔術を施させてもらいます。これは敵と味方の区別と位置情報の把握のために必要です」

六月が説明を終えるとホールの中から二人の男が出てきた。

男たちは濃い若草色の軍服を着ていた。その手にはそれぞれ先端にマンホールほどの大きさの金属の輪が取り付けられた杖があった。(魔法出力器だ)

シンラは一目でその杖の正体を判断した。それは魔力を感じたからだ。

魔力に関する感知能力。それは魔術に関わる者全てに備わるものだ。しかし、その能力の高さには個人差がある。俗説ではあるが魔法出力器など魔術道具を製作に携わる人間(彼らの事を人は技巧者と呼ぶ)は高い魔力感知能力を持つと言われている。

シンラも自身の『如意』を自作した経歴を持つ技巧者の一人だ。その魔力感知能力は人並み以上に高い。彼はその杖に込められた魔力を感じたためにそう判断したのだ。

「これから二人ずつ魔術を掛けていくので、皆さんご協力してください」

「さいね」

それを合図に二人の男はシンラとホムラに近づいた。何をするのかと少し身構えてシンラに向かって男は杖を振り上げた。

そして、円状の輪の中にシンラが入るように杖を振り下ろした。そしてカキーンという輪の先からコンクリートの床に触れた音が響いた。

「……はい？」

その男たちの姿は大きな虫取り網を振ったようであった。もっとも、網がないので些か間抜けな格好に見えるのだが、男たちは気にした様子もなく円にシンラが触れないように黙ったまま杖を持ち上げた。

「あの、六月さん？これで終わりですか？」

感知能力をふんだんに使ってみても何も感じない。ためにシンラは「数値化」と詠唱^{スベル}魔術を唱えて自身の体を見ると、そこには不自然な数値で表された自分がいた。自分という数値に別の数値が上から書き足されている。その数値は誰かに対して特定の波動を送り続けている。

つまりこれが発信機としての機能を果たすのだろう。

耳無し芳一を彷彿とさせる姿であったがわざわざ手前で呼び止めて行うことにしてはあまりにも無変化に思えた。

あからさまに拍子抜けしたと語るシンラの表情に、六月は肩を竦めた。

「ええ。終わりです。お疲れ様でした」

「え？これだけ」

「もともとこの魔術は追跡用のもので、本来人に気付かれないよう相手の魔力を動力として起動するものなのです。実を言うならその輪っかも形だけで、不要な手順なんですよ」

「だったら何で宣言したんですか？ばれないならこっさりやっていた方が効率的でしょう？」

それにこのデバイス。本当にこの魔術を使うのに必要なんですか？」

「そうですね。貴方の仰る通りです。このデバイスも飾り程度の意味しか持ちません。本来ならこの建物に入った瞬間に勝手に掛けているのですが、皆さんのような一重要人物（VIP）ではまた異なるのです」

流暢に語る六月に疑わしそうな瞳を向ける。

「何故かと申しますと、我々の言うVIPは魔術的にも地位的にも非常に強い力をお持ちの方です」

例えばホムラ様のようにと彼女を手で指し示す。

「そんな彼らがこの魔術を探知できないはずもありません。もし、それが敵対行為だと思われてしまうと、どうなるかわかりますか？」

ニヤリと暗い笑みを浮かべる六月。

「……反撃されるかもしれませんね」

「その通りです。そうなると我々と彼らの関係を回復させることは困難でしょうね。」

そんな争いを避けるために我々はまず最初にご説明しているのですよ」

（でもそれも）

頷きながらもシンラは考えていた。

（自分たちの戦力を得るためなんです）

どのみち戦いは避けられない。そんな状況に自分たちはいるのだが、彼にそれを悲観するつもりはなかった。

（それでいい。戦いは技術を進化させる。そうして俺も目標にたどり着ける）

シンラの瞳は野望に満ち溢れていた。それを見た茶外套の青年は

酷薄な笑みを浮かべた。

そんな会話をしている内にホムラと銀の識別も終わったらしく、

二人して欠伸や背伸びをしていた。慣れた様子にシンラは少し引きつった笑みを浮かべる。

前を見てみると綺麗に真っ直ぐとした姿勢で頭を垂れた六月がエレベーターホールに掌を向けていた。

この人燕尾服とか似合いそうだなとシンラはこっそりと感想を口の中で呟いた。

「では、皆さん。ようこそ前線基地へ」

茶外套を翻し、六月は背を向けた。

その背を、

数値化を解かないまま見たシンラは、

シンラの背後を歩いていた銀は彼がふらりと倒れそうになったのを見て、すぐに手を伸ばして支えた。

「おい？シンラ？」

横から顔を覗き込むと呆然とした表情でシンラは固まっていた。

それは理解を超える事象を目撃した人のようであった。

「……なんだよ。あれ」

「いや、お前がどうしたんだよ？」

呆れたように目を細める銀の手から離れ、シンラは六月とホムラを追って歩み始めた。

銀は首を捻りそれに続こうとして、桜色に煌めくその少女の髪を目に留めた。

それはシンラの精霊であるサクラだ。

暗所恐怖症のためだろうか。サクラはかすかに震え、青ざめた表情をしていた。

彼女を心配して思わず銀は肩に手を置こうとして、止めた。

例え魔術師でも他人の精霊に干渉できない。

ただ触れて彼女を安らかにすることもできない。

「サクラ？」

銀はそう声を掛けることしかできなかった。

サクラはビクツと不自然に大きく肩を揺らして銀を見た。

その表情は恐怖。

「どうしたんだ？」

じつと彼女の瞳を見る。怯えた彼女を安心させるために背中を擦るぐらいはしたかったが、それも望めない。だから、瞳を見て話す。彼女の感情をできる限り拾うために。

「なにか、こ、怖くなったんです」

サクラは青い顔で唇を震わせながら言葉を紡ぐ。

しかし、次のその言葉は銀の予想とは違うものだった。

「なんていうんでしょう。あの六月という人、な、何か変な感じがして……」

自分の中の感情を言葉で表す。それは人間にとっても難しいことだ。それは精霊も同じなのだろうか。銀は心のどこかでそんな疑問を持った。しかし、今の銀はその疑問を思索する余裕はなかった。何故なら震えるサクラに銀ができることは彼女の言葉を待ち、聞くことだけだったからだ。

六月に関する疑問も今は浮かばない。

「とても、大きい。そんな感じが」

その時銀の背後からコツコツと人の足音が響く。

地下空間ではその乾いた音が反響し、どこか非日常的な印象を持たせる。まるで敵か何かが近づいているかのような、緊張に満ちた薄い恐怖。

だが、その想像はまるで違っていた。

「二人ともどうしたんだよ？置いていくぞ」

銀が振り返った先にはシンラがいた。

先程の立ちくらみのようなものから回復したのか、歩き方も見た目も自然体で特に心配する必要はなさそうだ。

「悪い。ちよつとサクラがな」

シンラに話すべきかどうか逡巡している間に、彼はサクラに歩み

寄り、その細い手を握った。

「サクラがどうかしたのか？」

シンラは自身の精霊から目を離し、銀を見ている。それ故に気づかない。

サクラの表情から見る見るうちに青さが抜けていくのを。

彼女は安心しきった小動物のように顔を綻ばせ、握られたその手を軽く握り返した。

「……ふっ。いや、なんでもないさ」

シンラは不審そうに銀を睨んだ後にサクラを見るが、その頃には少女の姿をした精霊はいつも通りの花が咲いたような笑顔でいた。

不思議そうに首を捻りながらも、彼は大きくして気にしていなかったのかそのままサクラの手を引いて歩き出した。

(あいつ、やっぱりすごいかもしれない)

何がサクラを元気づけたのかは知らないが、シンラがそれをしたのは確かかなようだった。

手当て、という言葉がある。

その語源は怪我や病気の人間に手を当て、労わるところからきているという。

人に触れる。それは人を思い、その感情を伝える手段なのかもしれない。

今のシンラがサクラの手を握るという行為は、サクラには伝わったのかもしれない。

シンラ本人にも気付かない、深層のサクラを思いやる彼の心が。

(それがサクラを勇気づけた。……とでも思っておくか)

実際のところは分からない。

ただ手を握られて安心したのかもしいし、もしかしたら契約者という立場で自分を必要とするシンラを見て守ってくれると安堵したのかもしれない。

もし銀がサクラに触れられればそれで解決したのかもしれない。だが銀にはそうは思えなかった。

(多分俺、……ううん。わたしには絶対できない芸当だね。

一体どんな魔法を使ったのかな?)

シンラのそれはいつたい何なのか、それは銀という青年にも、また彼女にもまだわかっていない。

本来の口調に戻った彼女は歩み始める。

(ある意味わたしの目標だよ。シンラ。わたしもそんなオーラが欲しいよ)

羨望の眼差しを送る先には、師匠と慕う少女とパートナーの精霊に両腕を占領された少年がいる。

(……両手に花は、勘弁かな)

銀という少年の姿をした少女は苦笑いしてエレベーターへと乗り込んだ一行に続いた。

その銀の肩にしがみ付く精霊、アルテミスは総毛立つ思いをしながらボタンを操作する青年を見る。

決して本人には気取られることがないように、視界の隅に置いてこの地下に来て感じていた違和感の正体は何なのか、アルテミスはこの六月と名乗る青年と出会い確信した。

それは恐怖だった。それは獯猛な肉食獣の檻に閉じ込められたような生命の危機に感じるものと同質のものだった。

何もかもの原因はこの青年だとアルテミスは結論付けた。

青年を数値化して見たシンラが立ちくらみを起こしたり、サクラが六月を大きいと感じた事さえも全てはこの青年の莫大な魔力が引き起こしたことだった。

その魔力を数値化して見た時、その数値はまさしく桁が違う。永遠と続く円周率のような何万何億と続く数字の羅列を見た時、人はそれを瞬時に把握することなどできない。それをシンラは一時的に許容量を超えた情報整理を行いかけて立ちくらみを起こした。

例えて言うならそれは明暗の順応に似ている。真つ暗な空間から

突然光を浴びれば、暗闇に慣れた目には一時的に何も見えなくなる。それと同様に、シンラは重力や体のどの位置に力を入れることと、いう無意識の計算を全て捨て、瞬間、六月の魔力の計算に入ってしまった、足元が疎かになってしまったのだ。

サクラの言う大きいとは、単純な魔力の総量の事だ。圧倒的な六月の魔力量に彼女は恐れを抱いたのだ。

魔力量が多い精霊である彼女ですらそれであったのだ。

天照やアルテミスは、その比ではない。

緊張感、畏怖、呑み込まれそうな感覚。魔力を水として例えるなら、六月を海、サクラは池ほど、そしてアルテミスたちはただの水の滴程度でしかない。

それは比較の問題だった。それほどまでに、六月の魔力量は膨大だったのだ。

アルテミスたち精霊が感じていた違和感。それもこの青年の魔力を感知した結果だった。

エレベーターが止まり、密室から出たために銀やホムラは六月から少し距離を空ける。

案内する六月が自然と距離を空けたのだ。

だが、緊張はまだ続いていた。

何も考えられない彼らは六月の正体を思考できないまま、ただ目の前の有り得ない事象に意識を奪われ続けるのだった。

その時ホテル『シー・ウエル』の五階エレベーターホールを警備する男たちがいた。

ホールの警備はエレベーター前に立つ衛兵が二人。いざという時に飛び出すためホールに最も近い部屋を三つ陣取った私服の軍人が各部屋三人ずつの計九人。

彼らは皆、日本軍魔術師団の団員である。

ビジネスマンの変装をした男、一ノ瀬は真新しくも着慣らしたスーツを身に纏い、ホールの監視に努めている私服の軍人だ。

休息がてら食事を済ませようと下へ向かう彼は廊下の出口で男女五人組とすれ違った。

瞬時に顔の特徴や髪の色などを一ノ瀬は覚えていく。

(こりゃもう癖だな)

内心苦笑いしながらも先頭の若者の姿を横目で確かめる。

年齢は二十代くらい。茶外套を身に纏い、黒い鞞の刀を持っている。髪と瞳は共に黒い。魔術師なら属性はおそらく闇。

その次を歩くのは、何やら難しそうな表情のまま後ろの少女の手を引く少年。学ランを着たこの少年も黒髪黒目だったが、魔力に馴化する前であるためだろうと一ノ瀬は結論付けた。

少年に引かれる少女の年代は十代半ばから後半。桜色の髪に金色の瞳で、注目を集めるだろう美少女だった。服装は桜色を基調とした和服。しかし、袖が繋がっていなかったり、丈が極端に短い。

その次の少女は言わずもがな、朱雀の異名を持つ魔術師の紅焰だった。軍関係者の魔術師なら、彼女の事を知らぬ者はいない。赤い長髪に紅い瞳。その手には布で包まれた日本刀があった。

最後の少年は長身で、程よく肉もついた体に黒髪黒目。これも先程の少年と同じで、馴化前の魔術師であるためだろう。

ホムラの存在があったため特に警戒せず彼らに道を譲り、廊下の先へと行かせる。

目礼し少年たちは進み、一ノ瀬もまたエレベーターへと向かうが、ふと足を止め振り返った。

(そういえばあの茶外套のヤツ)

既に曲がり角を曲がっていた彼らの先頭の少年の表情を彼は思い出した。

(どうして、あんなに笑っていたのかねえ)

思わずといたような、堪えていたのが漏れてしまったような不覚そうな笑みだった。

六月に連れられて、シンラたちは五一九号室と書かれたプレートの部屋へと入った。

そこは客室だった。畳の間の中心にテーブルと四人分の座布団と背もたれが付いた椅子があり、壁の隅にはテレビと貴重品管理用の金庫が設置されている。奥には脚の着いた椅子が二つと丸テーブルがあり、そこから外が見渡せるようだ。

既に日も暮れ始めていて部屋には夕陽が差し込んでいた。

(秋の日は短いな)

シンラは少し哀愁を漂わせた笑みを浮かべてみたが、たまたま見えたと手洗い場の鏡を見ると恥ずかしくなってしまうた。

咳払いをし、畳の間に行く。

「ここは男子部屋ということにしましょう。水戸瀬様と御子柴様はこちらの部屋をご使用ください。西日が射しこむ部屋ですが、大丈夫ですか？」

少し申し訳なさそうに表情を歪め、その後慇懃に一礼し六月は人の良さそうな笑みを浮かべる。

しかし、シンラには後半よりも前半に少し気になる部分があった。「すみません。良ければ俺の事はシンラと呼んで下さい」

もちろん六月にそんな意思はなかったのだろう。少し驚きを入り混ぜながらも、口元だけで六月は笑みを維持し続けていた。

シンラにも分かっていることだ。だが、どうしても彼はミトセという名が好きになれないのだった。

所謂コンプレックスのようなものだった。

「それと、ついでに様付けも止めてもらいたい。くすぐったくてしようがないんだよ

それに見たとこる貴方の方が年も上のはずだ」

銀の一言に六月は頷き、

「では、シンラ殿に御子柴殿。お二人はこの部屋で今日一日をお過ごしください」

「殿はどうだろう？もう一つ、できれば敬語も止めて欲しんだが」

微笑した銀に、六月も苦笑した。

「お二人もお客様ゲストですので、流石に憚られます。平にご容赦を」
仕方ないなといった風に肩を竦める銀に六月はまた一礼した

「ところで六月さん。あたしんたちは指定された日に到着したんだけど、どうしてその呼び出した本人が出てこないの？」

棘のある言葉を口にしたのはホムラだった。ホムラは日本軍の魔術師の頂点に位置する川瀬五郎の指示でここに来たのだ。

事実上日本の魔術師のトップに立つ五郎ではあるが、実力の面で言えばホムラとそう変わらない。

日本には最強と呼ばれる魔術師が四人いる。彼らはそれぞれ四方神の名を冠している。

朱雀の紅焔。玄武の川瀬五郎。などという具合である。

ホムラは軍を脱退しており、地位で言えば川瀬に劣る。その分低く見られがちだが、二人の間には優劣や格という認識はない。

川瀬五郎が頼みごとをしてきたのに、挨拶や迎えがないのはどういう事だ。

ホムラの態度にはそんな意思が滲み出していた。

「申し訳ありませんが、川瀬は大河元帥をお迎えに行っておられまして本日は戻られません。」

明日には戻られますので、今しばらくご辛抱ください」

恭しく礼をする六月。

この人頭下げてばかりだなとシンラは呆れたように彼を見つめる。だが彼はむしる楽しそうに笑い返してきた。

(……本人が楽しそうならいいか)

そもそも関わるべき話じゃないなとこっそり再確認する。

(けどそうなる川瀬准将と顔を合わせるの明日になるのか)

三〇代を前にして軍の准将に申し上がった男。現在日本軍の魔術師の頂点。

(それに大河元帥も来るのか)

大河清斗は軍に入った後に魔術を学んだ魔術師である。軍の名誉

位である元帥になった既に歴史上の人物になった老人である。

現在は軍を退役し、銀も学んだ鋼拳流の師範として名を馳せている。そして、ホムラや川瀬と同じく白虎の名を得た魔術師だ。

その戦法は弟子の一人である銀と同じ、憑依魔術を使用した魔術と体術を融合させたものだ。大河清斗の場合はそれにさらに魔術による肉体強化をしていると言われている。しかしその魔術は明らかになっていないため、あくまでもそう予想されているだけである。

これで青龍がいれば日本最強と称される魔術師が一堂に会するところになったとこだ。

しかし、青龍は軍の人間でもほとんどその正体を知る者はいない極秘の存在だ。

そついう意味で、今回のここに来る必要もなかったのかもしれない。

「とにかく、着き次第知らせて。大河さんがいるならあたしんも顔出さないといけないから」

先程とはまた違うニュアンスの彼女の言葉は隠しきれない倦怠感が滲んでいた。

「了承しました。」

では、紅様とそちらの方のお部屋に案内します」

六月はそう言いシンラに引つ付いたサクラを見る。

サクラはほわほわと柔らかい表情のまま空想の世界を漂っているようだった。

「あゝ、サクラは大丈夫です」

繋いだ手を示してシンラは肩を竦めた。

六月は首を捻った。

シンラとサクラを交互に見てから咳払いをした。

「一応そついうのはしてもらっても構わないのですが、ここは兵士たちの詰所でもあるので控えていたくださいものです」

その意図を理解したホムラとシンラの顔が瞬時に赤く染まる。

「ちちち、違います！！俺とサクラはそんな関係じゃありません！

「！」
「そうよ！サクラとなんてやらせないわ。あたしは大歓迎だけど
！」

「いや師匠！何爆弾発言してるんですか！？」
ある意味いつも通りのやり取りを繰り返す二人を銀は慣れた様
子で、六月は引きつった顔で見ている。

結局サクラはシンラたちと同室で過ごすこととなった。

これには例えホムラと同じ部屋に連れ込んでも逃げられるとホム
ラ自身が気づいたためである。

ホムラは一つ上の階で寝泊まりするらしい。六月がその部屋に案
内をしたのだが、なぜかシンラも付き合わされた。

「どうして俺も付き合わされているんですか？」

とシンラが尋ねた際、ホムラは妖艶に笑った。

「決まってるでしょう？シンラ君が夜這いするときに迷わないよう
に気を使ってあげているのよ」

思わず眩暈を覚えてしまうようなセリフにもうシンラも苦笑いを
返すくらいしかできなかった。

ちなみにサクラは窓から見える景色にご執心である。

抱き付かれていた片腕を回すシンラ。ようやく得た自由に腕はバ
キボキと鳴って喜びを表現しているようだった。

一同は階段で六階に上がる。

「六階は男子禁制ですから、夜這いするときは見つからないように
お願いしますね」

笑顔で告げる六月は朗らかなのだが、シンラにとっては事実上の
OK サインと同義であり、乃ちホムラのテンションメーターの針
が振り切れそうで怖かった。

六月の前方を歩く赤い少女は天を突きそつなほどのガッツポーズ
をしていた。

(……よ、夜が怖い)

どうせ行かなくても向こうから来たりするのだ。先程の六月の控えていたきたいという発言で少し安堵したシンラではあったのだが、今のOKサインでそれも消失した。

せめて軍の魔術師たちの魔術式や力を研究したかった。いや、しなければならぬのだ。

己の目的を果たすために。

彼は、シンラはそのためにホムラの教えを求めた。

(俺は、あの人を利用してゐるんだ)

これまで。そして、今からも。

彼は利用し続ける。彼女を。その繋がりと地位も含めて。

そして何より。

彼自身に自覚があるのが、シンラにとっても見ている者たちにとっても辛いものだった。

だからこそ、彼はホムラの好意を受け入れられないのかもしれない。
い。

(でもそれも、言い訳なのかもしれない)

シンラはそんな風に考える自分が、好意を受け入れられない自分が嫌いだっただ。

3 氷銀の姫君（前書き）

この小説はフィクションです。
よつやく三人目の登場です。

ふふふ、未更新三カ月を阻止しました。

3 氷銀の姫君

????????

何故かげっそりした顔で帰ってきたシンラを見て、銀は大体の事情を把握した。

どうせまたホムラが彼を誘惑したのだろうと結論付け、座布団の上に座る彼はテーブルに置いた自身の西洋の鎧の一部のような魔法出力器である鉄鋼手ガントレットを調整し始める。

調整といっても部品ごとの分解などは行わない。

そもそもデバイスモノクルは魔術師が魔術を使うにあたって、出力や発動の座標の指定を手助けするものだ。(もっとも、デバイスなしで魔術を使えるものはないため、手助けというより必要な方法と言った方が正しいかもしれない)

つまりデバイスの調整とは、デバイスに掛けられた魔術を補助する式を作るのだ。

しかし、通常イメージで魔術を使う魔術師は明確に式というものグラフィックスを認知はできない。図示魔術マスメティクや演算魔術マスマティクを使うものなら別だが、魔術を記号や図を用いて説明するのは難しいのである。

そのため魔法出力器の調整には、普通は調整専用のデバイスがモノクル必要不可欠なのである。。

単眼鏡。片目だけに着けるメガネのようなそれこそがその専用デバイスだ。

それは自身の距離感や、焦点の当て方などを記録させ、魔法出力器の式に反映させることが可能になる。

銀は左目の上にその単眼鏡を付けていた。

条件は整っている。しかし、銀は苛立ったように眉に皺を寄せていた。

「どうしたんだ。銀？」

その質問をそのまま返してやりたいと思う銀であった。

「どうも調整が上手くいかないんだよ」

お手上げだと銀は肩を竦めた。そして単眼鏡を外し、鉄鋼手の隣に荒い動作で置いた。

単純な作業のようで魔術式の調整は困難なことだ。普通は専門の工巧者と呼ばれる職に就くものに任せるものだ。下手に式をいじれば魔術の不発どころか、威力や魔力消費の調節が効かない誤発ミスファイクが起きる可能性もあるのだ。

「調整なら俺に任せておけばいいだろう？」

シンラはデバイスを自作した経験もあり、調整ぐらいならお手の物だった。事実、銀もシンラに調整を頼んだこともある。

「そういう訳にもいかないさ。これから戦闘があるかもしれない以上、俺も調整のイロハぐらいはできるようになっておかないと困るだろう？」

今更のような気がするシンラであったが、その心意気はいいものなので何も言わずに壁際で彼の奮闘を眺めることにした。

再び単眼鏡を掛けて、繊細な魔術式と向かい合う銀を見るのは些か以上に退屈だった。

欠伸を堪えながら、デバイスの置かれた机の下で丸くなっていた猫型の精霊の《アルテミス》の観察にシンラは没頭した。

しかし、十分もしない内に彼の意識に霞がかかった。

バサツと良い音をたて、襖が開かれたのはその時だった。

??????????

「よし。終わったぞ」

単眼鏡を外し、また無造作にそれをテーブルに落とした銀は一つ伸びをし、長時間同じ体勢だった体をほぐす。

そして、肩を回しながら気怠そうに椅子に背を預けた。

その時には既に空が茜色に染まっていた。

「お疲れ様、……です」

少しハスキーな声に付け足したような丁寧語と共に、すつと隣からコップに入った水が差し込まれた。

「ああ、ありがとう」

何も考えずにそれを受け取り、ゆつくりと喉の奥に流し込んでいく。

しかし、シンラは意外と気が利くと銀は彼への評価を改めた。細かいことまでよく見るというのが、もしかすると彼のデバイスの魔術式の調整技術に貢献しているのかもしれない。

ふと視界の端の水を差し出した手が映った。

華奢で色白な手だった。まるで少女のようだ。

シンラってこんな手をしていたか？

そもそも、さっきのハスキー声はシンラのものだったか？

銀は疑問を確かめるべく、その手から顔へと視点を動かしていくと。

雪原と同じ色の白銀が彼の目を惹いた。

それがその手の持ち主の瞳と髪の色だと気付いた時、銀は置きっぱなしの鉄鋼手の右手だけを引つ掴み、体のバネのように跳ねた。

距離を取った銀はすぐさま鉄鋼手に手を通し、拳を構えて、臨戦態勢に入っていた。

対する少女は眼をパチパチとさせ、呆然と銀を見ていた。

少女は北欧系の顔をしていて、おそらく旧欧州人である。セミロングの銀髪に銀の瞳と一見すると生まれ付きなのか、それとも何かの属性の魔力に順化したのものなのか判別できない。

服装は若草色の日本軍の軍服だった。その右腕には雪の結晶を模

した腕章があつた。もしかすると銀たちの味方なのかもしれないが、ノックもなしで、部屋に侵入した者に払う礼儀はないと内心で彼は切り捨てた。

「誰だ？」

銀は短く問いながら、魔力をその右手の鉄鋼手へと集中させる。

彼の魔術はその手に魔力を憑依させ、物理的攻撃の際その威力を増加させるものだ。その魔力は既に可視化するまでに圧縮されていて、灰色にも見える輝きがその拳に満ちていた。

しかし、銀髪に銀の瞳の少女は動揺することもなく静かに頭を下げた。

「ワタシは日本軍魔術師団、銀閃の騎士団のヘル・ジュリア……、です」

銀閃の騎士団。

それは魔術師団長の川瀬五郎が直接管理、指揮する特務部隊の名だったと銀は記憶していた。

旧欧州系の魔術師のみで構成され、それ故に通常の指揮系統に入らなかったという話もある。一般人からは少々縁遠い部隊だ。

「あなた方のお世話と警護を任されたの……、です」

やはり付け足したような丁寧語でそう言つて、彼女は軍人の証明となる階級が書かれた証明書を見せた。

それを確認して、ようやく銀はデバイスへの魔力の供給を止めた。鉄鋼手を銀色に光らせる魔力が尽きたために、プシュウと情けない音をたて、デバイスの魔術式は停止した。

「……ふ」

肩から思いつきり脱力し、銀は溜息を漏らした。

「だったら、入ってくるときにそう言ってくれればいいじゃないかなんで黙って入ってきた？」

シルバードロンドの髪を揺らし、首を傾げるヘル。その姿は人形のように美しかった。

「ですが、ワタシは水戸瀬様から、御子柴様に声をおかけしないよ

うにと言いつけられましたので、その通りにしただけ、……です」
やはり気を抜くとこの少女はぶっきらぼうな話し方になってしま
うらしい。その方が素なのだろう。

すこし、銀の気持ちに弛緩し始めていた。だが、
ガラツと襖が開き、ハンカチで濡れた手を拭きながらシンラが入
ってきたのはその時だった。

ある意味最悪ともいえるそのタイミングで、

「シンラ。お前、せめて一声ぐらいかけさせるよ!」
「へ?」

先ほど溜めた鬱憤と魔力を晴らすかのように、銀は右手の鉄鋼手
を振るった。

爽快ともいえる打撃音の後、シンラは銀に平謝りをするはめにな
った。

調整を新たにした魔法出力器を眺めながら、銀は一つ溜息を吐い
た。

「なあシンラ。そろそろ腕試ししたいって思わないか?」

「まあね」

首肯するシンラもまた、部屋の脇に置いた《如意》を見つめた。

デバイスの式を調整した銀もそうであったが、精霊と契約して以
来、実践的な魔法を使用していないシンラもまた、その力を振って
みたいと日々思っていた。

加えて、これから戦闘が起こる可能性があるのなら猶更であった。
だが、魔術師同士が戦うためにはそれなりの広い空間と、安全対
策が必要だった。

例えばホムラは山奥の道場を借りることによりそれを果たしてい
た。

しかし、京都の中心地ともなればそんなスペースはなく、加えて
人通りも多い。古都としての京都よりも、近代都市としての京都を

目の前にした二人は肩を落とす。

間違はなく外で腕試しを行うわけにはいかない。

だが、それは必要な行為である。

なんとか手はないものかとシンラはふと部屋の片隅に正座して固まるヘルと目を合わせた。

「ジュリアさん？その、軍が演習に使うような空間はないの？」

「演習？」

声を上げたのは銀だった。

「ほら、魔術師を抱える軍なら、その訓練用の施設ぐらい持っているかなって思ったんだ」

「ははは、そんな場所が簡単に使えるわけないだろう？」

まあ、そうだと思うけど。とシンラは苦笑した。

「使えますよ？」

二人はズッコケそうになった。

「マジっすか？」

シンラは思わずヘルへ詰め寄る。

「どうして尋ねられたあなたが驚いているの……、ですか？」

本当に不思議そうにヘルは尋ねた。

それはダメ元のもりで聞いたからですと説明したかったが、なんだか面倒臭そうなので放置した。

「それで、本当に使えるんだね？」

「はい。多少許可が必要だけど……、ですが」

簡潔にヘルは述べたが、丁寧語を忘れていたのは誤魔化せない。

しかし、あまり気にした様子もなく、銀とシンラは前もって合わせていたように同時にガッツポーズをした。

「ありがとうジュリアさん」

手を握って、さらにぶんぶんと上下させてシンラは礼を言ったが、少し顔をしかめヘルは、

「宜しければヘルと、呼んで、ください。水戸瀬様。それに御子柴様も」

しかめっ面から少し頬を朱に御し照れたように言った。

それは名画のように目を奪うものだったが、シンラと銀は少し前に感じたものと同じ感覚を覚え、見惚れることはなかった。

六月むつきの時のデジャヴだった。

「俺のことはシンラって呼んでもらえるかな。ヘル」

「俺のことは銀でお願いします。ヘル」

はあ、と怪訝そうにヘルは了承したのだった。

呼び方を指定する三人組の結成となるとはこのとき三人とも夢にも思わなかった。

一旦部屋を後にしたヘルが戻ると、その手には両側面に刃のついた西洋剣が、鞘とともに握られていた。

女性用なのか比較的細身の西洋剣で、太さからいえば日本刀と大差はない。長さも人の腕ほどである。その鞘にはサファイアとアメジストで装飾がなされていた。それはまるで儀礼用の宝剣を思わせる出で立ちだった。

ホームラの『日暮れの雨』とは違う意味で価値が高そうな剣だった。

「それが君のデバイス？」

少し興味深そうにシンラは尋ねた。

「そんなもの、です」

いまいちはずきりしない返答をしたヘルは少し顔を顰めていた。

さらに言葉を紡ごうとしたシンラを、背を向けて彼女は拒絶した。

そのまま、逃げるようにさっさと彼女は部屋を出た。

少し慌てて二人はヘルを追った。

シンラはバットバックに隠した金属棒の『如意』を持って、銀はシューズケースのようなものに鉄鋼手を収めていた。

「これからどこへ行くんだ？」

さして苦もせず追いついた銀が問いかけた。

ヘルは振り返り、人のモノとは思えないような儂げな笑顔を浮か

べた。

「駐車場です」

表情とセリフが恐ろしいほどミスマッチで、二人は一瞬言葉の意味を理解し損ねてしまった。

「ちゅ、駐車場？」

「はい。正確にはこのホテルの地下二階の駐車場、です」

彼女はすっと、ウソみたいに細く綺麗な指で足元を指した。

どこか得意げに進むヘルを追って二人は駐車場を歩く。

しばらく進むと駐車スペースが減少し、代わりに大きな機械が数台設置されていた。

そして、その中の一台、ファンがブオオオンという音を吐き出す機械の前でヘルは止まった。

「これは……」

「これは地下に安定した量の空気を送るための機械だな。多分この駐車場に空気を送ってるんだろう」

銀の疑問の言葉にかぶせるようにシンラが解説した。

「おしいですね」

無表情のまま銀髪銀眼の少女は言った。

へ？つと間抜けな声を漏らす少年の隣を抜け、ヘルは埃を払うかのように二、三度床の上で手を振る。

「この機械はこの下の階に空気を送っているの……。です」

「下？」

シンラと銀は少女が手を払った足元へ視線を移動させる。

そこにはコンクリートで舗装された駐車場の床があるだけだ。

しかし、少女が払った部分だけが、徐々に青色に輝いていた。それは四角形に形を取っていった。

そのまま、その部分はゴオオオオオと石が擦り合うような音をたて沈んでいった。

「あれに魔力を注ぐと下への入り口ができるの、です」

「って、どういう仕組みなの？」

「詳しく言つと長いので省略しますが、魔力を注ぐと形を変えるんですよ。そして、注がれた魔力が消失すると元に戻るんです」

丁度ヘルが言い終えた時、階段が眼下に形成された。

「詳しい話を聞きたいんだけどな」

「ふふふ。良い。下りながら話しましょう」

悪だくみをするように笑い合うヘルとシンラの半歩後ろで銀はこっそり溜息を洩らした。

分子配列を魔力によって変化する物質を、地属性の魔術で作り出すという当人たちにとっては話し甲斐のある議題を存分に語り合った二人はすっかり意気投合していた。

「地属性か、実際に見たことはまだないんだよな」

「すぐに見れる、と思います。軍にはたくさんの魔術師が所属してるから。魔力の属性も沢山」

「俺はまだ光と炎、それに水ぐらいしか見たことないから」

「それは仕方無い。弟子の方はそう言う点でおと……、不便」

劣っていると口走りそうだったが、シンラは気付いているのかそうでないのか、気に留めた様子はなかった。

「確かにな。経験不足の点はこれから補うしかないか」

「よかつたら、ワタシの隊のメンバーを紹介する？きつとあなたの事を気に入る」

「本当か？それは願ってもないことだよ」

諸手を上げて喜ぶシンラを見て、ヘルはシュンと落ち込んだように肩を落とした。

「そんな、残念」

「へ？なんで喜んで紹介してもらつよ」

シンラが不審そうに眉をひそめるのを見て、ヘルもまた首を傾げた。

「え？願ってもないってことは『そんなの御免だ』という意味じゃ

ないの？」

「いやちがうよ。願ってもないってことは、『望んでも簡単に実現しない事』で、とつてもありがたいことだよ」

その言葉を聞き終えて、彼女はホツとしたように小さく笑んだ。

「そう。ならよかった」

百合合のようなどこか儂げな笑みにシンラは釘づけになっていた。

「……どうかしましたか？」

棒立ちになっていた彼を覗き込むようにヘルは近づいた。

ハツとしたシンラはちよつと頬を赤くしながら後退る。

「な、なんでもないよ」

「？」

ならいい。やっぱりワタシ、日本語は苦手かも、です」

もはや今更過ぎる敬語でヘルはまた話を始めていたが、彼の頭にはその内容が入ってこなかった。

銀髪の人形のようなヘルの、時々混ざる人の表情に彼はドギマギしてしまっていたのだ。

それはもしかしたら、ヘルの笑顔の持つ、ホムラの太陽のような笑みとは違う魅力は彼にとって新鮮だったためなのかもしれない。

ちなみによくやく彼が会話できるまでに落ち着いた時に、

「楽しみだよ。川瀬將軍直属の部隊なら実力も折り紙つきだろうか

ら

「……折り紙が付いていると、どうなの、……ですか？」

言葉の壁の厚さにシンラは少し頭痛を覚えた。

地下の階段の終わり、よくやくシンラたちの前にそこは姿を見せた。

「ここは……」

「魔術模擬戦用試合場。軍の中ではコロッセオと呼ばれてる」

およそ長方形型の鉢植を思わせる形のそこは、上階以上は観客席
になっているのだろうか。列ごとに椅子が並べられていた。

対する下の階は単調な灰色をした床があるだけの簡易なものだ。

もしも、シンラたちに室内スポーツの経験があったなら、その試
合会場を思い出していたであろう。

まさしくそこはスポーツの試合でもできそうな空間だった。

しかし、ここで行われるのはスポーツではない。模擬とはいえ魔
術師同士の戦闘行為なのだ。

三人はコロツセオの中心まで進む。そこでヘルが振り返った。

「じゃあ、二人が戦うということでもいいの、……ですか？」

「ああ」

「そうだ」

シンラと銀の返答に彼女は小さく頷いた。

「というか辛いなら敬語止めたら？と二人とも思っていたが口には
出さなかった。

「これからするのは模擬戦。です。だから、ルールが必要、です。
それを説明する、です」

ヘルは同意を求めるかのように二人に視線を投げかけた。

笑いをこらえるために口に手を当てながら、それに二人はすぐさま
頷いた。

「まず、勝敗を決める方法。一つはどちらかが敗北を認めること。

これは魔力が尽きた時に告げて。

もう一つは相手の攻撃を一度でも受けた場合。これも敗北になる、
です」

「一度でもか？」

思わず銀は反応したが、ヘルは冷たい目で言う。

「質問は拳手にてお願いします」

「そっだけ何故か非常に慣れた様子だったので、思わず銀は手を拳
げてしまった。

「何、ですか？」

「一度でも攻撃を受けると負けつてのは厳しいと思うのだが？」

「もちろん防御すれば問題ない」

「しかし、それにしたって例えば殴られても負けなんだろう？」

「それは大丈夫。けど、一撃で戦闘不能になる攻撃、つまり魔術やデバイスで攻撃が当たれば敗北、です」

彼女の言葉に、シンラはまだなお不満そうに眉を顰めた。

しかし、それを慈愛と厳しさを両方兼ね備えた微笑みでヘルは見つめる。

「本気で戦えば敵は一撃決死のつもりで刃を振るってくる。模擬戦はそれを模した戦いをするの」

ヘルの銀色の瞳と髪が刃のように鈍く輝いていた。それはこの世のものではないような恐怖さえ覚えるほどの輝きだ。

二人は少し息を呑んだ。彼女はその外見からは想像できないが、紛れもない軍人だ。シンラや、銀よりも戦場という場所を熟知しているのだ。

敵。

それは戦いに身を投じ、尚且つ生き残った者だけが得る知識なのだ。

シンラは華奢な少女の背に、酷く冷たい暗闇を見た気がした。

二人の反応を見て、少女は微笑みを納め、仮面の表情へと戻った。

「もしも、二人のどちらかの魔術、デバイスでの相手への攻撃が通りそうだった時は、ワタシが阻止する」

安心なのできるものではない。

「阻止？一体どうやって？」

「尋ねたのは銀だった。」

「こうやって、です」

おもむろにヘルは儀礼用の西洋剣を鞘から抜き去り、足元に突き立てた。

その瞬間、単調な灰色だった床が青白く発光し、次の瞬間には天井までも覆い隠した。

眩さに目を閉じたシンラが目を開けると、試合会場と観客席が青白く薄い光で遮られていた。

「バリアー、みたいなものかな」

「バリアーって、SFかよ」

どこか皮肉っぽいシンラに続くように銀は冷めた一言を漏らした。「……まあ、SFじゃなくてもバリアー発生装置はもう技術的には問題ないくらいのものできてるんだがな」

シンラは誰にでもなく、そう小さく呟いた。

「ただの無属性魔術」

淡々と返答したヘルの体に、青白い光が薄い膜のように張っていた。

「このフィールドには魔力を増大させる仕組みがあるの。」

こんな風に審判がフィールド全体を魔力で覆って、観客席や壁とかの人工物の保護、それにフィールド内のどこでも好きな場所で魔術を即座に発動させられる、です」

言い終えると同時に突如としてシンラと銀の間の丁度中間に厚い氷の板が生み出された。

「……大きいな」

銀は感心したように呟いた。

(……早いな)

内心でシンラは舌を巻いていた。

魔術を発動させるために必要なものは二つ。イメージと魔力だ。

双方があつてはじめて魔術は現象として具現するのだが、今はイメージする時間も、魔力を操作する時間もほとんどなかったはずだ。

何か、このフィールドに術者のそれを補助する装置まじゅつがあるはずだが、そのの暴くのは後だった。

気泡も何もない、真つ新なガラス版のような氷壁を隔てた向こう側、御子柴銀がデバイスの鉄鋼手を身に着けていた。

シンラもバツクから無骨な銀色に光る自身の得物を取り出した。

二人は不敵に笑い合う。

「以上で説明は終り、です。何か質問はありますか？」

その言葉と共に氷の壁は音もなく崩れて消えた。

「じゃあ、はい」

さっき言われた通り挙手するシンラを見て、銀は何だか小学校に通っていたころを思い出した。何だか非常に和んだ。

「シンラ、さん」

「ヘル、君さ。苦手なら敬語じゃなくてもいいよ？」

（遂に言った！）

銀は一人だけ非常に盛り上がっていた。正直、どうして盛り上がったのかも彼にはよくわからなかった。

「そう。じゃ止める」

そう言った時にはぶっきらぼうな口調になっていた。

「他には？」

シンラはどこか満足そうに微笑み、首を左右に振った。それに合わせて銀も「俺もないよ」と返答した。

「そう。」

じゃあ、フィールドに魔力が行き通った瞬間に試合開始だから突き立てられた剣から青白い光がフィールドに注がれ、やがてそれはガラスケースのように透明な壁となり、一階部分から天井までを覆い囲む。

フィールドに立つ二人の少年はそれぞれの武器を構え、そして、

「試合、開始」

単調な銀色の姫の合図を受け、二人はぶつかり合った。

4 魔術試合（前書き）

この小説はフィクションです。

今回は男と男の模擬戦です。

うん、真剣勝負のほうがいいよね。

4 魔術試合

??????????

銀はヘルの合図とともにその拳をシンラへと放った。

初撃は顔への軽い左ジャブ。だが、鉄鋼手を身に着けたその拳は、魔力による強化無しでも人間の頬を簡単に陥没させかねないほどの威力が伴う。

シンラはすつと上半身を右に動かすことでそれを躲した。

そこへ銀の第二撃の右手の拳が迫る。それにシンラはバトントワリングのように如意を回し、拳を弾き返さんと振るった。

ヒュンと風を切る音の後、ガキーンという金属がぶつかる音がフィールドに響き渡った。

銀の右の拳の軌道がずらされ、シンラの横を空振りした。

すぐさまバックステップで回避行動をとった銀に、頭部を狙った如意の横払いが襲いかかる。

しかし一メートル程度しかない如意の長さでは、後方へ回避した銀に命中させられるものではなかった。

銀の耳にガコンと何かがかみ合ったような音が聞こえた。

勘からか、経験なのか身を屈めて銀は回避行動をとった。

その直上を鈍い光を発するシンラの獲物を通り過ぎて行った。

視界に入った如意は拳を弾いた時よりも、いささか長くなっているように思えた。

シンラは続けざまに態勢の崩れた銀に向かって如意を振るう。

またしても何かがかみ合ったような音が聞こえた。

足を狙った一撃を銀は飛び上がり回避する。

一瞬だけ見えた如意はさらに長くなっていた。

銀はそれを見てある確信を得た。

(間違いない、如意は長さを変えられるデバイスだ)

近距離戦において大事な点が二つある。速さと間合いの長さだ。間合いが長いほど先に敵を攻撃できるが、攻撃事態の速さでは劣る。逆に間合いが短ければ先に相手を攻撃できるが、相手に近づかなければならない。それも相手の間合いを抜けて、自分の間合いへ相手を入れなければならない。

そして、間合いの長さは武器によって異なる。だが、それによって優越が決まるとは限らない。

例えば刀よりも槍の間合いは長い。しかし、一度刀の間合いに入られると、その長さゆえに速さでは勝てない。

だが、もしも槍が多段式で長さを変えられることができ、刀と変わらない間合いになれば勝敗はわからないだろう。

シンラの如意とはそういうものだ。もし相手の間合いに入れられなくても、武器が短くなれば同等以上の速さを得る。逆に相手よりも広い間合いを維持することもできる。

武器の長さを変えることで、常に相手より優位な戦いができるのだ。

武器と武器を直接ぶつける近接戦においては、最強の武器かも知れない。

大雑把に思考をまとめた時、全てがスローモーションで見える中、隙だらけのシンラの頭上が彼の眼に映る。

自由落下の勢いを使い、ゲンコツでも叩き込むように銀はそこを狙った。

ガコンと三度目のかみ合う音の後、先ほどと同じ金属音が周囲に鳴り響いた。

身を屈めたシンラと拳を振り下ろす銀の間で、如意と鉄鋼手がぶつかり合っていた。

銀は軽く眼を見開いて驚いた。

シンラは外れた薙ぎの勢いをそのまま回転運動に生かし、その場

で一周回転し、さらに如意を刀で斬り上げるように鉄鋼手に打ち付けたのだ。

如意はさつき程とは比べ物にならないくらいその身を短くしていた。

さつきまで二m近い長さだったはずの如意は、今はもうその半分ほどしかなかった。

「そいつは便利だな。シンラ」

だがそれはあくまでも武器の力だ。

シンラ・ミトセという男の力とは言えない。

銀は余裕を持った笑みを浮かべた。

ギリギリと銀の拳が肉薄してくる中、シンラは冷や汗で服の内を濡らしていた。

(銀、お前、鉄鋼手つけてるのに、早すぎだろっ)

ボクシングというスポーツをシンラは知らなかったが、銀の拳はプロのボクサー顔負けだった。

シンラにとってその拳を躲すことは銃弾を避けるのとさほど変わらない行為に思えた。

さらに銀は鉄鋼手という鎧を腕に着けている。ガントレットというものは、本来は防具なのだが、銀のそれはもはや防具と呼ぶべきものではない。完全に攻撃することを目的にしている。

それはシンラの使ってる金属バットのような如意と、本質は何も変わらない。ただ敵の骨を砕くための凶悪な武器だ。

シンラはバネのように立ち上がり、銀の重い拳を撥ね退けた。そうして先ほどの銀のようにバックステップで距離を取る。

しかし銀はそれを追うことはなかった、

それはある意味当然のことだった。

魔術師の戦いのメインは魔術。近接戦はただのおまけに過ぎない。

シンラはイメージする。

球体状の光の塊から、一条の閃光が銀に向かって一直線に伸びていく光景とともに、口に出す。

「撃ち放て光の銃弾！光条・一閃！」

それはイメージに伴う名称だった。それを口に出すことで、短い詠唱^{スベル}魔法は完成する。

シンラの頭上に渦を巻き、光の魔力が集結する。それは球体に形を取ると、そこから一つの光の柱が銀に向かって飛び出した。

サクラという精霊を得たことにより、シンラは初めて、人の借り物ではない、己の力で魔法を発動させたのだ。

しかし、少々威力が強すぎた。

放たれた魔法、光条・一閃は銀を飲み込むほどの大きな光だった。光が収まっても、空気中の水分が何かが蒸発しているのか、霧のようなもので銀の姿が見えない。

感動よりも失敗してしまったことに、加えて友人をけがさせてしまったのではと青ざめるシンラ。

はっと、試合を止めるはずのヘルの方を振り返って見た。

しかし彼女は首を左右にゆったりと振った。

その意味することはつまり、

「いきなりひどいぞ」

霧のようなものの中からゆったりと歩き出てきた。

鉄鋼手を着けた右腕を掌を開いたままシンラに向ける銀が非難の声を上げた。

「だ、大丈夫か？」

「あー、大丈夫だよ。ったく、いきなり本気で撃つなよな」

銀は、腕に着いた着いた水を振り落とすように二・三度手を振った。「お返しにこつちも本気で行くからな」

たいそう楽しそうに唇を歪める銀に、違う意味でシンラはまた青くなった。

左手の掌に右手を打ち付け銀は少し甲高い声を上げた。

「右手に一発、人の意識を刈り取るぐらいのものを」

シンラと同じ種類の魔術発動法だが、こちらはより細かい指定を入れていた。

「きじょうげつだ気憑月打」

言葉を言い終えた瞬間、銀の右手に変化が起きる。

どこか青い月光のような光がその手に宿る。

それは部屋に無断で侵入したと勘違いした際、ヘルに使った銀色の光よりもやや弱い光だった。

「覚えておけシンラ。こうやって言葉で指定すれば魔術の威力を抑えることもできる」

「勉強になるよ。センパイ。そんなもの、どこで学んだんですか？」

「うちの師匠が、な。これ使って散々苛めてきたんでな」

「そりゃご苦労様です」

舞台劇のようにどこか自然に二人は白々しい言葉をやり取りする。

(おそらく、自身への抑制を言葉として出すことによって、言葉の通りの魔術をイメージさせることでそんな芸当ができるんだろうな)

銀が笑みを消して、疾風のように駆けた。

シンラもまた如意をバトンのように回転させ、迎え撃つ準備をする。

そして、ガコンとかみ合う音がした。

その瞬間にはもう如意の長さが調節されている。

再びバトンほどの短さになった如意を素早く引き直し、前に突き出した。

銀はそれよりも早く拳を突きだそうとした。

恐ろしい速度で繰り出された拳と如意がぶつかり合う。

シンラの防御は十分な早さだった。

だがシンラの体は車にぶつかりでもしたかのように吹き飛ばされた。

シンラは銀の拳から衝撃波が飛び出したような幻覚を見た。

すさまじい衝撃に内臓が圧縮されたようだったが、歯を食いしば

って耐え抜き、シンラは無理やり体を捻った。

反転したことによりシンラの正面には壁が立ちはだかることになった。

「……！」

如意から離れた左指だけでシンラは凶形を描く。棒から何かが出しているような凶をイメージしながら描いた。

書き終わると同時に如意から壁に向かって白い閃光が迸った。

それはジェット噴射のようにシンラの体の速度を抑えていく。

しかしそれはあくまで横にかかる力を抑えただけだ。その後にかかる重力を抑えることまではできない。

シンラは重力に引かれ落下していったが、床に叩きつけられる直前で体勢を立て直し着地した。

「……ハアハア」

下手をすると血を吐きそうな痛みの中シンラは銀を睨む。

「……」

銀は何も言わなかった。

だが、気遣わしそうな眼がシンラの中の何かを激しく揺さぶった。

（くそ。何だよ。舐めやがって）

シンラは平衡感覚が狂い震える足を床に突き立てるように叩きつけ、無理やり立ち上がった。

立ち上がったシンラの眼を見て、銀はほくそ笑んだ。

（意外ともつんだな）

シンラの闘気、というよりも気迫は全く衰えていない。むしろぎらぎらとした鋭さを持って燃え上がっている。

正直、先程の一撃は厳し過ぎたと銀は思っていた。

意識を奪う程度のはずだったが、防御した結果鋼拳流の魔術の違う面の力が効力を発揮したのだ。

銀が学んだ鋼拳流という魔術は別名「鎧崩し」と呼ばれている。

その一撃は鎧を貫通し、本体である人体にダメージを与える。

魔力を拳から体に打ち込み発動させるというのが鋼拳流の基本。つまり体内で魔術を発動させる。効率よく人を戦闘不能にさせるメリットがある。逆にこの魔術を学べば戦闘関連以外進路がないと言う。戦闘にしか使いどころのない魔術なのだ。

銀が言葉に出して制限したように今の気憑月打という魔術は人の意識を奪う程度の力しかない。

しかし、鋼拳流の魔術を使っている以上、身体強化の魔術は常時使用しているのだ。シンラー人ぐらい殴り飛ばすのは簡単なことなのだ。

銀の魔力の属性である光を体内の神経に打ち込み電気信号として認識させる。そうすると一時的に内臓レベルのダメージを受けたと脳が勘違いする。そんな理屈があるのだが、銀自身もそれを完全に理解している訳ではない。

大切なのはこの攻撃の効力はさほど長くは続かないということだ。今のうちに銀は勝負を決めるべきなのだが、彼は動かなかった。既に《気憑月打》の効力は消えて、彼の右腕はもう銀の光を放っていない。だがそれでも彼は動かない。

（悔しさに歯を食いしばるシンラの瞳にはどんな世界が見えてるの？ 私に見せてよ）

嗜虐的とも取れる思考をしながら彼は笑っていた。

やがてシンラが、ゆらりと崩れ落ちそうになりながら立ち上がった。

（正直ここで止めても良かったけど）

どこか危なげに立ったシンラは如意をぐるぐると回転させ始めた。冷静に試合経過を見つめるヘルは止めどころを考えていた。

試合の立会人というのは非常に難しい。

どのあたりまで試合を続けていいのか判断が付きにくいからだ。

あまり早く止めると試合者たちに後腐れが残ってしまう。かといって遅すぎると下手をすれば死んでしまう危険性もあるのだ。

今の一撃は非常に判断がしづらいものだった。魔力攻撃が通っている以上、シンラが敗北したと見てもいいが、彼はその後壁との激突を回避する行動をとった。銀自身が手加減したとはいえ、それで決着とは言いづらい。

(彼はまだ大丈夫そう)

ダメージは体に残っているようだが、戦闘不能とは言えない。

(普通、素人は痛みがあるとまともに戦えなくなるんだけどね)

痛みに対する耐性が無いためだろうか。戦闘訓練を受けていない魔術師も初めての戦闘で時々狂ったように攻勢に出たり、逃げたりする。

しかし、シンラにはそういう様子は無いようだ。

修羅のような気迫を放つ瞳の奥には氷のような冷たい意思が宿っている。

(きっと二人とも経験が多いのね。普通、素人の戦いを見てこんなに熱くならないもの)

ヘルは試合の審判である以前に一人の観客として、二人の戦闘に胸を熱くしていた。

(きつと二人とも魔術がすごくキレイだから、なのかな?)

ヘルの銀色の瞳には二人の使う魔術が透き通って見えた。何物にも染まっていないからなのか、二人が純粹に魔術で試合うことを楽しんでるためか。

(ワタシには分からない)

それはとても残念なような気がした。

気づくと上の観客場にゾロゾロと人が押し寄せていた。

それに気付かないぐらいシンラは戦いに集中していたらしい。

しかし、今更それに気付いたところで、彼らは気にすることはな

い。

如意を高速で回転させてシンラはイメージする。黄色い光。如意の両端に宿り、それは軌跡に従って黄色の円を模っていく。

それはホムラの試験の時に使った魔術《インフェルノ・リング火円》から想像した魔術だ。

シンラのアーティストの才が今まさにその力を発揮しようとしていた。

(名付けて、《フォメノン・リング光輪》)

「円を成す光の戦輪！」

黄色の光がシンラのイメージ通りに如意の両端に宿る。

シンラは如意を回転させたまま、投げるように如意を振るった。

銀に向けて如意の軌跡を描いていた黄色のリングが銀に向かつて飛翔する。

対する銀は何かをボソツと呟いた。

銀色の閃光がその鉄鋼手に再び宿った。

拳が光の輪を打った。

その時には光輪にヒビが入り、あっという間もなくガラスが崩れ落ちるように光輪は壊れた。

そうして地に落ちた破片もすぐに消えた。

平然と立ち続ける銀を見つめシンラは溜息を吐いた。

(せっかく作った魔術を簡単に消してくれやがって)

だがシンラは野獣のような笑顔を浮かべていた。

(だが、次は簡単には消させない)

シンラは如意を回転させたまま垂直に放り投げた。

両手を塞ぐ如意を手放したことによりシンラ両腕は自由になる。

「数値化」

詠唱魔術で数値化を発動させたシンラには、すべての座標情報が数値として表せられ、如意があと何秒で落ちてくるかも計算できる。左手で鍬やじりのついた棒を描き、右手で数式を書く。

左は図示魔術。右は演算魔術。マスマットティックそれを複合することでようやく使用可能な魔術。

それはデバイスと同じ名を冠した魔術、《如意》。回転する如意の先端の片方。そこに炎を思わせる黄色の光が宿る。魔術《如意》とはシンラが開発した魔術の中で、唯一、他の発動法では発動できない魔術だ。

それは《如意》の特殊性のためだ。《如意》は座標で発動する。指定された座標、しかも物体の上（例えば右手の上といった場所）であるならその物体が座標移動する際に、その移動した先の座標でも発動し続ける魔術、つまり物体に伸縮自在な刀身を取り付けるような魔術なのだ。

《如意》と似たような魔術で憑依魔術というものがある。だがこれは自分の身から魔術を放出して、それをもとに魔術を構成することで発動するというものだ。そのため憑依させるものに魔力が存在することが必須条件となる。この点で精霊の《天照》アマテラスを使うホムラの《不死炎》フエニックスは憑依魔術に分別される。

《如意》の特性は、今まで開発されたとの魔術、あるいは発動法でもなしえなかった特性だ。さらにその上に刀身の伸縮が自在という点も特異な点だ。

これを成立させるには多数の方式で、自身のイメージを具現化しなければならぬ。

《如意》はそれをクリアするために、演算で槍の先端という座標を指定し、図示で槍の先端のイメージを強くし、さらに伸びるといふ特性を与える。そして、

「光塵槍《如意》!!!」

詠唱で発動させるのだ。

シンラの手元に光の奔流のような鍔をもった如意が落下する。

槍をぐるりと片手だけで一回転させシンラは如意をぐつと後ろに引いた。それは刺突の構えだった。

「伸びる!!!」

シンラの言葉とともに光の槍が伸びた。
数十メートル離れた銀に、恐るべき速度で光の刺突が迫る。

銀色の光を宿した鉄鋼手の上を滑らせるようにして、銀はその光の槍を回避した。

押し出されそうになりながらも、そのまま彼は一步ずつ前進していく。

あたかも列車が真横を駆け抜けていくような感覚を味わい、銀の背に冷たい汗が流れていく。

「戻れ！」

その時突然光の噴流が止まった。

さっきまで銀の横に存在した光の刃はもうそこにはない。

「な、に？」

驚愕する銀の前には刺突の構えを取るシンラの姿があった。そしてその魔法出力器、如意の先端には、光の刃が煌々と輝き続けた。

「伸びる！」

その声と共に、あるいはそれより速く、光の槍が銀へと伸びた。

銀の胸部目掛けて閃光は駆ける。

「守護月」

銀は胸の前で鉄鋼手を交差させた。それと同時にほのかに彼の周囲が銀色に光り始める。

そして、詠唱で発動した防御用の無属性魔術が発動する。

だがそれも押し潰すほどの光の濁流が銀の体を呑み込んだ。

銀は無重力空間に放り出されたような感覚の中、口を開いた。

その直後、何かが壁に激突したような、爆音に近い音が会場に響いた。

爆音が耳の奥に残っているようだったが、シンラは気にせず「如意」を元のサイズに戻した。

「はあ、はあ、はあ、……」

浅い息を繰り返すシンラは肩を揺らしながら、立ち込める粉塵の奥にある数値の動きを見ていた。

数値化を施したシンラは、今の一撃でも銀を倒せなかったことを理解していた。

粉塵で見えないのだが、銀は確かに彼の前に立っている。

一体どうやってとシンラは流れる汗を気にすることもなく一心に考える。

どんな魔術を使えば今のタイミングの《如意》を防ぎ、尚且つ壁と激突したのにもかかわらず平然と立ち上がれるのだろうか。

少し髪が粉塵で白く汚れていたが銀は見たところ無傷だった。

一步一步、彼は確かな足取りでシンラに向かって歩み寄っていく。

シンラは薄い笑みを浮かべて、それを消した。

如意をまたしてもバトンのようにぐるぐると回す。

そして、剣を薙ぐように如意を振るった。

「伸びる！」

瞬時に光の刀身が銀を腰部から切断せんと伸びる。

銀はそれを飛び上がって回避した。

彼の足の裏のすれすれを刀身が過ぎていった。

次の一撃が飛来する前に、銀は駆け出した。

シンラが手元の如意を振るう度に、伸びた巨大な《如意》の刀身が銀を襲った。

銀はその刃を、時には躲し、時には銀色の光が宿った鉄鋼手で刀身を殴打し弾いた。

そうして、着実に彼はシンラへの距離を詰めていた。

(このままじゃ、やられる)

シンラは光の魔力をその身に受けたばかりだ。故に彼はその扱いに慣れていない。

既に彼の光の魔力はほとんどなかった。

彼の冷静な部分はもう敗北を悟っていた。

元々この試合、シンラにとって先ほどの《如意》の一突きが決まらなければ、勝利するのは難しいものだった。

先ほども言ったようにシンラは光の魔術に慣れていない。

それゆえに扱える魔術の数も少ない。そもそも彼が使った魔術はほとんどがこの試合の中で創造したものだった。手数も実力も足りない。

加えて銀も隠しているが相当な手並みの持ち主だ。

鋼拳流がどのような流派か、シンラは知らないのだが、それ自分と年代で免許皆伝された銀の実力は、シンラにとても容易にその強さが想像できた。

銀は手加減しているのだろうが、本当に敗北しそうになったならば本気を出して勝ちに来るような男だ。

(アイツ、負けず嫌いだからな)

シンラはふっと笑った。それはとても自然で、気取らない笑みだった。

(僕はもう勝ちにいかない)

ただぶつける。今の自分の力を全力で。

それは格上の兄弟子に稽古を挑むような気分だった。

勝てるとは思わないが、負ける気もない。

シンラは《如意》を元のサイズに戻し、銀に向かって駆けた。

真正面から激突するように、銀とシンラは駆けた。

この試合で何度もしたように、シンラは手元のデバイスを回転させた。

ガコンと何かがかまったような音が鳴る。

目の前から高速で迫る銀が、グツと拳を引いた。

だがシンラは恐れなかった。

閃光のような拳も、銀色の光も、彼には恐れる必要がないのだから。

シンラは如意を振るう。銀の頭部を狙った一撃を、

閃光の槍、《光塵槍・如意》がないただの金属の棒である先端で。

銀は驚いた表情で立ち止まって、防御のためか両腕を上げた上段ガードの構えをとっていた。

魔力の攻撃である《光塵槍・如意》は同じ光属性であるため、銀の憑依魔術で迎撃、あるいは無属性魔術で防げたのだが、ただの金属の棒である如意は魔力攻撃ではない。完全に予想外なことだったのだ。

常時の銀であるならば、光の槍と同じように鉄鋼手でその如意を弾き飛ばしただろうが、不意の一撃だったために彼はガードを失ってしまったのだ。

しかし、それに気づいたときはもう遅い。

ガンと金属同士の衝突音の後、シンラはガードをした銀を押しつけてよろめかせた。

そうして、両端のもう一方、光の槍を装着した如意を銀に向けた。

「伸びろ《如意》」

超至近距離の銀に向かって光の槍が伸びた。

その瞬間、

銀の姿がブレた。

一瞬遅れて如意が銀を貫くが、そこには誰もいなかった。

「なんだ!？」

シンラは周囲を見渡したが、どこにも銀の姿は見えなかった。

耳が痛いほどの沈黙の中、彼は自分の汗が流れる音が聞こえたような気さえした。

その時、ギリッと金属の軋むような音が彼の背後から響いた。

「チエックメイト、というヤツかな」

振り返る前に、銀の声がシンラを抑えた。

それと同時に冷たい鉄の感触が彼の背を押した。

シンラはふうつとどこか呆れたように息を吐いた。だが、それは極度の緊張から解放された安堵のためなのかもしれない。

「参りました」

シンラが敗北を認めたことを受けて、ヘルは試合終了を宣言した。いつの間にか集まっていた観客たちが歓声を上げた。まるで二人の健闘を称えるかのように、惜しめない拍手と共に握手し合う二人に送られた。

「お前、やっぱり負けず嫌いだな」

シンラの一言に銀は照れたようにはにかんだ。

天秤たちの暗躍 2 1 (前書き)

この小説はフィクションです。

今回から分けてちょっと投稿回数を増やしてみようかと (^| ^ ;)

はい。姑息ですm (^ > (^ m

????????

興に乗った歓声が、地下の試合会場に響き渡る。

会場を見続ける軍人たちの中、黒い鞆に入った刀を持ち、茶外套を羽織った青年が顔を伏せ笑っていた。

彼はシンラに対してはこう名乗った。

六月と。
ムツキ

(シンラ・ミトセ、いや、水戸瀬森羅か)

やっぱり面白いなど、その口が動いたようだった。

「どうしたんですか？アツセルさん？」

彼の隣で、周囲に流されたためか立ち上がって歓声を上げていた青年が話しかけた。

アツセルという、六月のもう一つの名を告げて。

「真左人、ここでの俺は六月だ」

藤原真左人は少しシュンと肩を落としながらも、唇を突出し子供っぽくすねて見せた。

「なんで、アツ、……六月だけ別名があるんだよ。俺たちには普段通りでいいって言いやがったくせに」

「文句言わないの」

「イタツ」

真左人の隣、稻妻のように青白い髪を払って橋口瑞樹は彼にデコピンを見舞った。

「何すんだよ」

「子供みたいにすねるから叱ってあげただけ」

「な、なんだと」

売り言葉に買い言葉といった具合に二人は睨み合い、今にも掴みかかるうと足に力を込めていた。

「ああ、わわわあ。や、やめましょーよ」

さらに奥の席に座っていた旧欧州人のリーナがあわあわとしながら、瑞樹の袖を申し訳程度の手で掴んでいた。

その袖は若草色。日本の正式な軍服だ。

彼らは、アッセルも茶外套の下に来ているため、五人とも同じ服装だった。

「……（キラキラ）」

ちなみに最後の一人である黒と灰色の異色の両目を持つ少女、アイナ・レフェルトは目の前で行われていた魔術試合を繰り広げた二人に夢中だった。

リーナは本当にどうしてこうなったんだろうと昨夜の寝台特急を下りた時を思い出した。

それはもうダイナミックな途中下車だった。

リーナの目覚めは比較的爽やかだった。

アッセルが個別に部屋を取ってくれたため、彼女は昨夜こっそり開かれた会議の存在など露と知らず、のんびりとこの後京都観光でもしたいな〜とぼんやりと考えていた。しかし、アイナは朝が非常に弱く、起こすには苦労するんだろうけどと苦笑いする。

支度を終え、アッセルに指示されたブレザー式の学生服を着た彼女は扉から出て、まず見たものは。

軍服を着た上に何故か荷物まで持ち出したアッセルたちだった。

瑞樹の胸のポケットからゴールデンハムスターが顔を覗かせ、

真左人の髪の毛を引っ張りながら浮遊する妖精のような《薫風》もその場にいたのだが、魔術師ではないリーナがそれに気付くことはなかった。

「え！？何で私だけ違うんですか!？」

自分の制服だけ浮いているような気がして思わずリーナはアッセルに詰め寄った。

「いや、君まだ学生だろう？ だったら学生服が自然な格好かと思っ
てな」

答えたアッセルは、まず最初にそんなことを言うものなのだろう
かと思っていたが、まあどうでもいいかと流した。

「私だけならそうですけど、あなたたちと一緒に行動したら逆に不
自然ですよ！」

そうか、とアッセルは生返事を返し、歩き出してしまった。

「リーナさん。着替えるとしても後でお願いするよ」

軽く胸元を開き、指摘されない程度に着崩した眞左人が耳元でそ
っと囁いた。

「あ、後って言われても」

距離近いから！と内心で焦りながらリーナは努めて冷静に振る舞
った。

「今は、アッセルと一緒に行く？」

瑞樹は苦笑いをしながらとあるものを、場所を指さした。

そうして指さされたのは車両の窓、の外。

ゆっくり十秒かけ、三人の顔をそれぞれ見つめ、大きく息を吸っ
た。

「いやあああ、この人たち飛び降りるつもりよ　！」

乗客が乗務員に届くようにリーナは全力で叫んだつもりだったの
だが、その声に反応したのは元人災警官隊の二人だけだった。

腕を取ってその動きを止めたのは瑞樹。口を押さえたのは眞左人
だった。

「うっうっ！—ほほははっへふほ（どこ触ってんの）！？」

「どこ触ってんのよ　　！！！」

何故か瑞樹が怒鳴り声を挙げて、モデルガンを抜いた。

ぎよつとして眞左人は手を離したが、既に遅かった。

「ぶつ飛びなさい！！磁力波！」

詠唱魔術により、瑞樹の魔術が発動した。

磁力波という魔術はルナタワーの一軒で彼女が使った『磁力弾』と同種の魔術である。その本質は金属に磁極を付与させ、そのまま吹き飛ばすことだ。

この二つの違いは範囲の違いだ。『磁力弾』は指定した一か所の金属にのみ磁極を付けるものだが、この『磁力波』は彼女の前方全ての金属を吹き飛ばす。

それは、小銭やデバイスたる小太刀を持つ眞左人も、黒い鞄に入った刀を持つアッセルも、大きな金属の箱たる列車さえも例外ではない。

アッセルは鞄に納めた刀を突き刺すように扱い、見事に受け身を取った。しかし、どんつ！と壁に激突した眞左人は受け身も取れなかったはずなのだが、何故か痛がる様子はなく、床にしがみ付いて次に来るであろう衝撃に備えていた。

ギギギギギギツツツ！！！！

不快な音を立てて、床が斜めに傾いた。

「Hey！！^{おい}橋口！今すぐ魔術を止める！！！」

アッセルが言うまでもなく、瑞樹はそのために行動をとっていた。逆方向に、今度は逆の磁極の弱い磁力を放って車体を引きつけ、ゆっくりと車両を地面と平行になるまで下ろした。

その場にいる全員がホッと胸をなでおろして、

「助かったあ〜」

その中でもリーナの脱力の具合は群を抜いていた。

彼女の場合は魔術に最も慣れていないためなのだろう。もっとも他の三名が荒事に慣れ過ぎている可能性は否定できないが。

「だよ。あたしに感謝してね」

あまり大きいとは言えない胸を張る。

元はといえばお前の所為だろうかとジト目で眞左人は瑞樹を睨んだ。が今のところ何も言う気力はなかった。

「ありがとうございます」

ぺたんと床に座り込んだままの彼女はこの騒動の元凶が誰かを完全に忘れていたようだった。

その時、威張る瑞樹に残りの二人が何も言えなかったのは、出てきた個室の客人に説明をして回っていたため、文句を言う暇がなかったのである。

後でしっかりと瑞樹は二人に説教を喰らった。

早朝からの騒ぎで起き出した乗客たちが静まるまで待った一行はようやく行動を開始し始めた。

「しかし、本当にこの娘、起きなかったな」

アッセルは苦笑を漏らして負ぶった少女の顔を見た。

アッシュブラウンの髪から仄かにシナモンの香りが漂ってきたが、特にアッセルは気にせず三人に顔を向ける。

眞左人は瑞樹に睨まれ、アッセルが女性にそんな役目をさせるのは男として忍びないと言ってアイナを背負うことになったのだ。

（しかし、よく脱線しなかったな）

片輪がレールから外れていたはずなのだが、何故か元の通りに走っているのだらうと眞左人は首を捻る。

しかし、他の面々は誰も気にしていないようだったので、日本人らしく気にしないことにした。

「それでどうやってここから出るんですか？」

もう覚悟ができたのか、リーナは落ち着いてアッセルに尋ねる。

「さっきも言ったようにこの窓から」

あっさりと回答するアッセルに頭痛を感じてリーナは眉間を押さえる。

何この人馬鹿なのとても言いたげな表情で瑞樹を見て、説明してくださいと言外に頼んだ。

「えっとね、……、アッセル、どういう事なの!？」

分からないの!？とリーナは心底驚愕した。

瑞樹に説明を求められたアッセルは面倒臭そうに頭を掻いて、

「ここに、人数分の紙がある」

そう言って彼は緑色の付箋ほどの大きさの紙を茶色の外套の中から取り出した。

(あの人の外套ってものを入れるところだったんだ!)

とリーナは少し見当はずれの感想を抱いていたが、黙ってその話を促した。

「この紙には祈の魔法陣が描かれてる」

眞左人たちは旧人災警官隊テロルキバズの一員で、魔法陣という稀有な魔法発動法を使う少女の顔を、リーナはその少女がやって見せたルナタワーの上層部の建物だけを移動させた光景を思い出した。

見せつけるようにその手の紙をペラペラと振りながら、

「こいつは無属性の魔力を流せば自動で空中移動の魔法陣が発動できるようになってる」

眞左人と、瑞樹にその緑の紙を配り、リーナにアッセルは近付いた。

「リーナは魔術師じゃないから、俺がこいつを発動する」

アッセルはアイナを背負ったまま、リーナに窓を示した。

「窓へ」

「は、はい」

リーナの顔が仄かに朱に染まり、鼓動が少し早まっていた。

(な、何でドギマギしてるの私?)

彼女が見てきたアッセル・リーヒニストは少々無気力気味で、いつでも掴み所のない言動を取っていたために忘れていたが、ルックス的には上の中といったところだ。

普段の態度や雰囲気、言動のためリーナはあまり意識していなか

ったのだが、こうして近くで見ると

それにその手はちよつとごつごつしていたが、温かった。母親の胎内を思わせるような温かさで、じんわりと彼女の体を駆け巡る。

ぼんやりとしている内にアッセルは無造作に窓を開き切った。

余計にアッセルの手の温度が意識されてリーナは少し頬を朱に染めた。初々しい反応だが、事実彼女はこういう接触の経験があまりないのだった。

アッセルは何を小声でつぶやくと緑の紙を一枚摘んで、それを窓の外へと向けた。

紙がビチビチと音を立て、風によつて波を立てていた。

そして、その指を離し、紙を風に流した。

(ポイ捨て?)

またしても違う点に注目する彼女は無意識にその紙を目で追っていた。

すると、突如蒼天を思わず青い光を放った。

目を細める彼女は開いてない窓から外を覗き込んだ。

「……きれい」

走る列車に並走するように、そこには青白い光を放つチョークで描かれた魔法陣が浮かんでいた。

それはさっきの紙から切り取られ、さらに大きさも人が乗れるほどのサイズにまで大きくなっている。

「そこに乗ってくれ」

思わずアッセルの顔を凝視してしまう。

「私、操縦とかできませんけど?」

「大丈夫だ。操縦も全部俺がしてるから」

気の抜けたように笑うアッセルに不安を感じなくてもなかったのだが、思い切つてリーナは窓の向こうへ思い切つて飛び出してみた。慣性の法則に従い思いつきり後ろの方に追いやられることもなく、魔法陣はリーナを受け止めた。

列車と同じ速度で動いているならば暴風が襲いかかるはずなのだ

が、リーナはそよかせ程度の風しか感じなかった。

（魔術つてすごいんだな。ヘルもこんなふうにいるんなこと
きたのかな）

今は遠い親友の顔を想像しながら、広い曙の空と風景を魔法陣の上から眺めていた。

一方魔術を知る者たちはといえば、

「祈つてすごいんだね！」

あたしも行くわよー！」

と感心しながら瑞樹はさっさと起動した魔法陣に乗って、リーナを追いかけて行ってしまった。

「……」

「……」

残された二人の男は沈黙して、視線をぶつけ合っていた。

アッセルは飄々とした笑みを湛えて、眞左人はどこか懐疑的な瞳をしていた。

アッセルはアイナを背負いながらそうしているのだから、異様な雰囲気醸し出している。

「……一つ聞きたいんだが」

眞左人は自分の緑色の紙を示した。

「発動者本人が不在でも魔術を使用できる技術が存在したのか？」

眞左人の務めていた人災警官隊は最先端の技術を広く取り入れていた。それは科学技術だけではない、魔術に関する想像^{イメージ}魔術根源説

事実、眞左人自身が、シンラの発表した論である想像^{イメージ}魔術根源説に従った挙動^{アクション}魔術も使用している。

だが、そんな職場について先日までいた眞左人でさえ、アッセルが使ったこの技術は未知のものだった。

……もつとも、彼と同じ職場にいたはずの瑞樹は気にした様子もなく、列車の上で楽しんでるのだが。

「事実ここに在るじゃないか？これ以上の存在証明が必要なのか？」

戯れるようにアツセルは肩を竦めた。

「……あんだ、一体何もんなんだよ？」

閉口し、悔し紛れに眞左人は言った。

「異世界人」

これ以上はない真面目な顔でそう言った。

思わず眉間に指を当てる。

いくらなんでも常識外れすぎるが、アツセルは眞左人たちを組織に引き込む際も自分を異世界人と称していた。

他の元短員たちは何かの冗談としか受け止めていないようだが、そんなことを言い続けられれば彼が頭の回路のどこかが焼き切れてしまった人間と評価されかねない。

そんな少しの心配を胸に、眞左人は彼を窘めようと思いついた。

「あんだ、まだそんなこと言ってるのかよ？」

「事実だからな」

「あんだ、頭のどっかに変なムシでも湧いてるんじゃないのか？」
断言したアツセルを一刀両断するかのような言葉を吐き出してしまふ。

正直な感想を思わず漏らしてしまった。一応この男は今の上司にあたるはずなので、言った直後に眞左人は脂汗が滲むのを感じた。

「ははは。事実を言っても信じてもらえないのは哀しいことだな」

全く哀しそうな雰囲気を感じさせることもなくアツセルは笑った。

内心眞左人はホツとした。今の、言いようによればアツセルに飼われているこの状態で、この男を敵に回すのは得策ではない。

「まあ、万に一つあんだが異世界人だとして、その技術はその異世界のものだったりするわけか？」

半ば諦めた眞左人はさつきとは違い好奇心でアツセルの話を聞きたいと思った。

「ああ、そうだな。でも、この世界でもあと二週間で考案される技術だから、別に今俺たちが先走りしたって……」

「ちよ、ちよっと待て！」

「アツセルの言葉に、看過できないものがあつて眞左人は叫んだ。」

「あと二週間つて、あんた、未来の事が分かるのか」
「あちゃーとアツセルが顔を顰める。」

そして首を振り、唇だけを動かす。

もし、眞左人に読唇術の心得があれば、その時アツセルがこう言つたのを認知しただろう。

『仕方ない。干渉限界だ』と。

だが、眞左人はアツセルがはぐらかそうとしていると勘違いして、彼の肩を掴み近寄つた。

「おい、何とか言えよ！もし未来が分かるんだつたら、どうしてルナタワーの事件を放置したんだよ！もし、未然に防げたら、どれだけの命が……」

その時、アツセルの顔を見ていた眞左人と彼の眼が合った。合つてしまった。

彼の漆黒の瞳は、蒼天のようにも、あるいは蒼海のようにも揺らめく蒼に染まっていた。

「Out of mind」

歌うような声と共に、蒼い光が眞左人の意識を呑み込んだ。

「あれ？……俺は一体？」

気が付くと眞左人は今にも魔法陣に向かって飛び出そうとしているアツセルを見ていた。

「ぼー」としてると置いてくぞ」

アツセルはそう言い残して、さっさと窓の外に向かって飛び出してしまった。

「ちよ、待つてくれよ！！」

眞左人は緑の紙に魔力を流し、展開した魔法陣に飛び乗りアツセルたちの後を追つた。

こうして、正裁の天秤の一同は寝台特急を文字通り途中下車した

の
だ
っ
た。

天秤たちの暗躍 2 2 (前書き)

この小説はフィクションです。

コメディ (特にラブ要素) が、……足りない

????????

魔法陣に乗り、寝台特急よりも速く京都へ彼らは飛んで行った。魔法陣はどうやらその中は完全に周囲から切り離されているらしく、座ることも寝そべることもできた。

アッセルは未だに熟睡するアイナを横に寝かし、手元で何やら凶示魔法らしき宙に浮かぶ凶形を操作していた。

どうもこの魔法でアッセルが全ての魔法陣を操作しているらしく、残りの三人は何もすることはなく、夜明けを迎える京の山々を眺める。

「これからどこに行くんだ？」

眞左人はそれにも飽きてしまい、アッセルに尋ねた。

「軍が京都で俺たちを待ってる。一応場所は指定されてるが……」

「いや、そこまで正確な情報はいらないんだが……」

そうか、とアッセルは興味なさ気に、といつてもおそらく事実興味がないのだろう、呑気に欠伸を一つした。

やっぱ、なんか調子狂うんだよなと眞左人は肩を竦める。

「俺たち、何しに行くんだっけ？」

「えーと、……確か人探しでしょう？」

瑞樹は昨日、アッセルが見せたあの写真の少女を思い出しながら言う。

「いや、それはあくまでも序でだ」

「え！？そうなのか？」

アッセルから話を聞いていないリーナは首を傾げていたが、三人は気にすることもなく話を続ける。

「何のために俺たちが軍服を着てると思う？」

「それは……、軍に紛れるため？」

おずおずと瑞樹が答える。

「当たらずとも遠からず。俺たちはこれから軍に協力する」

「協力つてどういうことだよ？」

射殺すような鋭い眼光と深淵まで響くような低い声で真左人は尋ねた。

リーナどころか付き合いの長い瑞樹までが恐怖を感じるような雰囲気を感じた彼に、やはりアッセルは飄々としたように笑う。

「大したことじゃない。陰陽師と戦うだけさ」

「……陰陽師？」

「陰陽師って、安倍清明とか？」

瑞樹は日本で最も有名であろう陰陽師の名を挙げて確認する。

魔術師というフィクションのような存在が一般化した現在でも、陰陽師などと言う存在は未知のもので、普通そんな存在を口に出さなければ疑いたくもなるものだ。

「……多分、お前の想像してるような陰陽師は実在しないぞ」

「じゃあ、どんな奴らなんだ？陰陽師ってのは？」

「長くなるぞ」

それでもいいのか、という言葉は言わずともその場のものは全員心得ていた。

「????？」

リーナという例外を除いて、だが。

「陰陽師は歴史上のものと、今魔術師と敵対しようとしてるものは全く違う」

歴史上彼らは西洋のシャーマンや風水を用いた占い師のような役割に加え、曆を読む（かつては太陰曆だったため、月の満ち欠けなど星を見ることは重要だった）役割もあったという。

ちなみによくフィクションで描かれる魑魅魍魎を討伐する陰陽師については、それは俺の知るところじゃないとアッセルは何故か威

張って返答した。

「だが、これから出会うであろう陰陽師は、魔術師とそう変わらな
い。大雑把に言って魔術みたいな術を使うそうだ」

「ウソだろう?」

嘲笑じみた鼻笑を混ぜて眞左人は言い返す。

「この世は物理法則で縛られている。故に人の思うように万物を
変化させるためにはその出力が必要である」

グラム・ジュリアの有名な論にもあるじゃねーか。俺たち魔術師
は魔力をその出力にして魔術を発動することができる。陰陽師たち
は一体何を出力にそんな力を使うって言うんだ?」

「これが唯一歴史の陰陽師と現代の陰陽師に共通することかもしれ
ないがな。奴らは風水の地理的要因から力を引き出すんだ」

前を見ているアッセルには、後ろを飛ぶ眞左人の顔が見えなかつ
たが、おそらく眉を顰めて首を捻っているのだろう。

「その引き出した力は一体何なの?」

「単純だ。星の力」

瑞樹の質問に対してアッセルは淡々と返した。

「星?」

意図せず瑞樹と眞左人の声が重なる。

「そう星。まあ、陰陽師たちはそんなこと意識してないだろうけど
な」

何故そんなことをお前が知っているのだと二人してその背を半眼
で凝視してしまう。

まあ、どうせ「異世界人だから」などと言われはぐらかされるの
だろうと二人は今しばらく我慢することにした。

「ガイア理論とかいろいろ組み合わせるとそういう結論に行きつく
んだよ」

ガイア理論とは地球という星と、その中の生物や環境を一つの大
きな生命とみなすもので、それぞれが関係して調和のとれたシステ

ムのように機能するという仮説である。ガイア仮説とも呼ばれる。二人が理解したのかアッセルは様子見たが、考え込んではいなかったので話を進める。

「というよりも、そうと結論付けざるを得ない。俺も実際に見たわけじゃないが、陰陽師ってのは本当に何も無いところから炎を出したっていうんだよ」

実際魔術師が見ても、魔力は欠片も感じられず、また数値化で見ても魔力らしき数値はなかったと言う。

だが、確かに陰陽師は何かの力を引き出して、具象を起こしていたのだけは分かったという。

「……なんかすごいのと戦うのね」

瑞樹は実感がないからか、他人事のように話していた。

「Not much。タネも仕掛けもあるんだ。奴らは条件を整えないと力が引き出せない。例えば東西南北に四方神の模った置物を置かないと力が使えない。あいつらは下準備に時間が掛かるんだからな」

アッセルは面倒臭そうに頭を搔く。

「ただ、俺たちはあいつらのホームに行くんだ。その手間もあつてないようなものかもしれないな」

アッセルは誰にも聞こえないようにそっと呟いた。

彼らが京都に到着した時、東の山の頂上に太陽が鎮座しているように太陽の弧と山の先端が重なっていた。

空から見る京都は四方が山に囲われていて、典型的な盆地の地形をしていた。街並みは大通りだけを辿れば確かに碁盤の網目のようだった。

アッセルは町を見渡し、明らかに霧囲気から浮いている黒いワゴン車を見つけた。

十台から二十台ほどぞろぞろと大通りを進むそれらをアッセルは追いかけるように魔法陣の速度を落とすように凶示魔術を調整する。

「あれは？」

眞左人は魔法陣から身を乗り出すようにしてワゴン車を指さす。

「軍の車両だよ」

「何でそういうことが分かるんですか？」

些か退屈していたのか腕を頭上に伸ばしていた瑞樹が言う。

「事前情報かな。軍の中にも俺たちの協力者もいるから、そいつに聞いた」

「……なんかいろんなところに仲間がいますね」

「まあな。各々勝手にやってくれてるさ」

アッセルはどこか皮肉っぽく笑ったが嬉しそうでもあった

加入当初はアッセル一人の才で成り立っているようであったが、
どうやらそういう訳でもなかったらしい。

それは、アッセルの、正裁の天秤の意思に賛同した人々が努力した結果なのだろうか。眞左人はふとそんなことを考えていた。

「……ていうか、場所を指定されてるんじゃないんですか？」

「ああ、そうだ」

「だったら、何でそこへ行かないんですか？」

「くつくつく、誰が馬鹿正直に指定された場所に行くものか」

あくどいと言うよりはイタズラする子供の様に笑いアッセルは言
つてのけた。

「……いいんですか？」

眞左人は鈍い頭痛を感じて眉間を指で揉み解した。この人何がし
たいんだよ。

「覚えておけ。相手が用意した場所に出向くのは、信頼できる相手
じゃなければ止めておけ」

彼は息を呑むような迫力ある真顔で言う。

「軍は味方じゃないのか？」

「どちらでもない。だからこそ油断してはいけないんだよ」

「そうか……。でも、俺たち軍に協力するんだろ？最初からそんな警戒心丸出しで、信頼されないんじゃないのか？」

もしも信頼されなければ、自分たちのようなこの馬の骨とも分らない者たちが、今陰陽師とごたごたを起こしている軍に協力させてもらえるとは思えない。むしろ敵かと疑われても仕方ない。

しかし、アッセルは不敵に微笑んだ。

「そうならないように手は打ってある。軍の上層部のあいつらが無視できないようにな」

眞左人はくつくくと悪役みたいに笑い始めたアッセルの背を見て、重い溜息を吐いた。

そんな時、ピピピと電子音が鳴った。

それはアッセルの携帯の音だった。

アッセルは茶色の外套の下から携帯を取り出し、通話ボタンを押した。

一方その少し前。

アッセルに命じられ九州での科学実験を視察していた白葉孝広は宿を抜け出していた。

木造建築の小さな民宿の振りをした海底都市への入り口を背に彼は、手元の地図を見る。

それは研究施設のお披露目の際に渡されたもので、海底都市の施設の地図だ。

「数値化」

孝広は呟き、魔術を発動させる。

シンラも多用する数値化だが、孝広のそれは特に遠距離の座標を数値として認識できる。

それは空間に関わる界属性の魔術を使う孝広にはなくてはならない魔術だ。（もっとも彼は目に見える範囲なら問題なく魔術を使えるのだが）

目指すは海底都市の西側に位置するFブロック。そこでは主にバイオ技術について研究しているという。

胸の内ポケットにしまった白く細長いタクトを取り出す。
そして、海面に向かってそれを振った。

影縫いという魔術はタクトを移動する位置に振ることで発動する。
しかし、タクトを振るのはあくまで方向を自身に強く認識させる
ためだ。

彼の使う挙動魔術とは一つの行動に一つの魔術の発動を自身に刷
り込み使用可能となる魔術発動法である。
その挙動を自身に刷り込む段階で、魔術と挙動に関連性を持たせた
方が刷り込みにかかる時間は短縮される。

例えば藤原真左人の加速は小太刀を抜くと行動から、物事の起点
という点と加速の始まりを共通点として刷り込んでいた。

数値化で見た座標にタクトを向け、彼は空間と空間を繋ぎ、一瞬
で飛んだ。

タクトを懐に収め、孝広は「解除」と小さくつぶやいた。数値で
表せられていた視界が元の光と色の世界に戻る。

(どうも数値化は慣れないな)

やはり普通の方がいいなと思いつつながら孝広は周りを見渡す。

そこは廊下で、左右の道は緩やかにカーブを描いて、天井は異常
に高かった。

(そういえばここはドームのような形だったな)

地上と行き来する際に何度も見たことだが、この海底都市はブロ
ックごとにドーム状の建物が七つある。中央には電力や都市内の酸
素の供給など都市の設備をコントロールするAブロックがあり、そ
の周りを残りのBからFブロックが囲んでいる。それぞれのブロッ
クには隣接するブロックに通じる通路があり、それは大きな六角形
を模っている。中央のAブロックだけは全てのブロックに通じるよ
うに六つの通路が作られている。

孝広は天井を見上げた。

半透明のドームの天井から漆黒の宇宙のような海中の様子が覗け

た。太陽の光が届かないほど海底でもないはずなのだが、太陽が顔を出さず月も沈んでいるこんな早朝では星の光しか空にはない。その弱々しい光ではここまでは照らせないのだ。

次に壁を見る。

片方の壁には覗き穴のような窓が作られていて、そこからは海底の様子が見る事ができた。

反対側にはそのようなものはなく、どうやら個人の研究室らしく、名前の書かれたプレートがあった。

ただ、何処を見ても扉らしきものも、認証装置のようなものもないので一体どうやって部屋に入るのか孝広には見当もつかなかった。(……とにかく探すか)

文句の言っても仕方ないので、孝広は円の端を歩くような気分を味わいながら廊下を進んだ。

外周がどれほどあるのかは分からないが孝広の予想よりは早く目標の研究室の前に辿り着いた。

やはり扉も何もなく、孝広よりも頭一つ低い位置に掛けられたプレートには『新島四音』と書かれていた。

(新島、四音……。間違いなさそうだな)

事前にアッセルに指定されていたことは二つ。この研究施設の研究内容の確認と、この研究室の主、新島四音という女性に正裁の天稗としてコンタクトを取ることだった。

(一体何を考えているのか知らないが……。こんなことをしているのか?)

もちろんよくない。

孝広は元が付くとはいえ警察組織の、それも一つの部署を任されていた人間だ。まさかその人物がこうして盗人のようにこそそそ忍び込むことになるとは夢にも思わなかった。

(すまん。美玲……。父さん、犯罪者になっちゃった)

今は遠き愛娘の無邪気な笑顔を思い出しながら、それでも部屋の中へ移動するため界の魔術を発動させる。

数値化によって壁の厚さなどを計算に入れ、彼は座標から座標を移動する。

移動した先の部屋は生活臭のしない、真っ白な部屋だった。

(明かりがついている?)

慌てて周囲を見渡したが、人影はどこにもなかった。

(……留守?)

しかし明かりはついている。落ち着いて部屋を見渡してもやはり誰もいなかった。

部屋は壁紙も床も天井も白く、さらにテーブルも可動式の椅子などの家具もまた全て白に統一されており、病院のようにどこか無機質なイメージを与える。

しかし、辺りに散乱している服や装飾品、本やルーズリーフ、資料類。フラスコや試験管などがその印象をぶち壊していた。

(これは、つまりこの部屋の主がそういう性格だと言うことか)

無頓着、あるいは一つの事に執着すると他の事は気にしないのだろうか。

少し奥には更なる扉があった。study office と

プレートが掛けられているため、どうやらその先は研究室らしい。

突如として扉が開いた。

そこから髪をターバンのようなもので保護し、マスクで顔を覆い、白衣を身に纏った細身の女性だった。

意表を突かれた孝広だったが、落ち着いてすぐにでもタクトに手を伸ばせるように構えを取った。

(さすがに騒がれでもしたら厄介だ)

「こんな朝方から一体何の用なのかしら?」

しかし、その女性はマスクを取りながらむしる余裕に満ちた姿で微笑みながらそう言った。

天秤たちの暗躍 2 3 (前書き)

この小説はフィクションです。

天秤シリーズが長引くとは思わなんだ(笑)

その女は孝広に席を勧め、白衣や手袋などを脱いでいった。

白衣の下にはジーンズに白いカッターシャツで、サイズが大きめの
なのか、シャツは鎖骨や肩が少し見えるほどで、ジーンズに至つて
は腰からずれていた。シャツの端が出ているため見えないが、おそ
らくきわどいラインまで見えるのだらう。

(つて、何処を見ているんだ俺は)

ちよつと頭を抱えた白葉孝広(25歳。妻子持ち)であった。

白いテーブルの上に湯気を立てる紅茶を置かれて、いよいよ孝広
は困惑を深めた。

(普通こんな事態が起これば騒ぐなりするのだが、どうしてこの人
は、こんなに落ち着いていられる?)

まさか自分の行動が事前に知られていたわけでもあるまい。だと
したらこの女、それだけ物事に無頓着ということか?

(それこそ、まさかだ)

体と心は切っても切れないものだ。そして、体には生命の危機に
反応する。

怪しい男が突然現れたのだから、少しでも危険を感じるだらう。

(だが、それに伴う行動が無い。だとすれば……)

優雅に紅茶をすする女性を睨み付けた。

「そんなに警戒しないでくださいませんか? 本来ならわたしがあなた
を警戒するようなものでしょ?」

「そうなっていないから警戒してるんだよ」

脱力する孝広を尻目に女は優雅に紅茶を啜る。

もう早く本題に入ろうと気持ちを切り替えて、孝広は確認する。

「一つ尋ねたいんだが」

「先に名乗るのが礼儀ではなくて?」

ぐつと言葉に詰まる。

どうにもこの女は苦手だと内心、顔を歪めた。

「俺は……」

少し孝広は考え込んだ。ここで本名を言うべきではないだろう。

「俺は正裁ジャステイバランサーの天秤という組織からの使者だ」

無難にそう済まそうと名乗りはしなかったのだが、どうやら女の機嫌に障ったらしく、女の眉がピクつと動いた。

「わたしは名乗るのが礼儀って言いませんでした？ 言いましたよね？ 聞こえませんでした？ 聞こえましたよね？」

異様に迫力に満ちた表情と剣幕で思わず孝広は立ち上がってタクトを抜くところだった。

(……仕方ない)

「……リーフと名乗っておく」

白葉の葉からリーフと取った。少し安直だったかもしれない。

「OK！リーフ。それで、あなたは何をしにこのわたしの研究室へやってきたの？」

「わたしの研究室、ということとは、あんたが新島四音か？」

「ええ。わたしがこの生物学セクターの責任者、新島四音、その人よ」

無駄に立ち上がり、無駄に胸を張って、無駄に甲高に四音は自己紹介した。

「……分かったから、落ち着いてくれ」

咳払いをしながら四音は椅子に腰かけ、再び紅茶を啜った。もしかしたら恥ずかしかったのかもしれない。

「それで、あなたは正裁の天秤として何をしに来たの？」

「……我々のリーダーから直々に手紙を預かってきました。あなた宛てに」

懐から茶封筒を取り出し四音に手渡す。

それを受け取り、四音は封を破り、手紙を読み始める。

手持無沙汰だったため、孝広は手を付けずにいた紅茶の一口飲んだ。

ふと彼は手紙を読む四音の表情を窺った。

それは彼の癖というか、習慣のようなものだった。他人の表情や行動に目を配らせるその習慣は、彼が人災警官隊の隊長を務めてから得たものだった。

四音はある程度普通に読み進めていたのだが、数秒間だけその動きが妙だった。

(目には動揺の感情、……か)

ほんの少しだけ目を見張るような瞼の動きから孝広はそう判断した。

彼が手紙の内容を知っていれば、読むまでにかかった時間からどの言葉で動揺したのかまでも暴けるのだが、生憎孝広にはその内容は一切知らされていない。

「なるほどね」

興味深そうに彼女は微笑み手紙と孝広の顔を見比べた。

「あなたはこの手紙に書いてること知らないの？」

「知らない」

ペラペラと手紙を振る彼女に対し、彼は正直に答えた。

「ふ〜ん。そうなんだ」

何だか視線に動物に対しての憐れみのようなものを感じた。

(あの手紙、そんなに重要なことが書かれてたのか?)

しかし、孝広にとって重要なことはニューヨークリアの実験についての事だけだ。アッセルが何を隠そうが、彼にとって重要なことなればどうであろうと構わない。

「教えてあげるわ。あなたたちのリーダーは、わたしが個人的に所属する組織にコンタクトを測るためにあなたをここへ送ってきたのよ」

「あんなたちの組織？」

「ええ。あなたたちの組織、正裁の天秤とは比べ物にならない大きな組織よ」

「そうなのか」

正直興味はなかった。

「……動揺しないわね」

「する必要があるとは思えない」

「わたしたちに媚を売りに来たとは考えられないの？」

不敵に微笑む四音。自信に溢れたその眼は孝広を見定めるように、じつと彼の顔を窺っていた。

「全く考えられない。そんな可能性は皆無だ」

アッセル・リーヒニストは、それはもう最悪なリーダーだ。敵でない分余計に厄介である。時限爆弾のような男だが、それでも一つ言い切れることがある。

それは、組織の事を一個人で動かすような馬鹿ではないということだ。

アッセルは時間がないのにもかかわらず、ルナタワーの住人に生き延びるかどうかの選択権を与えた男だ。自身もギリギリの状況であるにもかかわらず、彼は死を選ぼうとしたあの老人を諭すこともした。ただ選択をゆだねるだけでなく、正しい道にも導けるような人間だ。

もしこの四音の所属する組織に本気で近づこうとするなら、何かしらの相談なりはするだろう。

それに正裁の天秤という組織が、この海底都市の技術のプレゼンに潜入できるまでに成長したのは彼や元々の構成員たちの努力の成果だろう。

それを無視して勝手に動かすほどアッセル・リーヒニストは屑な人間ではないと孝広は確信していた。

「ふん。信頼してるんだ」

信頼はしていないのだが、ここで敢えて否定する必要もなかったので無言を貫く。

「まあ、いいわ。とにかくこの手紙の件は了解したから、そう伝えておいて」

「わかった」

「また、何かあったら、あなたが連絡役になるのかしら？」

「さあ？」

ぶっきらぼうにそう言い、孝広は内ポケットからタクトを抜き、振るった。

移動する間際、怪しい笑みを浮かべていた四音の姿が見えた。

No. 4

四音は改めて自室兼研究室を見渡し、誰もいないことを確認してテーブルの下へ身を屈めた。

「おいで」

言葉と共に掌を広げ手を伸ばす。すると、リーフと名乗った男の座っていた椅子の下から、手のひらに乗るほどの動物が駆け寄ってきた。

「ゴロー。良い子ね」

それは綺麗な茶色の毛並みを持つゴールデンハムスターだった。

彼女はゴローと呼んだハムスターの頭を愛おし気に撫でた。

撫でられたゴローはくすくすうたたそうに目を細め、その感触に身を任せているようだった。

「さあ、それじゃ、あつちのゴロウ君にも伝えないとね」

スキップするように軽やかな足取りで、彼女はベットのすぐ近くにある固定電話に歩み寄った。

孝広が浜辺へ戻ってきた時には、太陽が水平線と交わり、海面の揺らめきと共に光を彼の眼に届けた。

（取り敢えずミッシェンコンプリートってところか）

アッセルがどんな意図をもってこの依頼を頼んだのかは分からないが、説明していない以上、文句は付けられないだろう。いいきみだ。

これはアッセルへのささやかな嫌がらせだった。

彼は懐から写真ケースを取り出した。

そこには彼の家族の写真が入っている。

（俺は、ただ、守りたいもののために）

彼は彼の理由で正義の天秤にいる。

それは家族のため。そして、部下たちのためだ。

例えば世間で死亡扱いだろうと、国家の闇に追われる存在だろうと彼は出来得る限りのことをするだけだ。

そのためにはこの組織で、この国を良くするように活動するべきなのだろうか。

答えは出ぬまま、それでも日は昇る。

一応報告ぐらいはしておくかと携帯を取り出す。

呼び出し音が淡々と、朝日の中に鳴り響いた。

アッセルは茶色の外套の下から携帯を取り出し、通話ボタンを押した。

「アッセルだ」

眞左人や瑞樹に聞こえないように、可能な限り声を小さくして彼は話し始めた。

『白葉だ。例の件、片付けておいた』

「そうか。ご苦労さん」

本当に感謝と労いの意を込めて言葉にしたのだが、孝広は重苦しそうに溜息を吐いた。

『……それで、俺はいつまでここにいればいいんだ？』

「そうだな。……プレゼンはもう終わったのか？」

実のところアッセルが見て欲しかったプレゼンはニュークリアの事だけではなかった。もう一つ、正裁の天秤にとって重要な内容の研究があるのだ。

『少なくともニュークリアについては明日にも終わるはずだ。セクシヨンごとにそれぞれあるから、もうしばらく続くだろうな』

「成程。……悪いが一応全てのプレゼンを見ておいてくれないか？」

『……了解だが、他に何かあるのか？』

非常に不承不承といったふうに機嫌の悪い声だが、了承してくれた以上そこを責める必要はないとアッセルは苦笑いする。

「……ああ、主に、人道的にヤバい研究が行われている可能性があるんだ」

『分かった。もうしばらくここで見学ツアーを満喫しておくよ』

皮肉っぽい笑い声を残して、電話は切れた。

携帯をポケットに入れ、改めて眼下を見下ろす。

夜明けの暗がりの黒いアスファルトをなお深い漆黒に塗られたワゴン車が闇を切って進んでいた。

「さて、それじゃあ俺たちも行きますか」

「その前に……」

「うん？」

真後ろを飛ぶリーナの声に振り向く。

「あの、そろそろアイナを起こした方が……」

『あ！？』

アイナは未だに安らかな寝息をたてていた。

それから十数分後。

アッセル・リーヒニストは一人で河原へ降りて行った。

地上近くまで飛行式の高度を落とし、飛び降りる。足の裏から湿った土の感触が伝わる。

都市部から離れているためか、わずかながらにあった車や、散歩する歩行者はもう見る影もない。あるのは大型デパートとどこかの企業の名前が掲げられた小さなビルだけだ。

アッセルは息苦しそうに胸元を弛めた。着慣らしていない若草色の軍服は綺麗過ぎて、着心地が悪い。

（軍人の服っぽくないんだよね）

アッセルにとって軍服とは戦場の泥や汗、血が染みになっているものだった。

（ま、その内これもそうなるだろうけど）

考えながら進んでいくと、黒いワゴン車が見えてきた。

ワゴン車は三台あり、車体を横にして中央だけが手前に停められていて、残りの二台は奥に、それぞれが重ならないように並べられているようだった。

向こうからもアッセルの姿を見つけたのか、しかし、何故か手前のスライド式のドアを使うことなく、奥側のスライドドアからそろそろと屈強な軍人たちが車から降りてくる。

その数十五人。しかし、ワゴン車に人が残っている可能性もある

ため、それ以上に増える可能性もある。

(一人を相手にするにはちよつと多すぎるだろうに……)

しかし、アッセルは不敵に笑った。その顔に不安の色はない。

アッセルの正面に立った男が一步前に踏み出した。

大柄な体格にスキンヘッドの大男だった。頬骨がゴツゴツしていて、さらに顔の至る所に小さな刃物のようなものの傷痕がある。

凶暴そうな外見に反し、その眼は相手の隅々まで見通しそうな知的な光が隠れ見えている。

こつというのが一番厄介なんだよなと思いつながらアッセルの表情は凶悪なほどに歪んでいた。

踏ん返り返つて大男は鼻を鳴らす。

「ふん！ 貴様が軍の傘下に入りたいと言う組織の者かあ？」

「はい。六月と申します」

恭しく、洗練された動きでアッセルは頭を下げた。

ニヤツとアッセルは笑った。

(新島四音、……川瀬五郎、その二人の下に加わるって意味なんだが、さて、伝わってくれるかね)

「ムツキ……だと？ ふん！ 気に食わんな」

顔を顰め大男はアッセルを見下す。

「どのようなところがお気に召さないのでしょうか？」

頭を上げ、それでも余裕に満ちた表情を崩さずアッセルは大男に尋ねる。

「その、鼻につく態度だ。貴様のように戦場を知らずに、頭の下げ方ばかり学んだような奴が気に食わないのだ」

古風な武人のような男だとアッセルは苦笑いする。

「頭を下げまわることも、わたくしにとっては戦争と同じですよ」

それに、戦場ならこの大男に引けを取らない程度には知っているつもりだった。

「……ふんっ」

大男は荒々しく鼻を鳴らした。

「……それで、貴様は軍に加わって、何を企んでいる？」

「裏方の考えることなど、役者には関係ないのでは？」

アッセルはニヤツと笑った。

「……その通りかもしれないな」

大男はおもむろに右手を挙げた。

それが合図のはずだった。

「なんかモメてそうだなあ……」

眞左人はまぶしい朝日を右手の掌で遮りながら、その光景を見ていた。

そこはとある企業が事務を行うために借り切ったビルの屋上だった。

河原のアッセルたちの姿を見下ろす。

少し動きが乱れ、遠目からでも軍人たちの緊張感が高まる様子が見て取れる。

「あの人は軍を敵に回したいんですかね」

リーナが眞左人の隣で苦笑いを浮かべていた。

本当ならそんなに笑ってられる状況じゃないんだけどな、と眞左人はちよつとこの娘、現実を認識できてないんじゃないかと不安になった。その隣には身を乗り出すようにしてアッセルたちの様子を見続けるアリスがいた。

「しかし、アッセルはよく狙撃手がいるのを見抜いたなあ」

一人呟く眞左人は視線を背後に向ける。

給水塔の横に手錠で自由を奪われた迷彩服の男が横向けに倒れていた。

それは河原に現れるだろう正裁の天秤の使いをを狙うはずの狙撃手だった。

アッセルはその男を含めた狙撃手たちの存在を予想し、魔法陣を用いて空から河原周辺、特にビルの屋上やマンションの空き部屋を

徹底的に探索した。

思いの外、簡単に狙撃手は見つかった。

もつとも、音も無く空を滑空する魔法陣に乗るアッセルたちを、河原を見続けていた狙撃手に発見しろというのも無理な事かもしれない。

狙撃手は3人いた。

眞左人たちのいるビルのほかに、大型デパートの屋上、マンションの空き部屋と、アッセルの予想と寸分と違わない結果だった。

デパートの屋上のはアッセル本人が、マンションの空き部屋は瑞樹が制圧した。

既に、大男の合図で命令を果たすことができる狙撃手はいないのだ。

(それにしても……)

と眞左人は今にも戦闘になりそうなギスギスしたアッセルたちの状況を見守りながら考え込む。

(どうも軍が俺たちを本気で殺すつもりで狙撃手を用意したようには思えないんだよなあ……)

これは眞左人の能力である《勘》ではなく、人災警官隊としての経験から導いた考えだった。

「まあ、そんなことはいいか」

そんなことよりも、今気にするべきことが眞左人にはあった。

(いざとなったら、助けられないとな)

眞左人は静かに腰に差した短刀に触れた。

「……これは、貴様らの仕業か？」

大男は怒りを滲ました声でアッセルへ尋ねた。その表情は悔しさを惜しげもなく表している。

「申し訳ございませんが、わたくしの安全を優先させていただいた結果でございます。ご安心を。彼らの命は保証します」

アッセルは劇場に立つ役者のように、大仰に頭を下げた。

「キ、キサマア　!!!」

大男は腰のガンホルダーから拳銃を取り出した。にもかかわらずアッセルは笑う。

大男とアッセルの距離は二十メートルもない。拳銃ならば一瞬でアッセルを殺すことができる距離だ。

その引き金が絞られる。

しかし、銃声と銃弾が射出されるよりも早く、一条の紫の閃光が大男の腕を弾いた。

そこから紫電が血飛沫のように飛び散った。

一歩遅く放たれた弾丸は、アッセルの頬をかすめた。

大男を庇うように周りの人の軍人たちが大男の前に出る。

部下に守られながら、右腕をぶらりと腕を垂らし、大男は自分の腕を弾いたものを睨む。

白く丸っこいその弾は。暴徒鎮圧用のゴム弾を遠距離狙撃用に改良したものだ。

「キサマ……、これは私の部下の魔弾」

彼を撃つたのはアッセルを狙撃するはずだった魔弾だ。

魔弾とは魔術が施された弾丸のことだ。それは魔術師が着弾時や、発射時、あるいは発射後と指示を魔術式に組み込み、銃弾に魔術を施すことで完成する、使い捨ての魔法出力器とも呼ばれる兵器だ。

それは魔銃エレメントガンという特殊な拳銃型の魔法出力器と組み合わせることで初めて効力を発揮する。

魔銃と魔弾の製造に使われる技術が大変高度なもので、一般の魔術師では一生お目に掛かれないとまで言われる貴重品だ。

その利点とは他の魔術師が組み込んだ魔術が使用できるということだ。基本的に一体の精霊につき1属性の魔術しか使えないため、軍という集団戦が行う者たちのアドバンテージを高めるために重要なものだ。

大男の腕を弾いたのは制圧用のゴム弾だったが、雷属性の魔術に

より一時的に体を麻痺させる効力を持っている。大男の右腕はその効力によって全く力が入らないのだ。

心底悔しそうに大男は銃弾が飛来したマンションの空き部屋の方角を睨んだ。

そこには天秤の雷の銃使いがいるはずだ。

大男はふらつきながら後ろに下がった。そして、背を車体にぶつけ、おもむろにスライドドアを叩いた。

そして、三台のワゴン車のスライドドアが一斉に開かれた。

「……ほお」

感嘆の意を込めてアツセルは息を吐いた。

ワゴンの奥から現れたそれは砲台だった。

息を吹き返すように砲身が鈍く輝く。十二もの銀の砲身が円筒状に取り付けられ、一つの砲身となったそれはガトリング砲そのものだった。さらにその端には補充用の弾丸がジャラジャラと延びていた。

それは軍が開発した魔術兵器。ガトリング・エレメントシューター十二連装速射式魔銃だ。それがワ

ゴン一台に一つ乗せられていた。

三台の砲台の後ろに、それぞれ男性の軍人が付き、いつでもトリガーを引けるように準備をし始めていた。

（まあ、俺なんぞのためにそんな最新鋭の兵器を持ってきたもんだ）
速射式魔銃は名が指す通り、魔弾を速射するために作られた砲台だ。

その目的であった速射性の獲得は成し得たものの、ばらばらの魔弾の魔術式に合わせて魔術を絶えず変化させる必要が増し、魔力消費量が莫大なものになってしまったという経緯がある。

しかし、軍という組織での戦いを行う場合、この兵器は多大な戦果を挙げることができる。

既に銃とは呼べない代物だが、その実、手で持って撃つこともできるように、土台から切り離せるようになっていて。もっとも、莫大な魔力消費と発射時の衝撃と本体の重さの全てに耐えられたなら

の話だが。

そんなものの砲口を向けられてもなお、アッセルは怯えることも臆すこともなかった。

アッセルは茶外套の下から黒い鞘に納められた日本刀を取り出した。

刃を地面に向け、鞘を握り、柄を握る直前で手を止める。

それは戦闘の意思を示すための構えだった。

「ッ！発射用意！」

大男が声を張り上げる。

それに合わせて砲台を操作する男たち。既に準備は整っており、射線上にアッセルを捉えていた。

速射式魔銃は今やトリガー一つで悪夢のように魔弾の雨を降らせることができる。

しかし、それでもアッセルに焦りの色はない。

体を捻りさらに刀を引く。

それは抜刀術の構えだった。

ふと、トリガーを握る男たちの背筋が凍るように震えた。軍服の下にじわりじわりと汗が滲み、手が震える。

額からも汗が流れ、それを拭ったアツセルの正面に位置する砲台を操作する男が、目の前の敵と視線がぶつかった。

直後、男はまるで巨龍が目前でその顎アキトを開き、牙を向けているような幻覚を見た。

恐怖で硬直した男の手が一瞬トリガーから離れた。

視線が直接合った男ほどではなかったものの、他の軍人たちも一瞬硬直してしまった。

アツセルから放たれる何かが、軍人たちを震えさせていた。

それは大男ですら一瞬呼吸を忘れるようなものだった。

軍人たちを凍らせたもの。それは殺気。極限にまで研ぎ澄まされたアツセルの殺気だった。

その硬直は致命的な隙をアツセルに与えた。

刃を下にしたその構えから繰り出されるのは斜め下から右上への斬撃。

アツセルは体をさらに捻り、刀を奥に引いて、斬撃を繰り出すまでの距離を空ける。

そして、刀を抜く。

白銀の刃が漆黒の鞘からその刀身を現す。漆黒の中で輝く宝石のように眩い光がその刀身から溢れ出ていた。

そしてアツセルはその刃を、地面をえぐりながら大きく振った。

その一線がえぐった土や小石が巻き上げられる。

その時、風が吹いた。

風はその土や小石をさらに上空まで巻き上げる。

「……」

たとえ無意味な行動に見えようと、何か魔術を使うための行動なのかもしれない。大男は今にも発射の合図を出そうとして……。

アッセルが空に飛び上がった。

「！ 撃て！！」

アッセルの狙いはわからないが、ここで撃たなければどのような攻撃が来るかわからない。それは恐怖だった。

しかし、結果としてこの判断は間違っていた。

大男の命令に反応した軍人たちが、速射式魔銃の重い砲身を上空のアッセルに向けた。

上空でその光景を見ていたアッセルはほくそ笑んだ。

そして、アッセルは風が巻き上げた小石と同じ高度まで達した。

(ここからだ小さく見えるな)

自分を狙う砲台を眺める。

(もっとも、だからと言って外すつもりはないがな)

風を感じた。

自分と戯れるように周囲を回り続ける風。それらを利用することで、この抜刀術の真価が発揮される。

風の流れに添わせるように、その刀を振る。

風が宙に漂う小石の前に集まって行く。

その小石はちょうど速射式魔銃の砲口に詰まるほどの大きさのものであった。

アッセルは風の塊を斬るように刀を振りろした。

空気の塊が弾け、爆風のような風が吹き抜けた。

それは宙に浮く小石を地面に向かって吹き飛ばす。

小石は弾丸にも劣らない速度で、舞い踊るように空を飛び、それぞれの速射式魔銃の砲口に収まった。

だが、それに軍人たちは気づかないまま、瞬間、トリガーが引かれた。

数発はアッセルに向かつて放たれたが、小石が入り込んだ砲口から魔弾が射出される瞬間……。

左の速射式魔銃から爆炎が噴き出した。

その衝撃で、トリガーを握っていた軍人が吹き飛ばされる。

叫び声を上げる無く、炎に包まれた軍人を保護しようと、別の男が動こうとして、

右の車両から雷鳴が轟いた。

それとともにその車両の速射式魔銃を操作していた男が、痙攣しながら車外へ倒れこんだ。

「くっ！？ 逃げろおお！！」

大男は叫びながらワゴン車から離れた。

軍人たちも急いで車から離れる。

次の瞬間。

ワゴン車は砲台ごと真つ二つに切断された。

啞然とする大男たちを尻目にアッセルは銃弾を躲しながら着地する。

「魔弾は弾の速度を上げるためにブースターとして魔術を使う場合もありますし、単に弾の硬度上げるために使うときもあるのですが、大抵の場合共通する一つの命令を式に込められているのです」

舞踏を終えたダンサーのように恭しく頭を下げ、アッセルは説明し始める。

「着弾時に魔術を発動させるという命令です」

何か、恐ろしいものを見るような眼で、大男たち日本軍の魔術師たちはアッセルを見つめた。それも当然の事かもしれない。

口にされなくても理屈は分かる。だからといって、それを利用してきるものとは思えなかったのだ。まして、アッセルは魔力を使っていない。小石が砲口に入ったのを見た見ず関係なく、その場にいる

全ての者たちは一様にアッセルがどのようにしてこの状況を作り出したのか理解できていなかった。

自然の風を操ったとは想像もできないのだ。

「そんなものが放たれる銃口に、小石を詰めるとどうなるか……、わかるでしょう」

銃口を塞いだ小石に着弾し、銃口内で魔術が発動。

その発動した魔術が速射式魔銃を破壊したのだ。

アッセルは抜刀した日本刀を漆黒の鞘へ納めた。

「……キサマ、何のマネだ？」

右腕が動かず、戦うこともできないはずの大男だったが、それでも射抜くような眼光を放ち、アッセルに迫る。

「我々の目的はあなた方と戦うことではございません。あなた方に協力することです。仕掛けられない限り、刃を向けることなどありませんよ」

「ふ、笑わせる。軍の最新兵器を壊しておいて、今更協力など……」

「問題ありませんよ。何故なら……」

「……せよ。B-〇五隊（いんせいのたい）。応答せよ」

その時、タイミングを見計らったかのように大男の腰につけられたトランシーバーから声が聞こえた。

アッセルを睨み付けながら大男はトランシーバーの声に対応する。

「……はい。……今、何と仰いましたか!？」

大男の目が見開かれる。

アッセルや他の軍人たちはただその様子を見守る。

「……わかりました。はい。すぐにでも」

無線を切り、大男はアッセルに向き直った。

「川瀬准将から、直々の連絡だ。お前たちを、今回の騒動の間だけ軍に加入することを許可する、だそうだ」

苦虫を噛み潰したような表情で大男が告げる。

それを聞いていた軍人たちにも動揺が走る。

川瀬五郎は実質軍の魔術師の頂点に立つ男だ。それほどの人物が

ただアッセルたちを軍に加入させると連絡してくる。どう考えても普通の状況ではない。

唯一アッセルだけは余裕に満ちた笑みを保ち続けていた。

「一体何をした？」

大男の苦々しい言葉を受け、アッセルは愉快そうに笑う。

「我々が何と呼ばれているのか、あなたもご存知でしたはずでは？」

「裏方、とあなたも呼んだでしょう？」

「手回しならお手の物、ということか？」

アッセルは曖昧な笑みを返した。

「さて？ 我々はただ我々の使える手段で確実なものを使っただけですよ」

「……厄介な者どものだ」

心底憎らしそうに大男は呟いた。

気分を切り替えるように首を振り、右腕辺りが麻痺しているにもかかわらずそれを感じさせない動きで、大男は背筋を伸ばした。

「これより、あなた方を軍の重要人物として扱います。もうじき車が来ます。それで我々と共に来ていただきます」

打って変わった態度を取った男にアッセルは苦笑いを返す。

「貴方もそのようなことをなさるのですね」

「生き辛い組織だからな」

一瞬だけ相貌を崩し、大男は豪快に笑った。

「……どうして貴方は軍に居続けるのですか？」

ふと気になってアッセルは尋ねた。

アッセルにも戦う理由がある。

それと同じように、目の前の男にも軍に居続け戦う理由があるはずだ。

「そうだな……。守るべきもののためだろうな」

男は少し考えた後に迷いのない表情でそう言った。

それは家族の事だろうか。それとも今従えている部下たちの事だろうか。あるいはもつと別の、アッセルでは想像もできない個人的な何かだろうか。

「……あなたと戦いたくない理由が増えましたよ」

二人は旧知の親友のように笑い合い、酒を酌み交わすように敵意の込めた視線を交わした。

やがてアッセルは口を開く。

「車はいりません。場所さえ伝えてもらえば、あとはこちらからお伺いします」

アッセルは慇懃に頭を下げた。

「……ふ」

呆れるような息を漏らした後、大男は素直にその場所を伝えた。

アッセルは一度でその場所を覚え、礼を述べた。

「それでは。我々は失礼します。あつ。狙撃手の方々は拘束させていただきます。よろしくお願いいたしますので、そちらで回収をお願いします」

返答を聞くことなく、アッセルはその場から一瞬で去った。

敵であり、味方になつたらしい男がいなくなつたその場で、利き手ではない左手だけで不器用ながらも大男は煙草に火を着けた。そして、うまそうに煙を吸う。

「隊長？」

彼の部下にはその姿が随分楽しそうに見えた。

それから数分後。

アッセルは大男たちの元に戻ることなく、眞左人たちを回収し、再び空中魔法陣で空を飛んでいた。

「……なあ、アッセル」

「なんだ？」

「向こうから車を出してくれるんだろう？ どうしてわざわざ魔法

陣使ってまで移動してるんだ？」

他のメンバーも不思議そうに首を捻っていた。

「さっきもそうだったろう？」

それにアッセルは楽しそうに笑う。

「信頼できる相手でもない奴が用意したものなんかには誰が乗るものか」

ああ……なんか言ってたなと四人は苦笑いしてアッセルの背を見た。

そのアッセルはまたしても携帯をを操作してどこかへ連絡を取っていた。

「Hallo? This is Assell LieHinst!」

『あの。すみませんけど、ボク、英語話せませんけど……』

「そこは関西のノリで何とかしてもらいたい」

『かかってないほどの無茶振り!? ドSな兄さんやな』

「それで、俺が聞いた位置は間違いないのか？」

『間違いないで。兄さんらが目指すべき場所は軍が秘密裏に利用している宿泊施設やで』

「そうか。助かった。では現地で」

『って兄さん? もしかしてもう切るつもり? そりゃないで』。

折角調べた俺の苦労を労って〜な』

容赦なく無言でアッセルは電話を切った。

「……あれと話すとな妙な疲労を感じる」

アッセルは一人そう呟き、魔法陣の速度を速めた。

もう少しすれば、アッセルたちが途中下車した寝台特急が京都へ着く。それまでの間に準備を済ませなければならぬ。

(Welcome to battlefield)

5 騒動の前兆

ヨーロッパが焦土と化した以降、日本の政治体制は天皇制から貴族制に移行した。（その理由は主に政治の腐敗）

一時は歴史の繰り返しだと非難する声もあつたのだが、現在の政治は国民にも理解を得て、概ね良い国家体制だと評価される。

その体制では、貴族会というものが国会の代わりを担っている。貴族会は三院制で、民出院、貴族院、経出院と別れている。

それぞれ民出院は立法を、貴族院は海外への対案と内閣の設立を、経出院は経済対策関連の法と政策を役割としている。

いわば国会を、政府機能、立法機能、経済対策という三つの機能に分けて、個別に稼働させているのだ。

そして、正裁の天秤の根城たる貴族の屋敷に貴族院の院員である男がいた。

名を白峰相馬しほみねそうまと言う。

身長は平均より頭一つ分高く、さらに高い鷹鼻を持ち、体格は岩のようにごつごつしていた。

顔は決して悪くないのだが、世にいう美男子とは違い、引き締まっただけで、たくましさを感じるものだった。

貴族制の当初から政治に関わり続ける白峰の家に生まれた彼はこれでも根っからの貴族である。しかし、あまりにもイメージにそぐわないため忘れがちになつてしまふのが実情だった。

この白峰相馬こそが、正裁の天秤最大のパトロンであり、彼らの活動を全面的に支えるものである。

そんな彼は京都で政府に敵対する可能性が高い陰陽師たちの動向を訊くため、その組織のリーダーたる青年、アッセル・リーヒニストに携帯から連絡を取ろうとしていた。

ようやく読み終えた海外の魔術政策の報告書を、執務用のデスクの端に追いやり、彼は肘をついて携帯が繋がるのを待つ。

トゥルルルルという単調な呼び出し音が、ブツツという音と共に消える。ようやくつながったかと相馬は話したそうと口を開き、

『お掛けになった電話は、現在、電波の届かないところにあるか、電源が入っていないため、掛かりません』

ハキハキした女性の声でそう告げられた。

アッセルはその時地下にいたのだから仕方ない。

??
x??
x??

見事な魔術の応酬を繰り広げた二人の魔術師に惜しめない拍手が送られている。

盛り上がる会場の中に彼 川瀬五郎 はいた。

会場の観客席の中の出口のすぐ右側の席に彼は腰かけていた。

彼の周囲には一見会場の熱気に浮かされているようで、その実、あまりにも冷たい警戒の目を光らせている警護の軍人が5人ほどいる。

みな彼を守るために鍛え上げられた精鋭たちである。

そんな彼の隣の席は、ぽっかりと空いている。護衛たちもそこは空席のままにしている。

まるで誰かが来るのを待っているかのように、その場所は空けられていた。

そこに、茶外套を翻しながら音も無く青年が腰かけた。

川瀬はその青年へ顔を向けることもなく口を開く。

「君がそうなのか」

無愛想な川瀬とは対照的に青年は好意的な笑顔を向けた。

「はい。六月と名乗っております」

普段は無表情な川瀬の表情が一瞬だけ不快気に歪む。

「……気に食わんな。私の前ではその名は控えてもらいたい」

口調こそは諭すようなものだったがその眼光は異様に鋭かった。

青年は困ったような微笑を作り、少し考えこんだ。

「ではアッセルとお呼びください」

青年 アッセル は座ったまま頭を軽く下げた。

その様子を少し離れた場所からホムラは見ていた。

「あの二人、何してるのかしら」

周囲が浮ついた雰囲気であるにもかかわらず、川瀬と六月が座る席の周辺だけは少し冷たい空気が漂っていた。

「まあ実際川瀬は氷の使い手だからね」

『ホムラ、それ関係ないから』

ホムラの肩に留まっている天照が心底疲れたような声でツッコミを入れた。

「……っ」

一方ホムラの席の隣ではサクラが今にでもシンラの元へ飛び込もうとするのを堪えていた。

「……っ」

「ねえホムラさん。一つご相談があるのですが……」

重々しそくにサクラは呟いた。

「？」

隣のサクラを見て、妙な違和感を覚えホムラは彼女を凝視する。

そんなことは気にも留めずサクラは突然ホムラにグイッと近づいた。

キスでもしそうなほどに近づかれ、流石のホムラも身を引いてしまった。

「な、何っ？」

「私……、ちゃんといい子でいられますよねっ!？」

サクラは目端に涙を溜めていた。

それを見て、ホムラは本気で思った。

(この娘、めんどくせ〜〜〜!!)

先程からサクラが大人しくホムラの隣にいるのには理由があった。

彼女たちは一旦用意された部屋へ移動したのだが、

「どうして私はシンラさんと一緒に過ごせないんですか？」

そう愚図り精霊の床をすり抜け、下の階のシンラたちへの部屋へ向かおうとサクラを、

「待った!！」

大声でホムラは引き止めた。

「な、何ですか!？ いきなり大声を出さないでください!！」

通り抜けの途中で止めたためにサクラは手首までが床にめり込んだ状態で止まっていた。

シンラ君も忙しいだろうし、あたしんが我慢しているのにあんた一人が行くのは許さない。というのがホムラの偽らざる思いであったが、流石にそのまま言うのは気が引けるので、別の面から攻めてみることにした。

「サクラ？ よく聞きなさい。ここにいるのはみんな魔術師で、あなたの姿が見える人たちなの。ここで濫りに飛んだり、壁透き抜けたりしたらマスターのシンラくんに迷惑が掛かっちゃうの」

魔術師たちの間で、シンラ・ミトセの扱いは微妙なものだ。

想像魔術根源説を提唱した若き才と讃える声もあれば、その才能を妬むものたちもいる。その青年がただでさえ希少な人型精霊と契約したと知ればどうなるか。しかもサクラは普通の高位の精霊が霞むほどの魔力を持つ精霊だ。

まず間違いないことは、才能を利用しようとさまざまな思惑がシンラを襲うだろう。

かつてのホムラがそうだったように。

「迷惑かけちゃったら、シンラ君、サクラのこと嫌いになっちゃうかもしれないよ？」

まあ、こういう風に釘を打っておけば安心かなと、ホムラは我ながらいい感じに言えたんじゃない？ と慢心していた。

「……」

サクラも本気で何かを考え込む様子だったので、本当にホムラは気を抜いてしまう。

だからサクラが泣いていたことに気づくのが遅れた。

「……」

声を漏らさないように俯いて、腕を振るわせていた。

「……嫌われちゃったの？ わたし……」

「いや！ 嫌われてなんかいないよ！ まだ大丈夫だから……」

この娘純粹過ぎ！ とホムラは呆れるとともに思った。

「……えぐっ！ うぐっ！ ひっく！」

「これからいい子にしてたら大丈夫だから！ ね？ だから泣き止んでよ……」

本当にこの娘面倒臭い！

それ以降、サクラは大人しくホムラの後を付いて行き、地下でシンラたちが練習試合をしていると聞きつけこの地下試合場まで来たのだ。

（あたしん……、こういうの向いてないわ）

うずうずしているサクラの事は意識から振り払い、川瀬たちへ向き直ったが、

（あれ？）

既にそこには誰もいなかった。

??????????

そのビルの屋上に、二人の青年が立っていた。
一人は年齢が20歳前後。灰色のジャケットを羽織り、ジーンズを履いたそれこそどこにでもいそうな青年だった。

しかし、だからこそ、彼の異様さが溢れだす。

青年の瞳はスカイブルーに、髪は夜の海のような紺色に染まっていた。

それは着色やカラーコンタクトや、まして遺伝子が現した自然の色ではない。

それは魔力に順化した者の証。青の系統は多くは水の魔力を表す。もう一人の青年は紺色の髪の青年よりも年上で20代後半ほど。

真っ黒なトレンチコートの下にスーツを着ている。

トレンチコートの青年は黒髪黒眼で、右目を覆い隠すように前髪の右側が頬に掛かるほどに伸ばしていた。

「準備はできたのか？」

紺色の髪の青年がトレンチコートの青年に話しかける。

「……どうやら問題ないようだ」

携帯を確認して返答する。

「よし。俺は予定道理に配置に着く。あんたはどうする？」

「最早我に策は不要。我は正面から行こう」

「……慢心は敗北を誘うぞ？」

紺色の髪の青年は嘲笑を浮かべトレンチコートの青年を挑発する。
「それならば構わん。その時は我がそこまでの存在であるというだけだ」

「……あっそ」

非常につまらなそうな声を漏らして、魔術師たる青年はビルの中に向かう。

「さてと……、今日の得物は何だろうな」

舌なめずりでもしていそうな声が背後から聞こえ、トレンチコートの青年は肩を竦めた。

「……よろしいのです？」

唐突に声が聞こえた。

どこから現れたのか真つ黒な道着を着た集団が青年の傍に控えていた。

その数4人。

彼らは一様に不服そうな様子だった。

「構わん。奴は我らの妨害はせん。あれの目的は魔術師だからな」

「……しかし、あのようなハイエナに……」

代表するように右端の男 声からすると男のようだが言う。

トレンチコートの男の雰囲気が変わった。

「……一時的とはいえ、我らと肩を並べる者を愚弄するのか？ 我らがここにこうしているのも彼の力が有つてのことであるのだぞ？」
道着の集団は息を呑み、黙るしかなかった。

空気が震撼するような怒気が彼から発せられていた。

「失礼しました。御当主殿」

右端の男が言うと、青年は黙って首を振った。

「それは彼に、心だけで言うのだな」

青年がビルに向かって歩み出すと、道着の集団は一瞬で四方へ散った。

爆発がそのビル、軍が前線基地として使っているそのホテルで起きたのは、それから間もなくのことだった。

6 魔力強奪者

?????
x?????

地響きとともに警報が地下試合場に鳴り響いた。

「なんだ!？」

シンラはその時、銀とヘルと共に拍手にどう対応したものかと悩んでいたが、どうしたことかと放送に耳を澄ました。

『屋上付近で爆発が起きた。おそらく敵襲と思われる。全ての小隊に装備許可。敵勢力を見つけ次第各個撃破せよ。これは演習ではない。繰り返す。これは演習ではない』

どこか遠くの国の戦争の映画でも見ているみたいだ。

そうシンラは思った。

しかし、周りは違う。

先程までシンラに拍手を送っていた観衆は、今や軍隊と化し、それぞれ階段から試合場を後にした。

奇襲にも動じず統制のとれた動きをしているのは驚きだった。

シンラの眼には彼らがまるで奇襲を予期していたように見えた。

だが実際は違う。

「これが……戦場なのか？」

誰にともなくシンラは呟いた。

「そうだ」

答えたのは銀だった。

シンラは改めて、銀と自分に有った歴然とした差を感じた。

「怖いか？」

「……どうだろう?」

銀はホツとしたような笑みを浮かべた。

「俺も最初はそうだったよ」

銀が自分に近づいてくれたような気がした。

「さてと。で？俺たちはどうすればいい？」

そう言って銀が顔を向けたのはヘルだった。

「そうね……。二人はまだお客様だから、本格的には戦いに参加しなくてもいい。多分、他の非戦闘員の人たちと同じように避難してもらおうと思う」

そう言っただけでヘルは客席の方を見た。つられて二人も視線を追うと、ホームラが、女性軍人数人に宥められながら、半ば引きずられるように連れて行かれるのが見えた。

『……！！ あたしん……シンラク……嫌だあ！！』

「あの人は……」

シンラは頭を抱えた。

「ま、まあ、サクラが大人しく連れて行かれてる分まだましだろう？」

「そうとらえるべきかな」

銀のフォローともいえないフォローに、シンラは遠くを見る目で二人を見送った。

「まずワタシたちも地上へ上がる。着いて来て」

言葉までには気が回らなくなっているのか、敬語で話さなくなつたヘルの背中を、不謹慎かもしれないと思いつつもシンラは微笑ましく見ていた。

階段を駆け上がるのは静かだった。

停電も起きておらず、さっきの放送が嘘のように平穏だ。

「……静かだな」

「不気味」

「ちよつと待つて！」

階段を抜けた時、最後尾を走っていたシンラが話していた二人を呼び止めた。

「シンラ？ どうしたんだ？」

そこはまだ地下だった。ホテルの電気、水道、ガスなどのライフラインを管理する部屋があるようで、プレートには管理室の文字がよく目立つ。

確かに重要な場所ではあるが、自分たちが優先するのは避難だ。

銀にはシンラがわざわざ呼び止めるような理由があるとは思えなかった。

「ちよつと変じゃない？」

「変？ 何が？」

「なんていうか、割れる寸前にまで膨らんだ風船があるような、ちよつとした危機感かな？」

「はあ？」

妙な例えを出されますます首を捻るばかりだった。

「……確かに、妙です」

「ヘル……君もか？」

また二人で分かり合うなよと銀は少しいじけてそっぽを向いて、気が付いた。

「まさか……」

銀は慎重に足元のソレを確認する。

「薬莢か……」

正しくは薬莢だったものだろう。

銀は指先で摘める程度の大きさのソレを拾った。

それは何かに切断されたような断面を持ち、近くで見ない限りは薬莢とは気づけないようなほど小さい。

「わざわざ薬莢を分からなくするなんて、手間を掛けたもんだな」
呆れたように銀は笑った。

「それだけじゃないよ」

シンラは続けて呟く。

「数値化」

様々な情報を数値として認識させる無属性魔術『数値化』。シン

ラはそれを用いて辺りを見渡した。

「床に二ヶ所。壁に五ヶ所。天井に一ヶ所、弾痕があるね。あと、微弱だけど魔術を使った形跡がある」

ヘルもシンラの言葉を黙って首肯した。

薬莢の欠片を投げ捨て、シューズケースのような袋から銀は自分の魔法出力器である鉄鋼手デハイス
ガントレットを取り出した。

「ってことは……」

「ここで戦闘があった。しかもちよつと前。もしかしたら騒ぎが起る前に……」

言いながらシンラもバットケースから《如意》を取り出した。

無言でヘルも儀礼用のような両刃剣を鞘から引き抜く。

「こつという場合は、俺たちはどうしたらいい？ ヘル？」

銀は言いつつ鉄鋼手を装着し終えていた。

「可能なら応援を呼んで、そちらに対処を頼む。……けど、この階は地下で、連絡が取れないし、内線用の電話は管理室にしかない」

「ってことは、俺たちが対応すればいいってことだな」

シンラは緊張を滲ませつつも、強気に笑った。

「油断しないで」

釘を刺すようなヘルの一言を聞きながら、シンラが魔術を発動した。

シンラの数値化はその敵の座標を捉えていた。

「爆発！」

左手で数式を書き終えたシンラが叫ぶ。

演算魔術と詠唱魔術の複合魔術エクスプロージョン
マスマティック
スベル
コンビネーション。それは正確な座標への攻撃と、

発動速度の短縮を可能にした魔術発動法の複合だ。

具体的には場所だけを数式に入力し、直接の発動は詠唱で行うというもの。

二つ先の扉から火が噴いた。

扉は吹き飛ばされ、向かいの壁をめり込んでいた。

「やったか？」

「威力は最小限にしてるから、殺しはしてないよ？」

「そういう意味じゃないんだが……」

少しピントのずれた会話を交わしながら、慎重にその部屋を覗き込む。

部屋はホテルの警備員の詰め所らしく、倒れたロッカーから予備の制服が見えた。

しかし、妙だった。

爆発は確かに小規模な威力だったが、それでも爆発は爆発だ。そんなものが起きた割に部屋が綺麗だった。

確かにロッカーなどの物は散乱としているが、何処にも熱で焼けたような形跡がないのだ。

「どうしたよ？ そんなに不思議か？」

聞き覚えのない男の声が部屋の中から聞こえた。

シンラたちは答えず、素早く部屋の入口を挟むよう右側にシンラ、左側には銀とヘルが立つ。

出てきたところを挟み撃ちにしようということだ。

「おいおい。とんだ客人だな？ いきなり人のいる部屋爆破して、その割にこつちが話しかければだんまりかよ？」

嘲笑と共にそんな声が聞こえた。

「つたく……。仕方ない」

瞬間、風が吹いた。

「後ろがから空きだぜ？」

その声はシンラの耳元から聞こえた。

「お前も、背後に注意した方が身のためだ」

それは銀の声だった。

シンラは前方へ飛び出して敵から距離を取った。

背後で金属同士がぶつかるような、鈍い音が響く。

振り向いたシンラが見たのは、銀の鉄鋼手を受け止める敵の姿だ

った。

その敵は灰色のジャケットに、ジーンズを履いた青年だった。陰陽師とは思えない青年の格好を疑問に思いながらも、シンラは如意を構える。

「驚いた！ 軍はガキを連れ出さなきゃならないほど追い込まれるのかよ？」

銀とシンラの格好を見比べ、青年は皮肉を言う。
その髪は深い紺色に染まっていた。

「まあ、ただのガキじゃないようだな。アンタ、何もんだ？」

銀の左手の鉄鋼手を受け止めながら、青年は笑った。

「あの一瞬で、俺の背後を取るってのはなかなかできるんだろう？」

銀は無言で右腕からパンチを繰り出す。

青年はそれを躲し、宙で行先を失った銀の腕を掴んだ。

そして、その腕を無理やり引く。

銀の拳は体全体で踏み込んだ重い拳だ。だからこそ、彼の重心は前方に偏っている。

それを引かれたことにより、銀は完全にバランスを崩した。

さらに青年は銀の足を蹴った。

軽い蹴りだったが、銀を転倒させるには十分だった。

「ぐっ！！！」

受け身を取ることすらままならず、銀は転倒した。

インフェルノ・リング
「火円」

如意を回しながら、シンラは魔術を発動させた。

炎が円状に形を成し、そのまま青年に向けて放った。

「炎か！」

青年は銀の腕を放し、ジャケットの袖を捲った。

青年の腕には水色のブレスレットがあった。

青年はそれに触れながら叫ぶ。

「水塵」

青年の正面を水が、傘のように広がり、炎の侵入を防いだ。火円が消え、水の傘が消えた時、シンラは敵の顔を初めて見た。もし、ここにいなければファッション誌にでも写っていきそうな顔だ。

その瞳はスカイブルー。水属性の魔術を使ったことから、おそらく水の魔術師なのだろう。

相性はあんまりよくないとシンラが考えている間に、ヘルが一歩前に出た。

「アイス・スピア」

詠唱魔術で作り出された氷柱のような氷が十本以上宙に浮かんでいた。その矛先は青年に向けられていた。

青年が何かを口走ろうとしたが、それ以上に速く、氷の槍が青年の身を貫こうと肉薄した。

だがその時熱風が吹き荒れた。

粘膜を焼くような熱さに思わずシンラは瞳を閉じた。

すぐに熱風は収まり、目を開いたシンラが見たのは、傷一つないまま立つ青年と、水浸しになった床だった。

「……嘘、だろ？」

驚きのあまりシンラは手元の如意を離しそうになった。

数値化を施していたシンラの眼には、それがはつきりと映った。

先程の熱風は炎の魔術。そして、魔力はホムラの、正確には《天照》の魔力だった。

青年の右手には不可思議な物体が握られていた。

それは球の形を取っていた。毛糸のようなその表面に、虹色の輝きが波打つように揺らめき、本当に物体なのかどうか判別できない。

しかし、数値化で見るとそれは現実で見える以上に異様だ。

さまざまな種類の魔力が、その物体の中で渦巻いている。

あの六月ほどに莫大なわけではないが、それでも普通の魔術師では在り得ないような魔力量だ。

「何だ？ それは？」

シンラはほとんど無意識に問いかけていた。

だから回答がもらえるとは思ってもみなかった。

「魔生系ませいけい。こいつには俺が奪った魔力を溜めてある。今のはさっきの爆発の魔力だよ」

「魔力を、……奪った？」

理解を超える事態にシンラは無意識の内に唾を呑み込んだ。

舌なめずりしたい気分だった。

「成程。アナタ、噂の魔力強奪者エレメントステイラーね」

ヘルは剣を構え直しながら青年に問いかけた。

青年は不敵に笑った。

「魔力強奪者？」

「ええ。戦場に突然現れて魔術師を襲ったり、通り魔的に魔術師を襲撃してる犯罪者。そのコードネームが魔力強奪者。」

襲われた魔術師によると、魔力強奪者は青年。彼は魔力の剣で魔術を斬って消すらしいわ」

淡々と説明するヘル。彼女の顔からはどんな感情も伺えない。

だが、剣を握る手が微かに震えていた。

青年 魔力強奪者 は右手の魔生系を握るように包み込んだ。

すると、少し魔生系は少し発光してから、跡形もなく消え失せた。魔力強奪者は隙のない自然体な立ち方をして、ヘルに向けて告げる。

「氷は不足してたんだ。だから、ここで補充させてもらっぜ？」

? x ?

爆音を聞いた川瀬は素早く各所へ連絡を回した。

その中で、一部連絡の取れない場所へは自分の親衛隊を別けて送らせた。

「どうも爆発が起こるまで、敵の侵入に気付かなかつたらしい」
地上への階段を上りきる直前、川瀬は二段後ろを歩むアッセルに話しかけた。

「このビルは侵入者対策用に魔術的な結界と部外者の侵入を知らせる魔術が施されている」

アッセルは自身にもかけられた味方識別の魔術を思い出しながらその話を聞いていた。

「にもかかわらず、何故気付けなかったのか。考えられる可能性の中に一つ面白い話を聞かせてやろう」

川瀬が動いたその瞬間、アッセルの胸部に銃口が向けられていた。息を呑むほど洗練された動きだった。

しかし、アッセルは動じることなく川瀬の瞳を凝視していた。「貴様の組織が奴らを手引きしたという話だ」

鉄仮面のような冷たい無表情を保ちながら、引き金に指を掛ける。対するアッセルは静かに茶外套の中から日本刀を取り出し、一瞬で川瀬の脇へと潜り込んだ。

そして、

川瀬の背後に音も無く立っていた男の腹を刀の柄で突いた。

さらにアッセルは追い打ちで回し蹴りを見舞った。

蹴とばされた男は壁に叩きつけられ、そのまま動かなくなった。

「……」

無言で川瀬はアッセルへ銃を構えなおした。

「疑うのは勝手ですが、まずは状況を把握してからにした方がよろしいかと」

アッセルはそのまま背を向け、踊り場に飛び出した。

階段の入り口を挟むように二人の男が待ち構えていた。

アッセルは静かに茶外套の下から日本刀を取り出す。

男たちは持っていた槌ほどの大きさの紙をアッセルへ向けた。

その紙が妖しく輝いたと思ったその時には、炎の塊がアッセルへと撃ち出されていた。

しかし、アツセルの顔に動揺の色はなかった。
無言でアツセルは柄に手を添える。
目前に迫る二つの火球を斬る。

空気を裂くような音と共に、仄かに熱い空気が二人の男に吹き付けた。

彼らが見たのは炎に覆われる前と変わらず立ち続けるアツセルの姿。

驚愕に固まる二人に、追い打ちが待っていた。

耳をつんざくほどの銃声が鳴り響いた。

アツセルに向かって左側の男がゆっくりと崩れ落ちる。

もう一人の男が銃声のした方向 階段の入り口 を見ると、目前に名実ともに魔術師の頂点に立つ男が肉薄していた。

恐怖に体が強張ると同時に、冷たい刃が彼の腹部を貫いた。

彼ら三人の陰陽師は二〇秒もかからず倒されていた。

川瀬は男の腹部を突き刺した刃物のようなものを引き抜いた。

しかし、アツセルには刃物らしき血を啜った物体は見えなかった。

川瀬が持っていたものは青白い刀の柄のようなものだった。

それを 何か引っかけられるものでも着けているのか 腰の部分へ宛がった。

「チッ」

隠す素振りも見せずに川瀬は舌打ちし、アツセルに再び銃を向けた。

「お前は何者だ？ 魔術も使わずにどうやって火を消した」

川瀬が銃を向けたのは不信よりも恐怖に因った行動だった。

「カマイタチというのはつむじ風が起こす真空状態で物体を切断するそうです」

言いつつ茶外套を着た青年は肩を竦めた。

「抜刀術の奥義にはそのカマイタチを起こし、敵を斬るといふ技が

あるのです。それを応用すれば、一瞬ですが真空……つまり空気が存在しない空間を作ることが可能です。

火の燃料は酸素です。その供給を絶つてしまえば、火は消えます」
「屁理屈だな」

川瀬はそう一蹴した。

「術者から供給された魔力があれば、例え自然現象が魔術の発動を否定しようと、術者のイメージ通りに魔術は発動する」

そもそも、魔術は自然現象を完全に超越したものだ。

雷が発生し得ない環境にあつても、雷属性の魔力はその環境に成り代わり、雷を発生させる。

例え酸素の燃料が無くなつても、炎の魔力はその代わりの働きを果たして、炎が消えることはない。

もっとも術者のイメージを達成すればその後は自然現象になつてしまふ。

炎が敵に直撃すれば、あとは酸素を燃料に燃える。その時点で、既に魔術は自然現象に同化しているのだ。

しかし、無属性魔術に代表される魔術には影響を受ける。

魔力強奪者がシンラとヘルの魔術を防いだように、魔術同士ならそれは自然現象のように干渉し合うのだ。もっともこの場では関係のない話ではあるが。

致命的な矛盾を突くような川瀬の言葉に、しかしアッセルは余裕すらにじませながら首を振った。

「あの術が自然現象ならば？」

「何？」

怪訝そうにアッセルを睨む。

「貴方も情報を持つているでしょう？ 陰陽師が使うのは星の力。

つまりは自然の力なのですよ」

陰陽師は星の力を取り出して、不可思議な現象を起こすものだ。

「魔術は偽物の力を差し出して世界の不合理を合理とする術。陰陽術は環境を整えて世界を騙し、理不尽を押し通す術です。」

こちらとあちらは完全に分かたれているのです。故に、酸素の供給を絶たれた陰陽術の炎は消える」

「……」
川瀬は納得いかないようで、険しい表情を保ったままだった。

「信じられとは思っておりません。この戦いで我々が信用を勝ち取るだけです」

アツセルの瞳は川瀬のそれを揺らぐことなく一直線に見続けた。

再び舌打ちをして川瀬はホールに向けて歩き出した。

「少しでも不審な素振りをすれば、貴様らの命はない」
アツセルは肩を竦めてその姿を見送った。

??

し、死ぬ……。

死んでしまう。

その男の意識は死の恐怖に埋め尽くされていた。

右側には銃で撃たれた自分の仲間。

階段には格闘で倒された仲間。

そして自分は刃で刺された。

既に銃で撃たれた仲間は息絶えているようだった。

絶望的なほどの血液が床に溢れだしていた。

自分も決して少なくない量の血液を失っている。

一体何がいけなかったのか。

今の状態なら、自分たちは無制限に術を使える。

だがそんなことは関係なかった。

誤魔化しきれないほどの力量の差が存在したのだ。

この戦力で仕留めることは不可能だったのだ。

男は纏まらない思考の中、目端に茶外套の青年の姿を捉えた。
もう抵抗する力も出ない。
止めを刺されるのだろうか。

「……運がいい。あの男は殺すつもりだったろうに、まだ生きているとは」

いいものか。自分はここで生命を終える。貴様らの方が、よっぽど運がいい。生きている。そして、強い。

ここで死ぬ自分よりもよっぽど。

「さて、このままだと止めを刺せと言われそうだな。おい、お前。聞こえるならどうにかしてそれを教えろ」

なんなのだこの男は。とどこかで思いながらもゆっくり瞬きをした。

「判断能力はあるんだな。じゃあ訊こうか。ここで死ぬか。生きるか」

「……。
「時間がない。みつともなくても生きたいか、潔く死にたいか。答えろ。お前とまだ生きてるあそこの男の運命を」

唇が重々しく動いた。

「いいだろう。お前は選択した。それに従え」

茶外套を翻しながら青年が背を向けると同時に、男の意識は絶えた。

そしてその男たちを真っ白な光が、冥府の水のように呑み込んだ。

……それは果たして、悪魔の囁きか、天使の導きか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0150p/>

魔法の味はキスの味

2011年12月2日01時54分発行